上県町文化財調査報告書 第１集

大石原遺跡

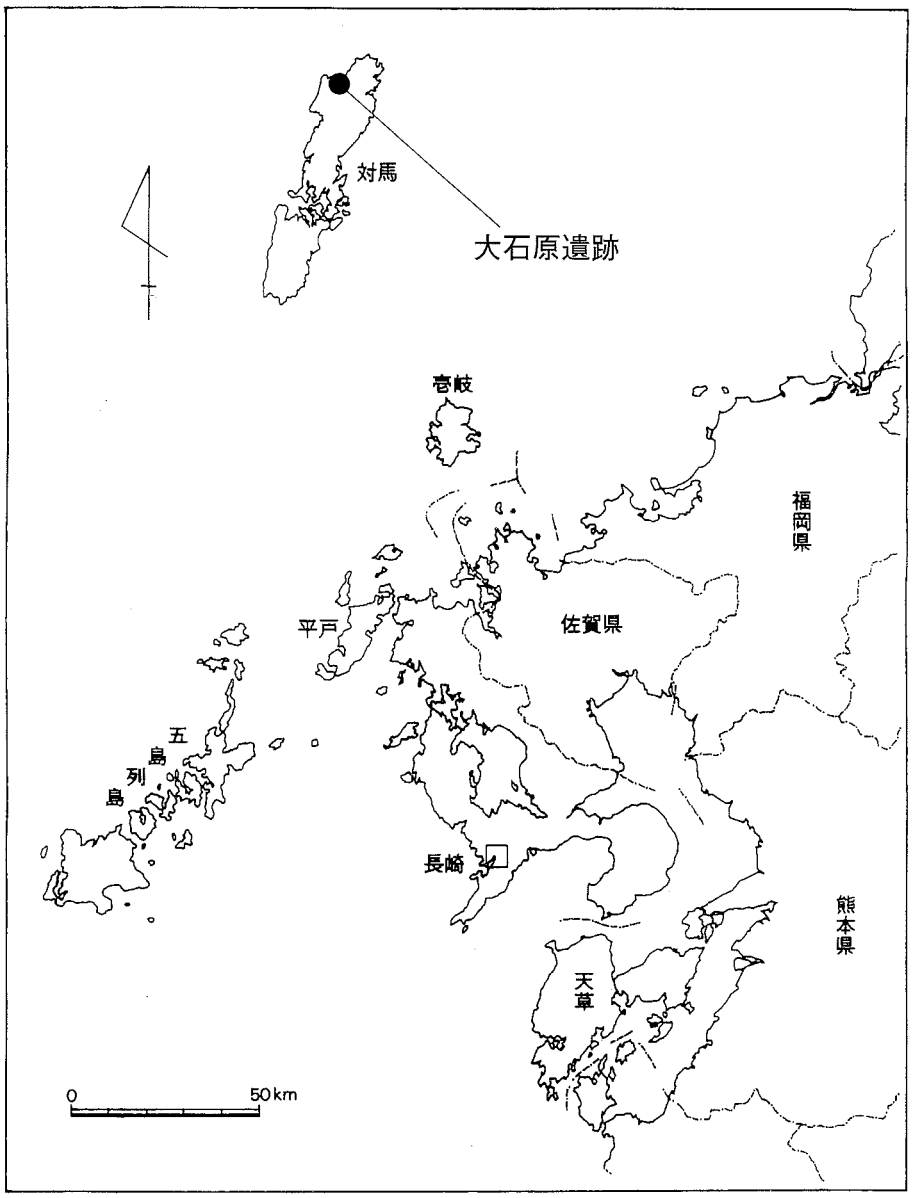
（おおいしばる）

１９９６

長崎県上県町教育委員会

上県町文化財調査報告書 第１集

大石原遺跡



発刊にあたって

このたび平成７年に実施いたしました上県町大石原遺跡発掘調査の結果を報告書として発刊することになりました。

上県町は平野が少ない対馬島にあってはめずらしく，肥沃な田畑に恵まれ，豊富な水産資源ともあいまって，農林水産業がさかんな町であります。さらに近年，ツシマヤマネコが棲息する町として全国的にも有名となりました。

また，本町は韓国にもっとも近い町であり，古くから大陸との関係が深く，長い歴史的交流の跡が歴史遺産として町のそこここに残っております。このたびの大石原遺跡もそのひとつといえましょう。

今回の発掘調査は町の農道整備事業にともなって実施したものですが，その結果，平安時代末から鎌倉時代にかけての建物跡や，当時の中国・朝鮮の陶磁器がたくさん出土しました。この時代の建物跡が発見されたのは対馬では初めてであり，これらの出土品は私どもの先人たちの面影を偲ぶ貴重な文化遺産であります。佐護川の上流に朝鮮や中国とも行き来した豪族がいたことが想像されますので，今後上県町の貴重な文化遺産として，この地の保存と開発との調和をはかっていきたいと思います。

最後に今回の発掘調査にあたり，ご協力いただきました県文化課ならびに地元関係者の皆様に心から感謝を申し上げ，発刊の挨拶といたします。

平成８年３月29日

上県町教育委員会教育長

小　宮　喜代人

例　　言

1．本書は，長崎県上県町屋敷畑に所在する大石原（おおいしばる）遺跡の発掘調査報告書である。本来は屋敷畑遺跡であるが，大石原遺跡に含めた。

2．調査は農道敷設工事に伴い，平成７年２月27日から同年３月17日まで実施した。

3．調査は上県町教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課が実施した。

4．本書の執筆は，本編を古門雅高が担当し，附篇は高野晋司と古門がおこなった。

5．出土遺物の実測は川脇イツ子・網谷泰代・森崎京子の協力をえた。

6．製図は斉藤いづみ・近藤千鶴と古門がおこなった。

7．本書関係の写真撮影は，調査中のものは調査担当者がおこない，遺物については新野貴昌がおこなった。

8．本書でもちいた方位はすべて磁北である。

9．本文中の柱穴に関する表記は以下のとおりである。　　Ｐ１　（１－１）
当該建物跡の柱穴番号　第１調査区の第１ピット

10．貿易陶磁の編年は山本信夫氏らによる大宰府編年を用いた。

11．本書関係の遺物は，報告書刊行後，上県町教育委員会に移管される予定である。

12．本書の編集は古門による。

本 文 目 次

Ⅰ．発掘調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．発掘調査の組織と構成 …… 1
Ⅲ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
Ⅳ．調査の概要 …… 4
　1．本調査の概要 …… 4
　2．基本層位 …… 4
Ⅴ．遺　　構 …… 6
　1．遺構出土状況 …… 6
　2．建物跡 …… 8
　3．溝 …… 17
　4．土坑 …… 22
Ⅵ．包含層出土遺物 …… 24
Ⅶ．総　　括 …… 31
　1．遺構について …… 31
　2．遺物について …… 32
　3．大石原遺跡における貿易陶磁の定量分析について …… 35
　4．壁土について …… 40
　5．獣骨について …… 40
Ⅷ．付　　編 …… 43

挿　図　目　次

第１図　大石原遺跡と周辺の遺跡・地形（ｓ＝1/100,000）……3
第２図　大石原遺跡調査区設定図（ｓ＝1/1,000）……4
第３図　土層図（ｓ＝1/60）……5
第４図　大石原遺跡調査区全体図（ｓ＝1/400）……6
第５図　１区遺構配置図（ｓ＝1/120）……6
第６図　２～４区遺構配置図（ｓ＝1/120）……7
第７図　１・２・３・４・５号掘立柱建物跡復元図（ｓ＝1/80）……8
第８図　１～３区のピット内出土遺物（ｓ＝1/3）……9
第９図　６・７号掘立柱建物跡復元図（ｓ＝1/180）……11
第10図　８・９・10号掘立柱建物跡復元図（ｓ＝1/80）……12
第11図　４区のピット内出土遺物（ｓ＝1/3）……14
第12図　ＳＸ１（１号不明遺構）・ＳＤ２・３（２・３号溝）出土遺物（ｓ＝1/3）……17
第13図　４号溝実測図（ｓ＝1/60）……18
第14図　ＳＤ４（４号溝）出土遺物①（ｓ＝1/3）……19
第15図　ＳＤ４（４号溝）出土遺物②（ｓ＝1/3）……19
第16図　ＳＤ５（５号溝）出土遺物（ｓ＝1/3）……20
第17図　ＳＫ１・２（１・２号土坑）実測図（ｓ＝1/40）……22
第18図　３・４・５号土坑実測図（ｓ＝1/30）……22
第19図　ＳＫ１・４（１・４号土坑）出土遺物（ｓ＝1/3）……23
第20図　第３層出土遺物①（ｓ＝1/3）……25
第21図　第３層出土遺物②（ｓ＝1/3）……26
第22図　第１・２層出土の貿易陶磁①（ｓ＝1/3）……28
第23図　第１・２層出土の貿易陶磁②（ｓ＝1/3）……29
第24図　掘立柱建物跡復元図（ｓ＝1/400）……32
第25図　博多遺跡出土初期高麗青磁皿（ｓ＝1/3）……34
第26図　大石原遺跡出土陶磁器・土器組成グラフ……39
第27図　佐護小坂遺跡表採古鏡（ｓ＝1/2）……45
第28図　陶質土器・青磁・粉青沙器（ｓ＝1/2）……46
第29図　施釉陶器（ｓ＝1/2）……47

表　目　次

第１表　柱穴出土遺物一覧表……16
第２表　出土土器・陶磁器種類別数量表……37
第３表　出土土器・陶磁器器種別数量表……38

図　版　目　次

図版①　調査区遠景・近景……51
図版②　調査区近景……52
図版③　大石原遺跡出土遺物①……53
図版④　大石原遺跡・佐護小坂遺跡出土遺物①……54
図版⑤　佐護小坂遺跡採集遺物……55
図版⑥　大石原遺跡・佐護小坂遺跡出土遺物②……56
図版⑦　大石原遺跡・佐護小坂遺跡出土遺物③……57
図版⑧　大石原遺跡出土の朝鮮製無釉陶器……58
図版⑨　大石原遺跡出土遺物②……59
図版⑩　大石原遺跡第１・２層出土高麗・朝鮮王朝陶磁器……60

Ⅰ．発掘調査に至る経緯

大石原遺跡は平成５年（1993）に佐護川流域の県営圃場整備事業に先立つ長崎県文化課（以下　県文化課）の分布調査によって，積石塚らしきものが発見されたことによって周知された遺跡である。

同年11月に県文化課による範囲確認調査が実施されたが，積石塚の周辺に遺物包含層を認めたのみで，その他の工事対象地からは包含層は認められなかった。この時の調査区域は，今回の調査地からは中山川をはさんだ対岸部にあたる。

今回の調査区域は，上県町大字佐護字屋敷畑に所在する。従って本来は屋敷畑遺跡とすべきであったが，大石原遺跡が広範囲にわたっていたことからその中に含めてしまった経緯がある。

今回の調査は，同遺跡が町営の団体営深山地区農道整備事業に伴う農道工事の範囲内に含まれるために実施したものである。まず平成７年１月30日から２月３日まで範囲確認調査を実施し，その結果工事にかかる遺跡部分のうち，設計変更等によって保存ができない部分の約250平方メートルについて改めて本調査を実施することとなった。

本調査は同年２月27日～３月17日に行なった。

Ⅱ．発掘調査の組織と構成

１．範囲確認調査

調査主体	上県町教育委員会	教育長	田村健二
調査総括		社会教育課長	佐護敏寛
		社会教育係長	佐護文正
調査担当	長崎県教育庁文化課	埋蔵文化財班係長（副参事）	高野晋司
調査協力	上県町農林振興課	主査	春日亀剛一

２．本調査

調査主体	上県町教育委員会	教育長	田村健二
調査総括		社会教育課長	佐護敏寛
		社会教育係長	佐護文正
調査担当	長崎県教育庁文化課	埋蔵文化財班係長（副参事）	高野晋司
		文化財保護主事	古門雅高
調査協力	上県町農林振興課	主査	春日亀剛一

Ⅲ. 遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第1図）

上県町は対馬の北西部に位置し，東は上対馬町，南は峰町に接する。町域は南北約20km，東西約10km，面積156.81km²で同じく対馬の厳原町につぎ，県下で2番目の広さである。人口は男2,322人，女2,441人，計4,763人，世帯数は1,649世帯である（平成8年2月末日現在）。

上県町の地形は，中央に御岳（みたけ・標高460m　上県郡内最高峰）を中心に大田隈山系が連なり，西側は丘陵地が続いている。この御岳を源流とする佐護川（6763m）や仁田川（5369m）は，対馬島では最長の河川である。本町の地質は，対州層群（泥質堆積岩よりなる第三紀層）を基盤層とし，この対州層の傾斜層の差別浸食によって，ケスタ地形が発達している。また，韓国が遠望できることで有名な千俵蒔山（せんびょうまきやま・標高287m）や先述の御岳はこの対州層群に貫入した粗粒玄武岩よりなる。

大石原遺跡は，上県町佐護に位置する。佐護川はその流域に対馬で最も広い沖積平野である佐護の原（はる）を形成している。本遺跡は佐護川の支流である中山川の右岸にあり，国道382号線に接する水田地帯に立地する。この地は屋敷畑（やしきばた）とも呼ばれており，以前，農道工事の際にも陶磁器片が出土し，中世集落の存在が予想されていた所であった。標高は約8mである。以前は畑地であったらしく，調査区域には水田への改良時に排出した余剰土を盛った塚状の地形も存在した。

2．歴史的環境

上県町の原始・古代遺跡からは朝鮮半島との交流を示す遺物が数多く出土する。現在まで旧石器時代の遺跡は発見されていないが，縄文時代の遺跡としては越高遺跡・越高尾崎遺跡・夫婦石遺跡がある。いずれも朝鮮半島の新石器時代の土器と日本の縄文土器が共伴しており，両国の土器編年を考える上で重要な遺跡である。志多留貝塚は縄文後期の貝層と弥生前期～中期前半の包含層があった。弥生時代になると青銅製品の出土が顕著である。佐護クビル遺跡は石室（宗教的特殊埋納遺構の可能性もある）から銅鍑と銅矛4点が出土した。銅鍑とは釜の一種で，金関恕の研究により楽浪郡製のものと判明した。国内では唯一の出土品である（大阪府立弥生博物館1995）。佐護白岳遺跡でも積石のなかの石棺から青銅製品が出土している。古墳時代にはいると志多留貝塚を見下ろすような場所に大将軍山古墳がつくられた。内部主体は箱式石棺で中国製の銅鏡が出土した。墳丘は不明であるが，副葬品から4世紀代の古墳とされる。大将軍山古墳の麓には千人塚とよばれる積石塚ものこる。

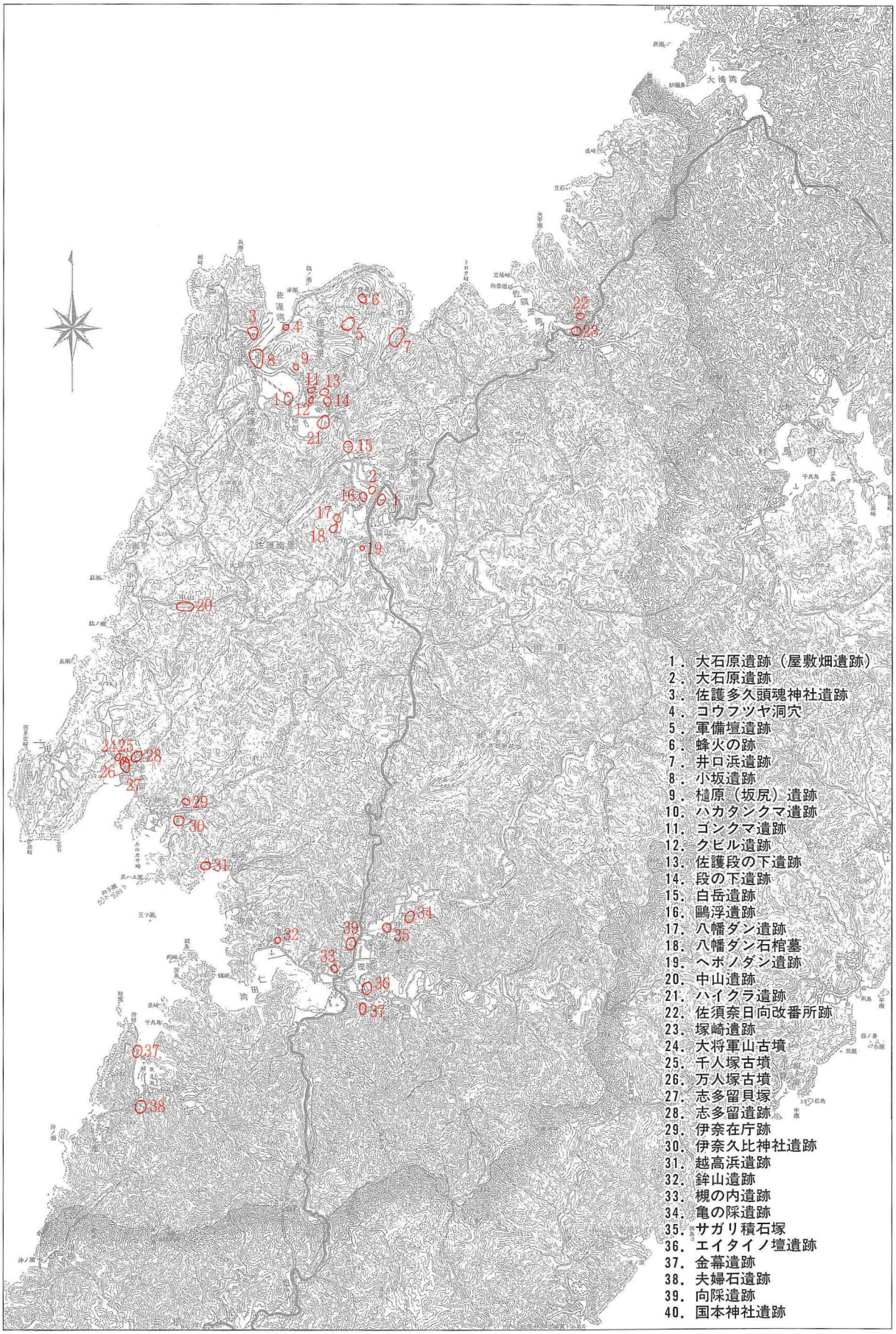
大石原遺跡がある佐護一帯は平安時代につくられた『和名類聚抄』（和名抄）に記載された「上縣郡」の「佐護郷」に比定されており(註1)，「上縣郡」の中心地ともいわれている。

［註］

註1　永留久恵によると古代の対馬では「上県郡6郷，下県郡6郷」が復元され，「12郷の各主邑にはすべて古墳または古墳時代の主要遺跡が認められ」古社をともなうという。そして「その古社がすべて式内社であるところに対馬の歴史の容易ならぬ重みがある」という（永留1990）

［引用・参考文献］

大阪府立弥生博物館1995「平成7年秋季特別展　邪馬台国への海の道一壱岐・対馬の弥生文化」大阪府立弥生博物館
瀬野精一郎・外山幹夫編1987『角川日本地名大辞典42長崎県』角川書店
永留久恵1990a「古代対馬の郡・郷制について」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集
永留久恵1990b「対馬の考古学」『海と列島文化第3巻　玄海灘の島々』小学館



第１図　大石原遺跡と周辺の遺跡・地形（Ｓ＝１／100,000）

Ⅳ．調査の概要

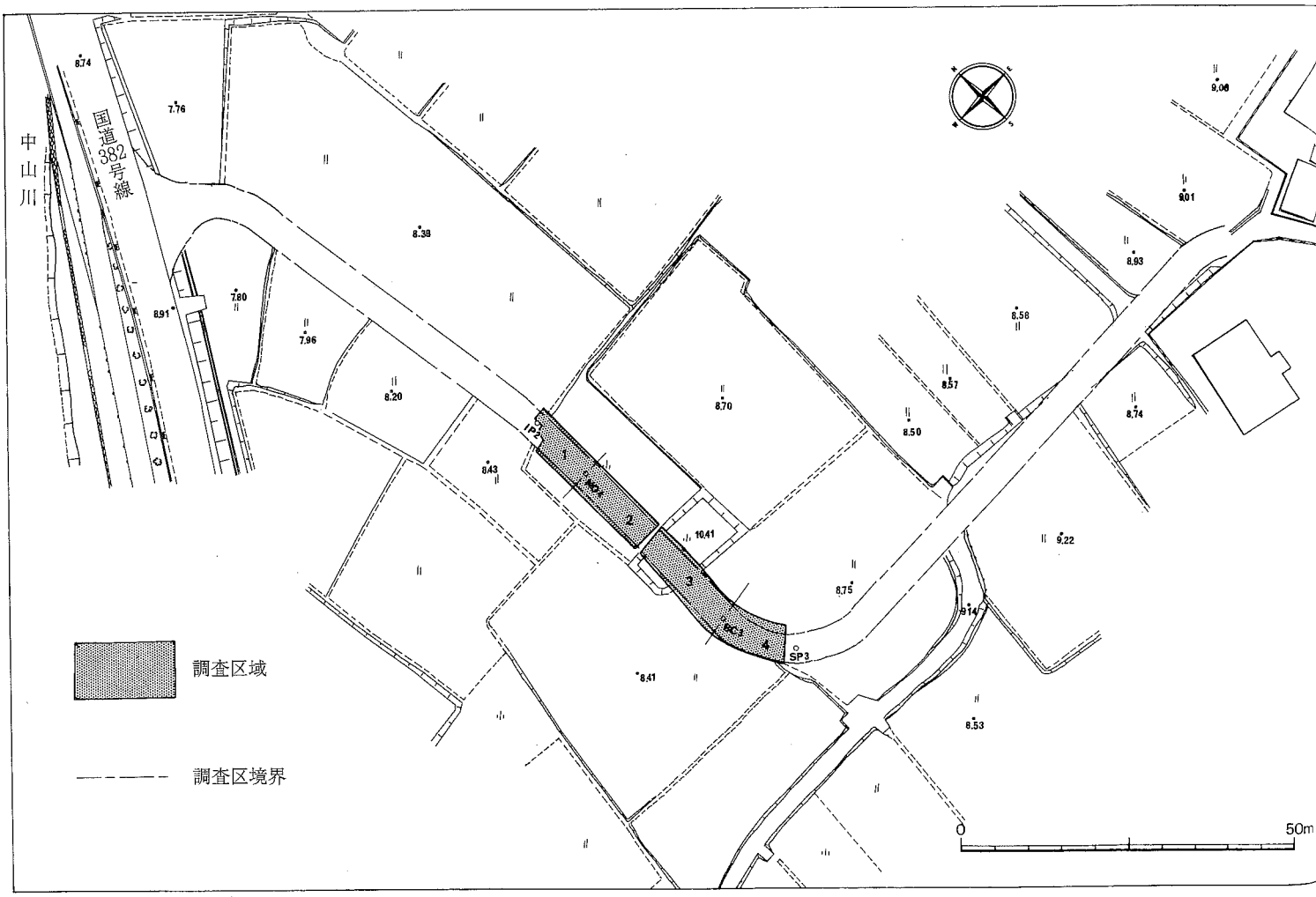
1．本調査の概要（第２図）

調査は，1995年(平成７）２月の範囲確認調査によって確認された，遺構ならびに遺物包含層について，路線にかかり，破壊されるおそれがある部分について実施した。具体的には，道路中心杭SP2(IP2 ）からSP3 の間である。調査区域は，計画された農道の路線形状に合わせ5.5 m×54mとし，北から任意に１区～４区の調査区を設定した。４区は路線のカーブにかかったため，南東方向へ屈曲するかたちとなった。

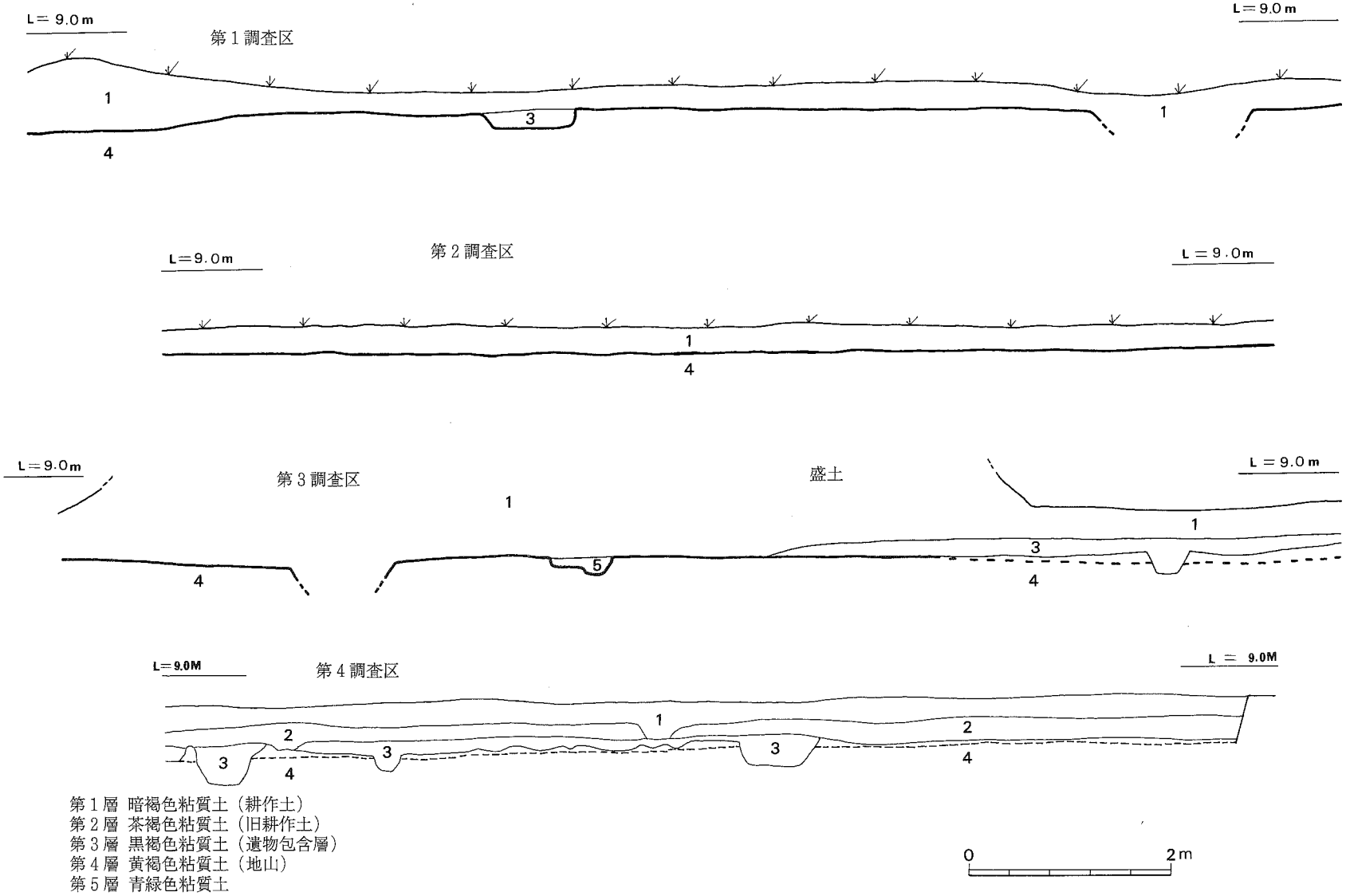
2．基本層位（第３図）

本遺跡の基本的な層序は，第１層が現在の耕作土で，第２層が旧耕作土である。第２層はおそらく水田改良以前の畑地の耕作土ではないかと考えている。第３層は黒褐色の遺物包含層である。第４層は黄褐色粘土の無遺物層で，本遺跡の地山である。

これらの土層のうち，１・２区では，後世の削平によって第３層（遺物包含層）が存在せず，４区の南側でも同じく失われていた。



第２図　大石原遺跡調査区設定図（S＝１／1,000）



第1層 暗褐色粘質土（耕作土）
第2層 茶褐色粘質土（旧耕作土）
第3層 黒褐色粘質土（遺物包含層）
第4層 黄褐色粘質土（地山）
第5層 青緑色粘質土

第3図 大石原遺跡土層図（S＝1／60）

長崎県教育庁埋蔵文化財調査室

Ⅴ.遺　　構

1．遺構出土状況

遺構としては，調査区全体で掘立柱建物跡（ＳＢ）10棟，ピット216，土坑（ＳＫ）５，溝（ＳＤ）５，性格不明遺構（ＳＸ）１を確認した。

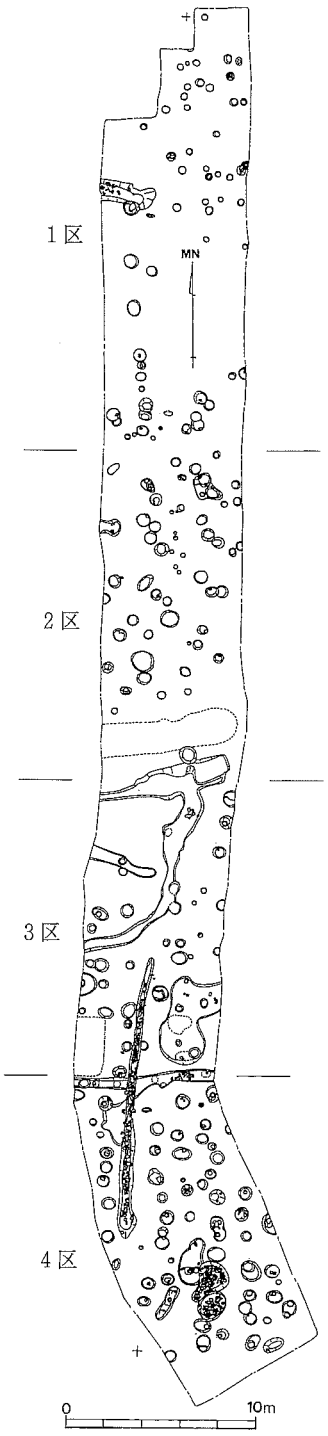
各調査区の概略は以下のとおりである。

１区は北側に直径20cm前後の比較的小さなピットが集中していた。西側の１号土坑からは輸入陶磁器が一括出土している。１号掘立柱建物跡は桁行４間で，梁間は不明である。

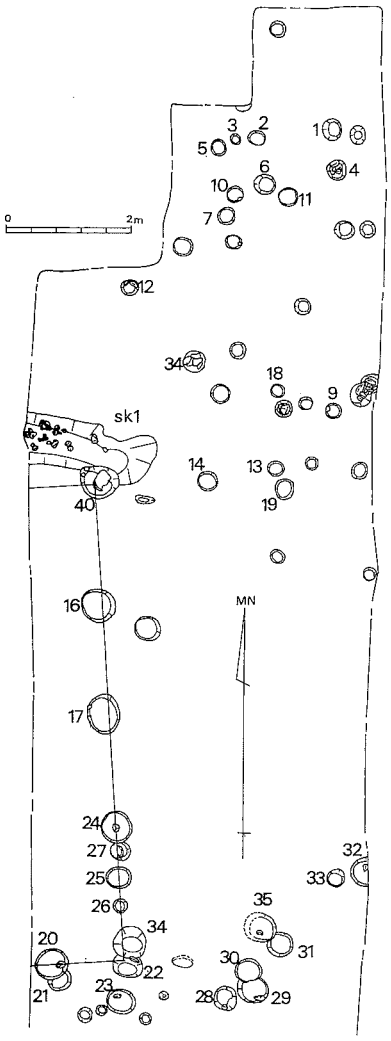
２区は，１間×３間の掘立柱建物跡１棟と，１間×２間の掘立柱建物跡３棟が，重複するように出土した。

３区は桁行４間で，梁間不明の総柱の掘立柱建物跡と桁行２間で，梁間不明の総柱の掘立柱建物跡を検出した。

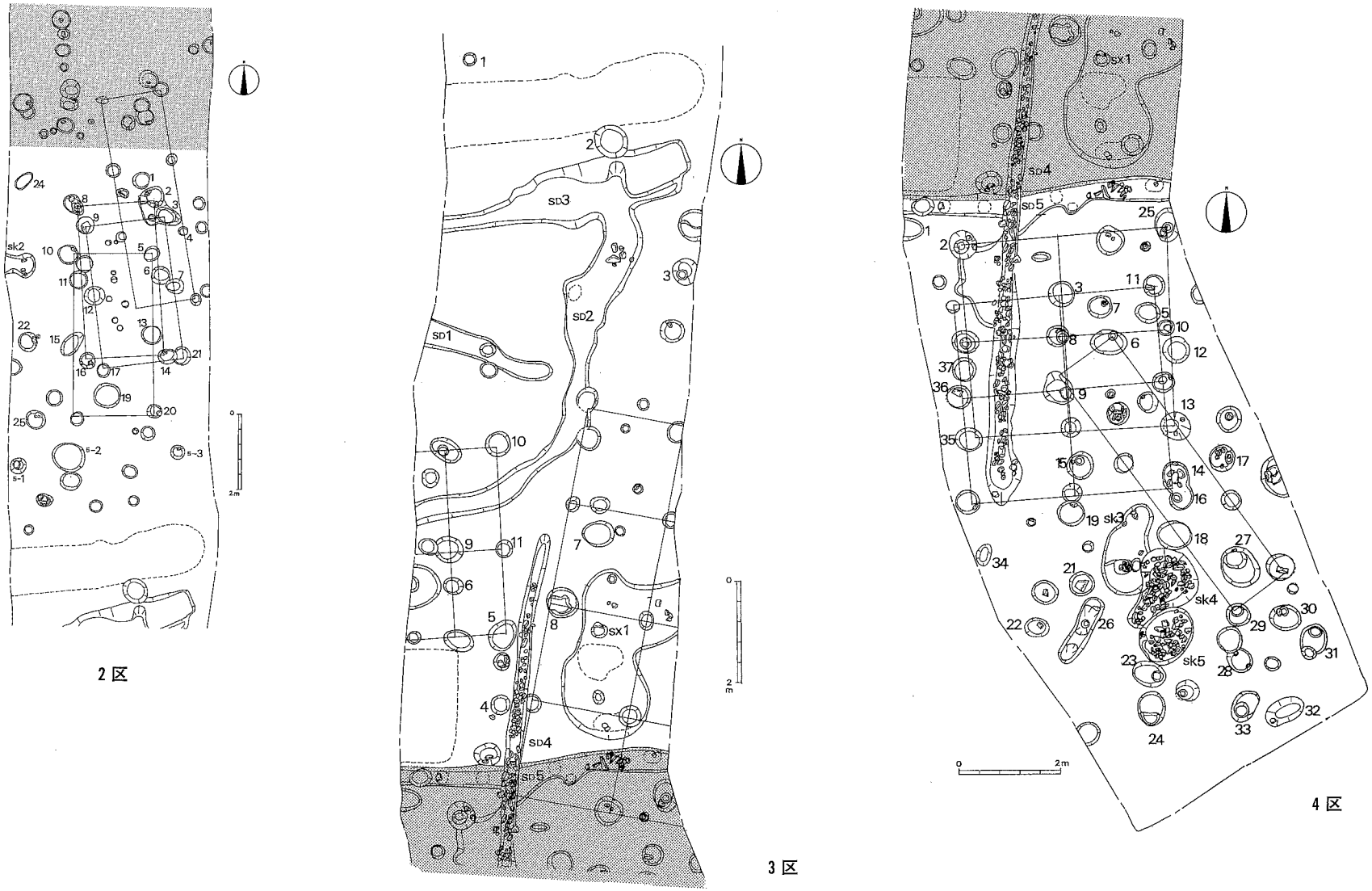
４区は，南北方向に走る長さ11m，幅30～40cm，深さ10cm程の溝を確認した。溝の中には長さ10～20cmほどの角礫が投げ込まれている。溝は雨垂溝と考えられる。４号溝は５号溝を切っている。また，２間×２間の総柱の掘立柱建物跡２棟と１間×３間の掘立柱建物跡が１棟出土した。さらに，土坑３基が互いに切り合う形で出土した。



第４図　大石原遺跡
調査区全体図
（Ｓ＝１／400）



第５図　１区遺構配置図
（Ｓ＝１／120）



第6図　2～4区遺構配置図（S＝1／120）

長崎県教育庁埋蔵文化財調査事務所

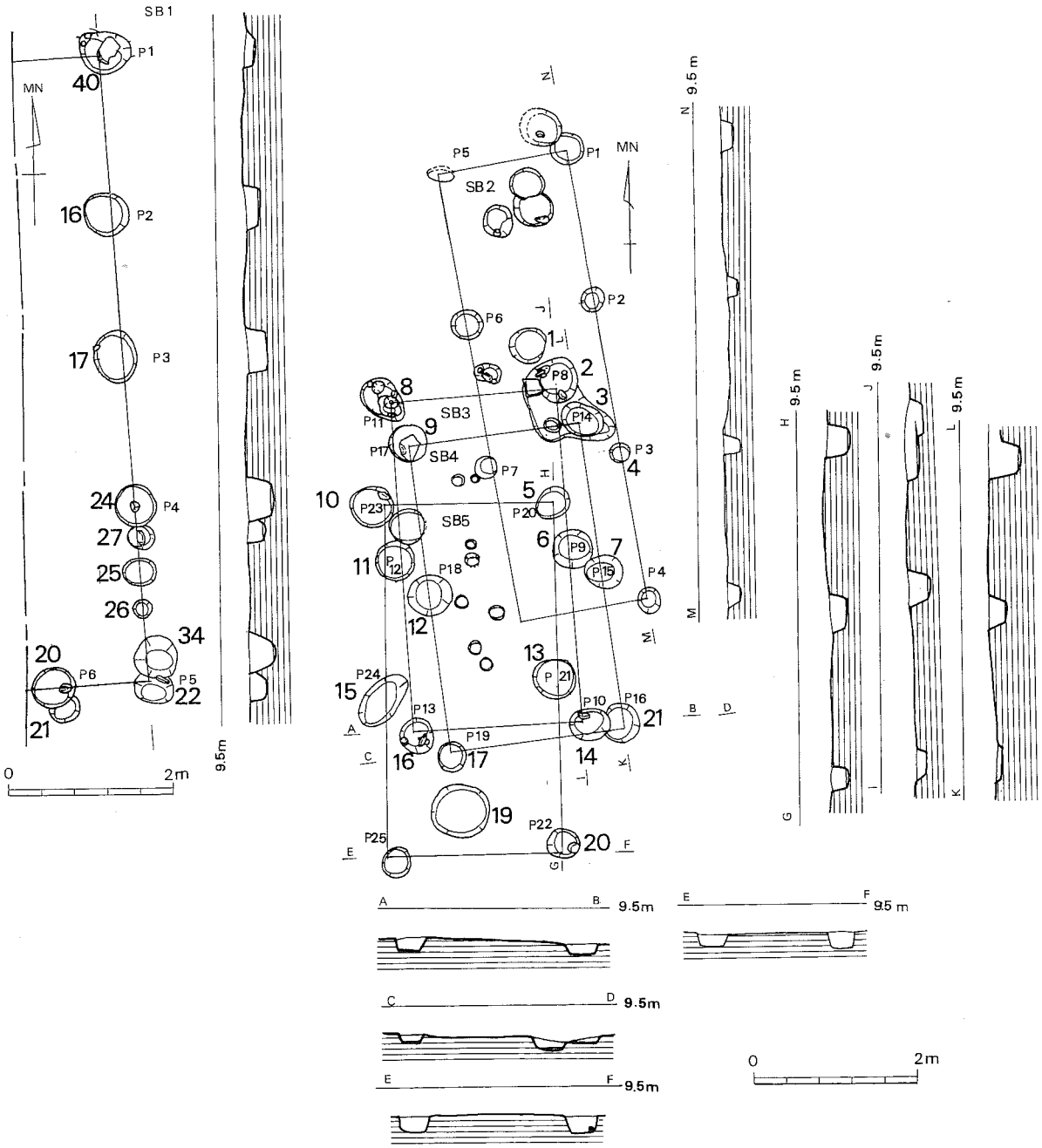
2．建物跡

(1) 1号掘立柱建物跡【SB1】(第7図)

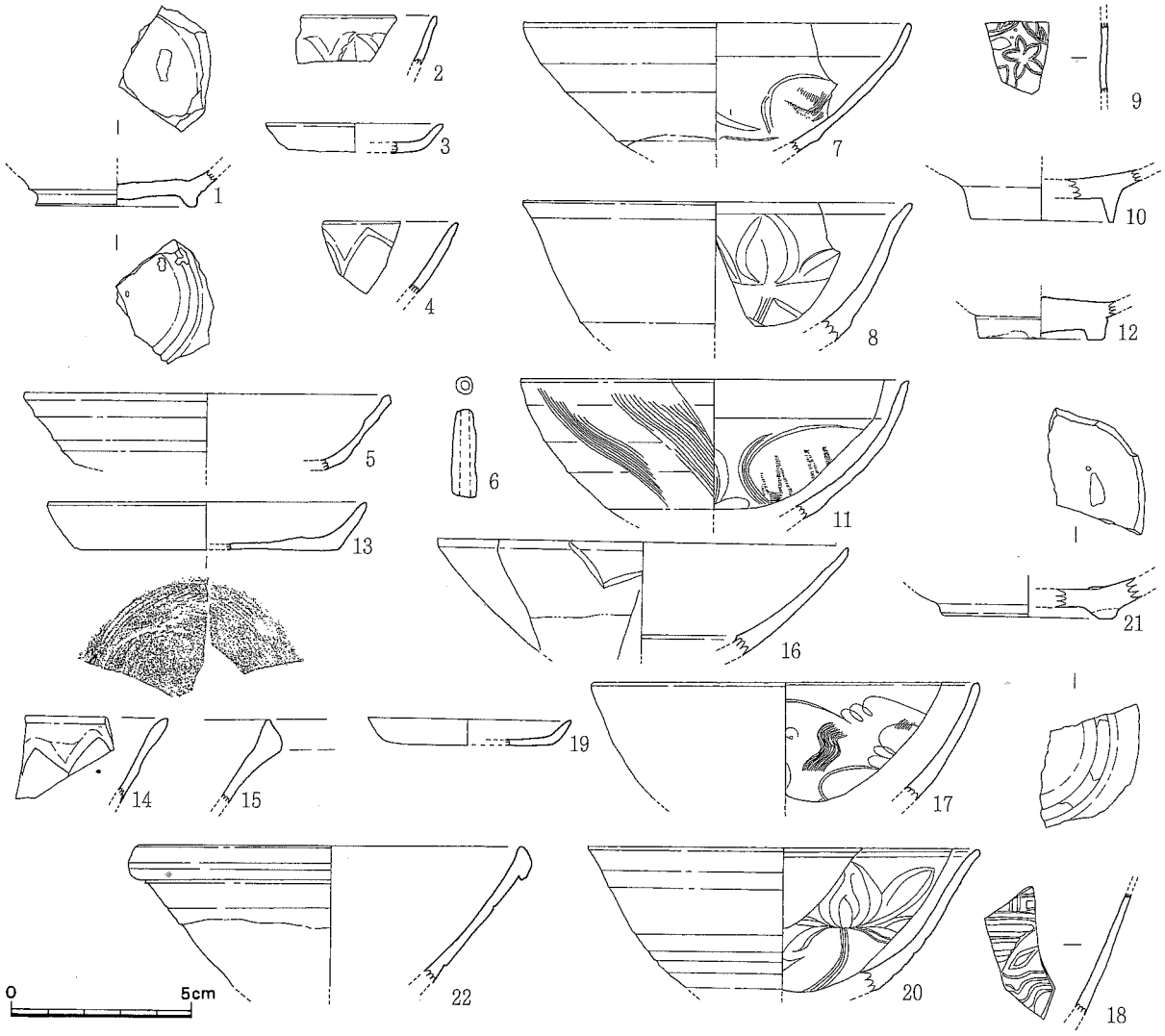
1区の西側隅に出土した。規模は南北4間で東西は不明である。南北棟と推定される。柱間寸法はP1—P2が2mと若干広いが，桁行となるP2～P5の柱間はそれぞれ約1.8mを測り，ほぼ等間隔に並んでいる。掘方はほぼ円形で，直径約50cm，深さ20～30cmである。桁行の方位はN4°Wである。

出土遺物（第8図・第1表))

龍泉窯系青磁（8）龍泉窯系青磁碗I—2d類片である。内面には蓮華文を配する。P4（1—24)



第7図　1・2・3・4・5号掘立柱建物跡復元図（S＝1／80)



第8図　第1～3区ピット出土遺物（S＝1／3）

から出土した。

同安窯系青磁（7）同安窯系青磁碗片でⅠ－1a類である。外面は無文であるが内面に櫛状施文具によるジグザグ文が施される。P5（1-22）から出土した。

土師器（3・5・13）いずれも坏である。**3**は復元口径7.3cm，器高1.2cm，底径5.4cmの小形坏でP3（1-17）から出土した。糸切り離し底であるが，細片のため底部の詳細は不明である。**5**は復元口径15cmを測り，P6（1-20）から出土した。胎土は精選され，色調は白黄色である。**13**は復元口径13cm，器高2.0cm，底径10.5cmである。底部には糸切り離し痕が残るが，ナデ消されているためロクロの回転方向などは不明である。P1（1-40）から出土した。土師器はいずれも12世紀後半から13世紀前半におさまる資料と考えられる。

土錘（6）P3（1-17）から出土した管状土錘である。

(2)　2号掘立柱建物跡【SB2】（第7図）

2区のほぼ中央に4棟重複したうちの1棟である。規模は東西1間，南北3間の南北棟である。南

西隅の柱穴は検出していないが，推定で復元をおこなった。柱間寸法は桁行のＰ１～Ｐ４は1.8m～1.9mで，Ｐ５～Ｐ７も同様である。梁間となるＰ１－Ｐ５の柱間寸法は1.35mである。柱穴の掘方はP5を除きほぼ円形で，直径は25cm～40cm，深さは北側が削平されているため15cm～20cmと浅いが，掘方底部のレベルはそろっている。桁行の方位はＮ９°Ｗである。

出土遺物（第１表）

Ｐ３（２-４）から中国製白磁片が出土したが細片で図示できなかった。

(3)　3号掘立柱建物跡【ＳＢ３】

規模は東西１間，南北２間の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行となるＰ８～Ｐ10およびＰ11～Ｐ13は2.0～2.1m，梁間となるＰ８－Ｐ11とＰ10－Ｐ13も2.1mである。柱穴の掘方はほぼ円形で，直径40cm～50cm，深さは10cm～30cmである。掘方底部のレベルは，梁間のそれはそろっているが，桁行のそれは不揃いである。柱材の直径はＰ11の掘方からみて18cm前後と推定される。桁行の方位はＮ３°Ｗである。Ｐ10とＰ16の切り合いから後述の４号建物跡より新しい時期のものと考えられる。

出土遺物（第１表）

龍泉窯系青磁片，同安窯系青磁片，北宋後半代の白磁片，高麗青磁片，土師器片などが出土しているが，細片のため図示できなかった。

(4)　4号掘立柱建物跡【ＳＢ４】

規模はＳＢ３と同様である。柱間寸法は桁行となるＰ14～Ｐ16およびＰ17～Ｐ19ともに1.8m～1.9mである。梁間となるＰ14－Ｐ17およびＰ16－Ｐ19は2.05～2.1mである。柱穴の掘方は楕円形から円形で30cm～45cmである。深さは10cm～25cmで，掘方底部のレベルは梁間のそれはそろっているが，桁行のそれは不揃いである。桁行の方位はＮ５°Ｗである。３号建物跡より古い時期のものである。

出土遺物（第８図・第１表）

龍泉窯系青磁（14）龍泉窯系青磁蓮弁文碗片で，鎬がないＩ－５ａ類である。P14（２-３）から出土した。図示できたのはこの１点のみである。その他に白磁碗片（Ⅳ類），同安窯系青磁片，朝鮮製無釉陶器片，須恵器片などが出土した。

(5)　5号掘立柱建物跡【ＳＢ５】

規模はＳＢ３・４と同じである。北側の梁間であるＰ20－Ｐ23は2.2m，南側のＰ22－Ｐ25は2.0mである。桁行となる東側のＰ20～Ｐ22および西側のＰ23～Ｐ25が2.1～2.2mとやや広い。柱穴の掘方はＰ24が楕円形であるほかは，ほぼ円形である。径は35cm～50cmで，深さは15cm～25cmである。梁間，桁行ともに柱穴の掘方底部のレベルはそろっている。桁行の方位はＮ０°Ｗである。

出土遺物（第８図・第１表）

中世須恵器（15）口縁部が肥厚する。東播系鉢の口縁部片である。P21（２-13）から出土した。森田編年の第Ⅱ期第２段階である。その他に北宋後半代の白磁片，高麗青磁片，朝鮮製無釉陶器片，土師器片などが出土したが，細片のため図示できなかった。

(6) 6号掘立柱建物跡【ＳＢ６】

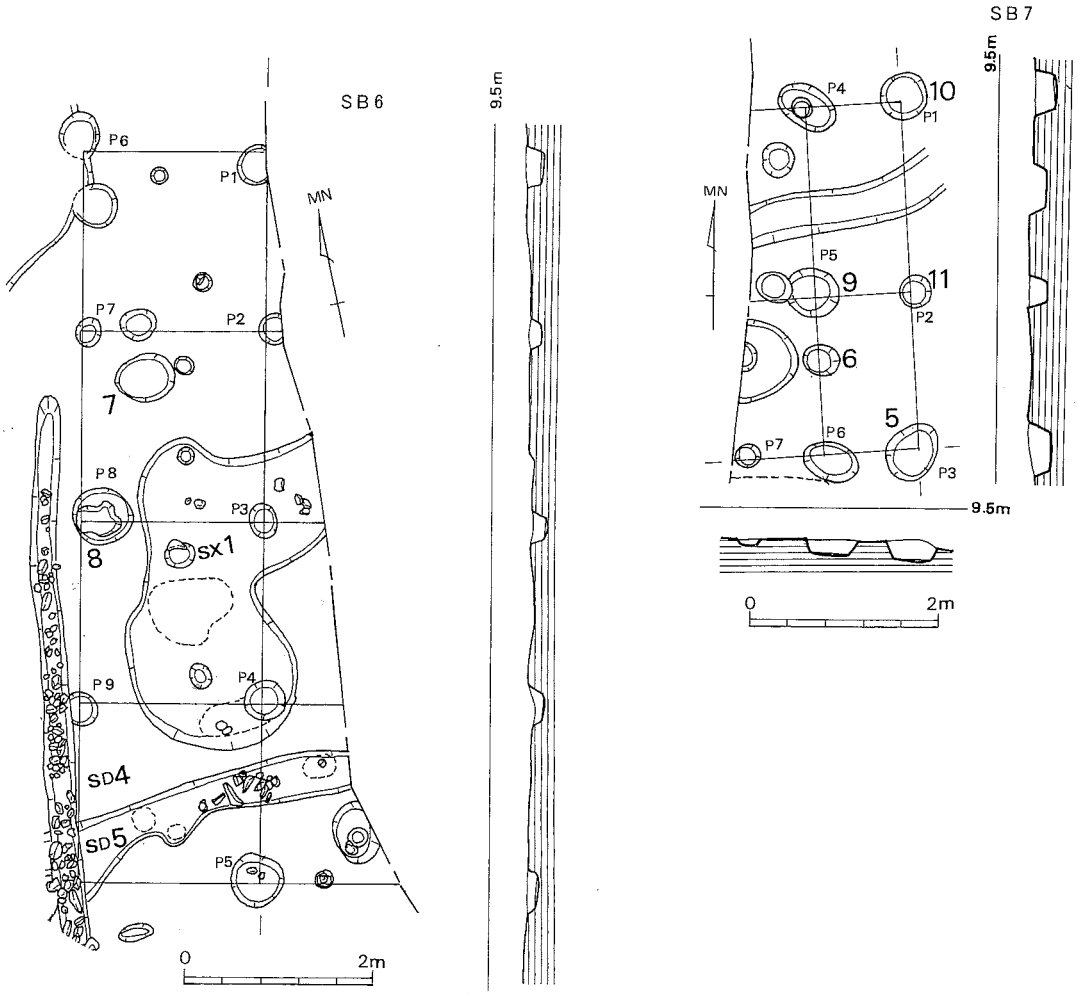
３区の東側に出土した。規模は東西２間以上，南北４間の南北棟であろう。規模からみておそらく総柱の建物跡と思われる。南西隅の柱穴は４号溝（ＳＤ４）によって削られ，Ｐ９も同溝によって切られている。柱穴間の寸法は桁行となるＰ１～Ｐ５およびＰ６～Ｐ９は1.9～2.0mで等間隔であるが，梁間となる柱穴は若干の出入りがある。柱穴の掘方はほぼ円形で，30cm～60cmである。掘方底部のレベルはほぼ揃っている。桁行の方位はN13°Ｅである。

出土遺物（第８図・第１表）

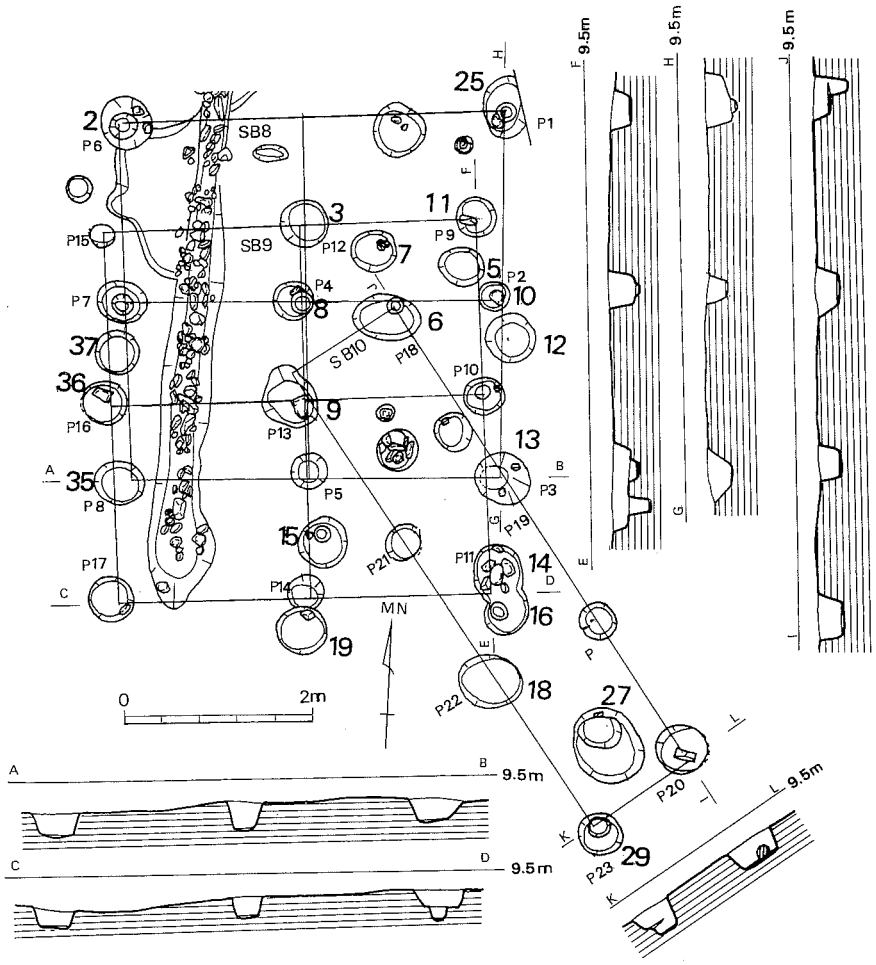
北宋後半代の白磁（22）白磁碗Ⅳ類片である。Ｐ８（３-８）より出土した。

(7) 第７号掘立柱建物跡【ＳＢ７】

３区の西側に出土したものである。規模は東西２間ないし１間，南北２間である。南北棟であろう。柱穴間の寸法は桁行となるＰ１－Ｐ２とＰ４－Ｐ５が2.0m，Ｐ２－Ｐ３とＰ５－Ｐ６が1.7mである。梁間は南北側ともに１mで揃っている。柱穴の掘方は30cm～60cmで楕円形もしくは円形である。深さは20cmほどで掘方底部のレベルもそろっている。柱材の直径はＰ４の掘方からみて約20cmであろう。



第９図　６・７号掘立柱建物跡復元図（Ｓ＝１／180）



第10図　8・9・10号掘立柱建物跡復元図（S＝1／80）

桁行の方位はN 4°Wである。

出土遺物（第8図・第1表）

高麗青磁（21）粗製の高麗青磁碗の底部片である。色調は灰緑色で，釉の光沢はない。復元高台径は7.2cmを測る。内外に白色の目跡をもつ。全面施釉ののちに畳付けの釉をふきとる。P 3（3-5）から出土した。その他に朝鮮製無釉陶器片が出土した。

(8)　8号掘立柱建物跡【SB 8】

4区の中央部に出土した。東西2間，南北2間の規模で，9号建物跡と重複する。いずれも総柱の掘立柱建物跡である。両者の前後関係を明確にすることはできない。梁間となるP 1－P 6の中間に位置すべき柱穴は確認していない。柱穴間の寸法は桁行・梁間ともに1.9～2.0mと等間隔である。柱穴の掘方はほぼ円形で，50cm前後のものが多い。柱穴の深さは25cm～30cmで掘方底部のレベルもよく揃っている。桁行の方位はN 2°Wである。

出土遺物（第11図・第1表）

北宋後半代の白磁（35）白磁碗Ⅳ類である。P 1（4-25）から出土した。同ピットからは口禿の白磁も出土しているが，この種の白磁は，今回の調査ではこの1点のみである。

同安窯系青磁（24）同安窯系青磁碗Ⅲ類片である。外面にヘラ状施文具により片彫り風の沈線がはい

る。内面は櫛状の施文具で花文を施す。Ｐ６（４－２）から出土した。

(9) 第９号掘立柱建物跡【ＳＢ９】

８号建物跡とほぼ同規模の２間×２間の総柱の建物である。桁行の方位はＮ５°Ｗである。

出土遺物（第11図・第１表）

北宋後半代の白磁（26・27）**26**は白磁碗Ⅳ類の底部である。Ｐ13（４－９）から出土した。**27**は白磁碗の口縁部片でⅣ類である。Ｐ９（４－11）から出土した。

青白磁(30)復元口径10.6cmを測り，外反する口縁をもつ。内面に片切彫りによる沈線をもつ。Ｐ11(４－16）から出土した。

朝鮮製無釉陶器（28・31・32・44）**28**は口縁部の破片で，Ｐ９（４－11）から出土した。**31**は器壁３㎜ほどで薄く，外面のタタキ痕はナデによって消され上半部の一部に格子状に残るのみである。内面の凹凸が激しい。**32**も器壁は薄く，３㎜ほどである。外面の水引き痕はナデによって消されている。内面の凹凸は顕著である。**31**と**32**はＰ11（４－16）から出土した。**44**は胴部片で，復元最大径26cmである。内外面ともに淡灰色をなし，工具によるナデ調整の凹凸が顕著である。器壁はきわめて薄い。断面の色も灰色である。

陶器（45）焼締陶である。外面は黒灰色となり，内面・断面ともに灰色である。朝鮮製無釉陶器に比べて器壁が厚い。須恵器とくらべると，胎土・成形が異なる。朝鮮製と思われるが，確実ではない。

中世須恵器（25）東播系鉢の口縁部片である。口縁部が拡張し，暗灰色を呈する。Ｐ12（４－３）から出土した。森田編年の第Ⅱ期第２段階におさまる資料であろう。

(10) 第10号掘立柱建物跡【ＳＢ10】

ＳＢ８・９に一部重なっている。規模は１間×３間と推定したが，北西隅の柱穴が未確認である。桁行となる柱穴間の寸法は1.7m～2.1mとばらつきがあるが，梁間となるＰ13―Ｐ18およびＰ20―Ｐ23は，ほぼ1.4mでそろっている。柱穴の掘方は楕円形ないし円形で径は40cm～60cmである。深さは25cm前後で，掘方底部のレベルはほぼそろっている。柱材の直径は20cm前後であろう。桁行の方位はＮ36°Ｗである。

出土遺物（第１表）

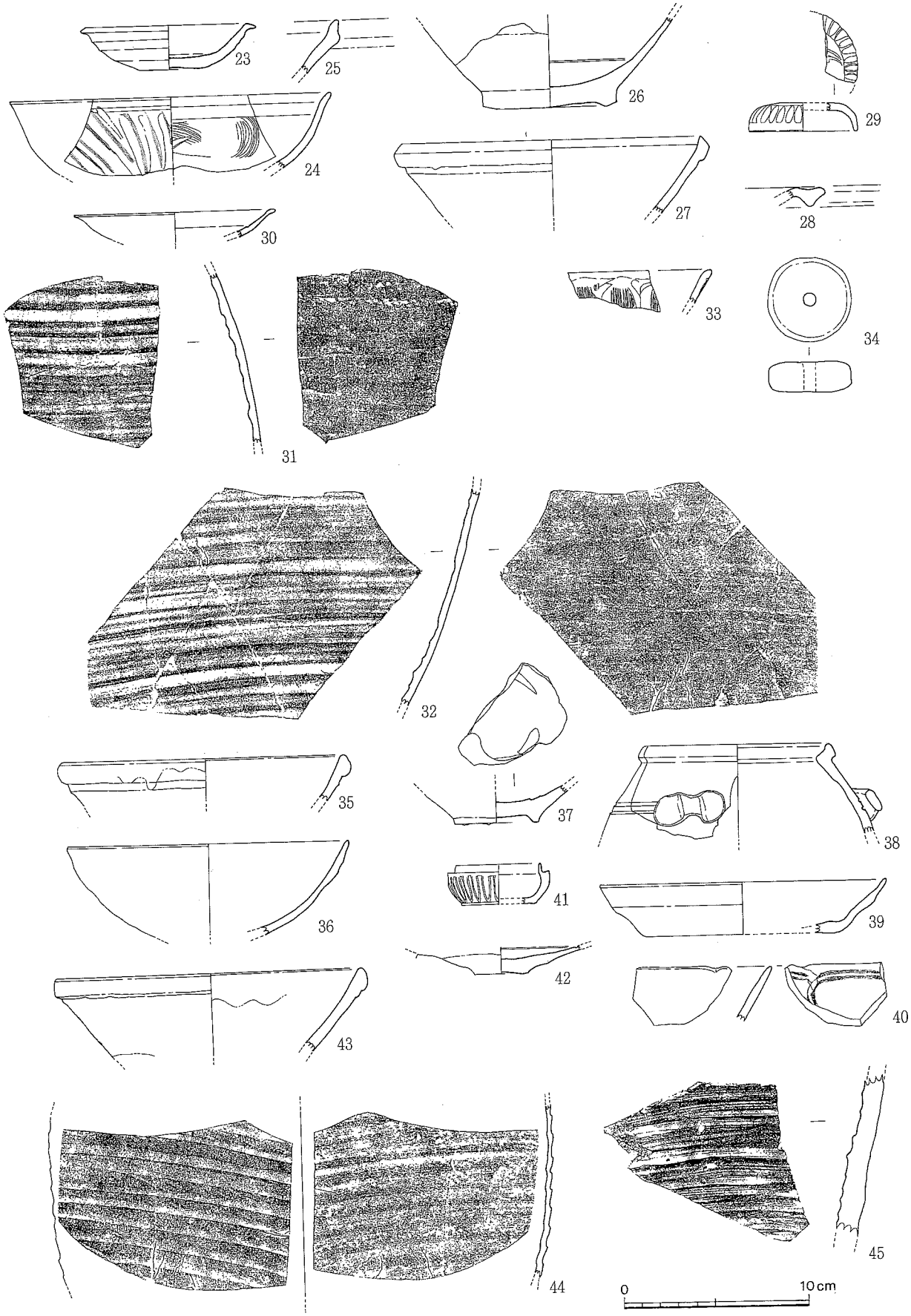
図示できるものは出土しなかった。

(11) その他のピット出土遺物（第８図・第11図・第１表）

北宋後半代の白磁（42）白磁皿Ⅵ－１類の底部片である。底部径は3.0cmで，やや上げ底状につくる。釉色は黄色味が強い白色である。釉下に化粧土を使用する。外面下半部には施釉されず，茶褐色に発色している。

龍泉窯系青磁（2・4・12・14・17・33・40）**17**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－３類片である。ヘラおよび櫛状のもので花文様を施す。**12**はⅠ類の底部片である。

2・4・14・33は蓮弁文碗片である。**2**は鎬をもつⅠ－５ｂ類で**4・14**は鎬がないもので，Ⅰ－５ａ類に属する。**33**は蓮弁をケズリだし，その上から櫛目を縦にいれるⅠ－６ｂ類である。**40**は碗Ⅰ－４ｂ



第11図　第４区ピット出土遺物（S＝1／3）

類の口縁部片である。２本の沈線によって体部内面を分割するもので，口縁部に輪花をもつ。

青白磁（９・18・29・41）**９・18**は型押しによるものである。**29**は平形合子の蓋で**41**は身である。いずれも菊座状の側面をもち，型作りである。**29**の天井部には草花文らしき文様がある。**29**は復元口径5.6cm，器高1.5cmである。**41**は復元口径4.4cm，器高2.1cm，底部径4.0cmである。**29**は口縁内部が露胎で**41**は底部と蓋受けの部分が露胎である。

高麗青磁（１・37）**１**は高麗青磁碗の底部片である。復元高台径6.6cmを測る。釉は淡黄緑色で，透明で光沢もある。全面施釉ののちに高台畳付けの釉をふきとっている。見込みと高台畳付けには砂状の目跡がのこる。高台畳付けの幅は一定しない。**37**は粗製の高麗青磁碗の底部片である。色調は灰緑色で高台径は4.5cmで小形である。内外に白色の目跡が残る。

施釉陶器（23・38）**23**は口径9.1cm，器高2.4cm，底径3.1cmを測る坏である。口唇部は拡張され，斜めに面取りされる。体部はヘラケズリの跡が残る。底部は上げ底である。釉は灰釉で外面に薄く，内面には厚くかかる。口縁部から体部にかけて一部釉が垂れる。峰町木坂海神神社弥勒堂遺跡では平底皿として報告されている（報文の第24図172）（安楽・阿比留1993）素地は淡褐色である。**38**は褐釉陶器製の四耳壺である。復元口径9.8cmを測る。胎土は灰色で，白色砂を含む。内外ともに施釉され，釉色は灰緑色を呈すが，外面は風化により灰色をなす。口縁部から肩部には褐釉が施されるが風化により色が落ちている。口縁部はくの字形に外反する。肩部に横型の四耳がつき，四耳付近には沈線が２本以上まわる。

土製紡錘車（34）直径4.5cm，厚さ1.4cm，重さ35ｇを測る。白黄色を呈し，中央に直径６㎜の穿孔がある。もう一方の穿孔付近には布の圧痕がみられる。

瓦器（36）復元口径15cmを測る口縁部片である。内面はナデ，外面は斜めにナデ痕がのこる。

土師器（19・39）**19**は復元口径9.0cm，器高1.1cm，底径6.7cmの小形坏片である。色調は黄橙色で胎土には砂粒が混じる。底部は糸切り離しである。２-24から出土した。**39**は復元口径15.3cm，器高2.8cm，底径10.4cmの坏である。色調は淡黄橙色である。底部は糸切り離しだが残存部は少なく，詳細は不明である。４-32から出土した。**19**は12世紀後半から13世紀前半，**39**は12世紀中頃から後半の資料と思われる。

第１表　柱穴出土遺物一覧表

pit	柱穴	出土遺物
1-06		白磁Ｖ類片1/朝鮮製無釉陶器片3
1-07		白磁Ⅷ類片1/朝鮮製無釉陶器片2/土師器片1
1-08		第8図1（高麗青磁片1)/土師器片1
1-09		第8図2鎬連弁青磁片1/土師器片（糸切離し底）1
1-12		北宋後半代の白磁片1
1-14		朝鮮製無釉陶器片1
1-15		北宋後半代の白磁片1/高麗青磁片1/不明陶器片2/北宋後半代の白磁片/朝鮮製無釉陶器片/朝鮮製無釉陶器片/施釉陶器片/同安窯系青磁Ｉ－２類）
1-16	SB1 P2	朝鮮製無釉陶器片1/施釉陶器片1/焼締陶片1
1-17	SB1 P3	龍泉窯青磁片1/第8図4鎬連弁片/鎬連弁片1/施釉陶器片2/朝鮮製無釉陶器片1/土師器片1/第8図3（土師器片）
1-19		須恵器片1
1-20	SB1 P6	白磁Ｖ類片1/龍泉窯青磁4/高麗青磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/土師器片3/土壁片8/第8図6（土錘）第8図5（土師器片）
1-21		白磁Ｖ類片1/龍泉窯青磁片1/土師器片1
1-22	SB1 P5	第8図7（同安窯系青磁碗Ｉ－１ａ類)/
1-23		北宋後半代の白磁片1
1-24	SB1 P4	龍泉窯青磁片1/高麗青磁片2/朝鮮製無釉陶器片1/中世須恵器片2/第8図8（龍泉窯系青磁Ｉ－２ｄ）
1-25		龍泉窯青磁片1
1-28		朝鮮製無釉陶器片1/土師器片2/第8図9（象嵌青磁）
1-29		北宋後半代の白磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/第8図10(北宋後半代の白磁）
1-30		高麗青磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/第8図11(同安窯系青磁Ｉ－１ｂ類)/
1-32		同安窯系青磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/土壁片1
1-33		土壁片1
1-34		朝鮮製無釉陶器片3/中世須恵器片2/土師器片1
1-35		第8図12（龍泉窯系青磁)/白磁Ⅳ類
1-40	SB1 P1	第8図13（土師器片坏）
2-01		北宋後半代の白磁片1/同安窯系青磁片1/龍泉窯系青磁片1
2-02	SB3 P8	龍泉窯系青磁
2-03	SB4P14	第8図14龍泉窯系青磁片（Ｉ－５ａ類）
2-04	SB2 P3	北宋後半代の白磁片1/施釉陶器片2
2-05	SB5P20	土師器片1/白磁Ⅳ類
2-08	SB3P11	同安窯系青磁片1/高麗青磁片1/土師器片2
2-09	SB4P17	白磁Ⅳ類片2/同安窯系青磁片1/朝鮮製無釉陶器片2/不明陶器片1/土師器片1/土壁片1
2-11	SB3P12	北宋後半代の白磁片1/朝鮮製無釉陶器片1
2-12	SB4P18	龍泉窯系青磁片1/朝鮮製無釉陶器片2/施釉陶器片1/不明焼締陶片1
2-13		朝鮮陶磁1/朝鮮製無釉陶器片1/第8図15（中世須恵器片）
2-15	SB5P24	北宋後半代の白磁片1/高麗青磁片2/朝鮮製無釉陶器片1
2-17	SB4P19	須恵器片1
2-18		朝鮮製無釉陶器片1/土師器片1/第8図16（北宋後半代の白磁）
2-19		朝鮮製無釉陶器片1/不明白磁片1/土師器片1
2-20	SB5 P2	高麗青磁片2 4-35
2-21		朝鮮製無釉陶器片1
2-22		土師器片1/第8図17（龍泉窯系青磁碗Ｉ－３類)/第8図18（青白磁）
2-23		高麗青磁片1
2-24		北宋後半代の白磁片2/朝鮮製無釉陶器片1/高麗青磁片1/第8図19（土師器片）
2-25		北宋後半代の白磁片3
3-02		朝鮮青磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/第8図20（龍泉窯系青磁Ｉ－２ｄ）
3-03		高麗青磁片2/白磁Ⅷ－２類1/
3-05	SB7P3	施釉陶器片1土師器片1/第8図21（高麗青磁）
3-06		龍泉窯系青磁片1/北宋後半代の白磁片2/施釉陶器片
3-07		龍泉窯系青磁片（Ｉ－５類）1/朝鮮白磁片1/不明陶器片1
3-08	SB6P8	第8図22（白磁碗Ⅳ類)/朝鮮製無釉陶器片1
3-09	SB7P5	朝鮮製無釉陶器片1
3-10	SB7P1	朝鮮製無釉陶器片1
3-11	SB7P2	朝鮮製無釉陶器片3/土壁片1
4-01		第11図23（施釉陶器）
4-02	SB8P6	石鍋片1/土壁片1/第11図24（同安窯系青磁碗Ⅲ類）
4-03	SB9P12	白磁Ⅳ類片1/白磁Ｖ類片1/北宋後半代の白磁片1/高麗青磁片1/不明陶器1/第11図25（中世須恵器片
4-05		朝鮮製無釉陶器片1/朝鮮白磁片1
4-06		北宋後半代の白磁片2/朝鮮製無釉陶器片1
4-07		北宋後半代の白磁1/龍泉窯系青磁皿片（Ｉ－２類）高麗青磁片1/朝鮮製無釉陶器片1
4-08	SB8P4	北宋後半代の白磁片1/
4-09	SB9P13	第11図26（白磁Ⅳ類）
4-10	SB8P2	北宋後半代の白磁片1/土師器片4
4-11	SB9P9	龍泉窯系青磁片（Ｉ－２類）10/白磁片Ⅵ類1/不明陶器片1/第11図28（朝鮮製無釉陶器片)/第11図27（白磁Ⅳ類）
4-12		白磁Ｖ類片1/北宋後半代の白磁片1/朝鮮製無釉陶器片7/施釉陶器片1/土師器片1/土壁片2/第11図29（青白磁）
4-15		北宋後半代の白磁片3/高麗青磁片1/土師器片1/
4-16		同安窯系青磁片1/白磁Ⅷ類片1/第11図30（青白磁）第11図32（朝鮮製無釉陶器片)/第11図31（朝鮮製無釉陶器片）
4-17		第11図33龍泉窯系青磁碗片（Ｉ－６ｂ類）1/高麗青磁片1/施釉陶器片1/土師器片3/土壁片4/第11図34（土製紡錘車）
4-18	SB10P2	龍泉窯系青磁片1
4-19		高麗青磁片1
4-20		高麗青磁片2/不明白磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/土師器片1/土壁片17/白磁Ⅳ類1
4-21		高麗青磁片1/土壁7
4-22		龍泉窯系青磁片（Ｉ－２類）1
4-23		龍泉窯系青磁片1
4-25		白磁Ｖ類片1/不明白磁1/龍泉窯系青磁片1/不明青磁片1/高麗青磁片2/不明陶器1/朝鮮製無釉陶器片1/須恵器片1/第11図35（白磁Ⅳ類
4-27		不明青磁片1/土壁片3/白磁Ⅳ類1
4-28		白磁Ｖ類片1/瓦器片1/第11図36（瓦器片）
4-29	SB10P2	白磁Ｖ類片1
4-30		白磁Ｖ類片1/北宋後半代の白磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/土師器片1/第11図37（高麗青磁片）
4-31		北宋後半代の白磁片3
4-32		第11図40（龍泉窯系青磁）龍泉窯系青磁片2/瓦質土器片1/土師器片1/第11図38（褐釉陶器片)/第11図39（土師器片坏）
4-33		龍泉窯系青磁片2/土師器片2
4-34		高麗青磁片1/不明白磁片1/土壁11/1004（白磁Ⅳ類
4-35	SB8P8	高麗青磁片1/不明陶磁片1/朝鮮製無釉陶器片1/第11図41（青白磁片）
4-37		第11図42（白磁ⅢⅥ－ｂ類）
4-38		北宋後半代の青磁片4
4-40		北宋後半代の白磁片2/龍泉窯系青磁2/朝鮮製無釉陶器片2/土師器片2/施釉陶器片1/粉青沙器片1/高麗青磁片1/同安窯系青磁皿Ｉ－２類1/高麗青磁片1/施釉陶器片1/不明陶器片1/第11図43（白磁Ⅳ類）
4-41		朝鮮製無釉陶器片1
4-42		第11図44（朝鮮製無釉陶器片）
4-52		第11図45（朝鮮製無釉陶器片）

3．溝

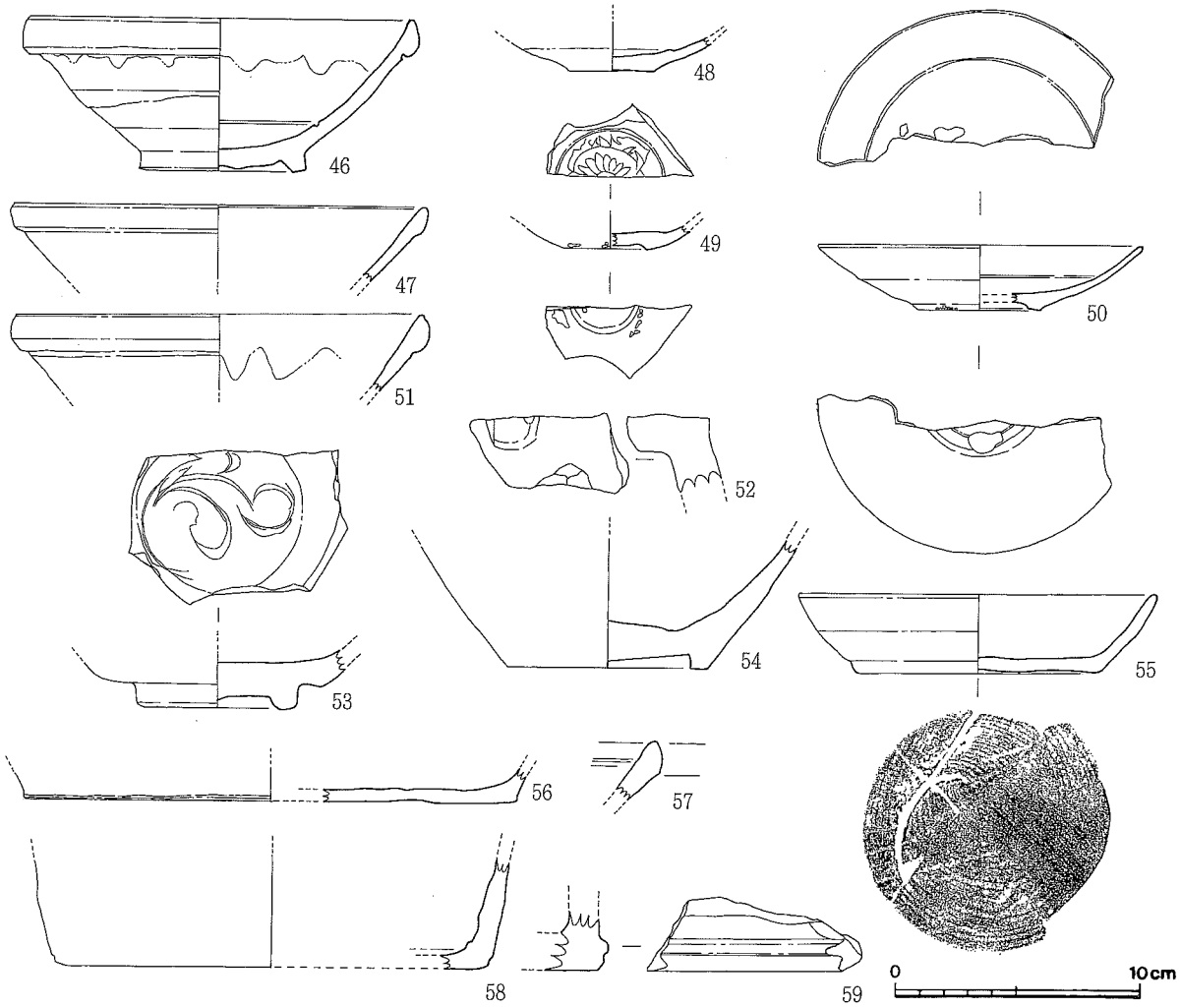
(1) 性格不明遺構【ＳＸ１】

不定形の落ち込みである。東西はもっとも長いところで2.0m，南北は3.2mで，深さは7.0～10.0cmと浅い。

出土遺物（第12図・図版⑥⑦）

北宋後半代の白磁（46・47・48）**46**は白磁碗Ⅳ－１ａ類である。玉縁状の口縁部をもち，外面体部下半は露胎である。内面底部見込みにも半分ほど無釉の部分がみられる。さらに内面見込には円形の窪みがあり，器表面には貫入がみられる。**47**も白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。**48**は白磁皿Ⅴ類の底部片である。底部から直線的に外上方にのびる。内面見込みには段を有する。

高麗青磁（49・50）**49**は内面に型押しの浮彫文を施す皿である。底部は碁笥底で，畳付けの部分は釉を一部ふきとり，茶褐色を呈する。底部には白色の目跡が残る。**50**は復元口径13cm，器高2.7cm，高台径5.0cmを測る。色調は緑色で後述する**102**と同系色である。高台は切り込みが浅く，**72**と同様に内側に向かって面取りをしている。高台内部まで釉がかかり，**72**のように高台畳付けが茶褐色に発色する



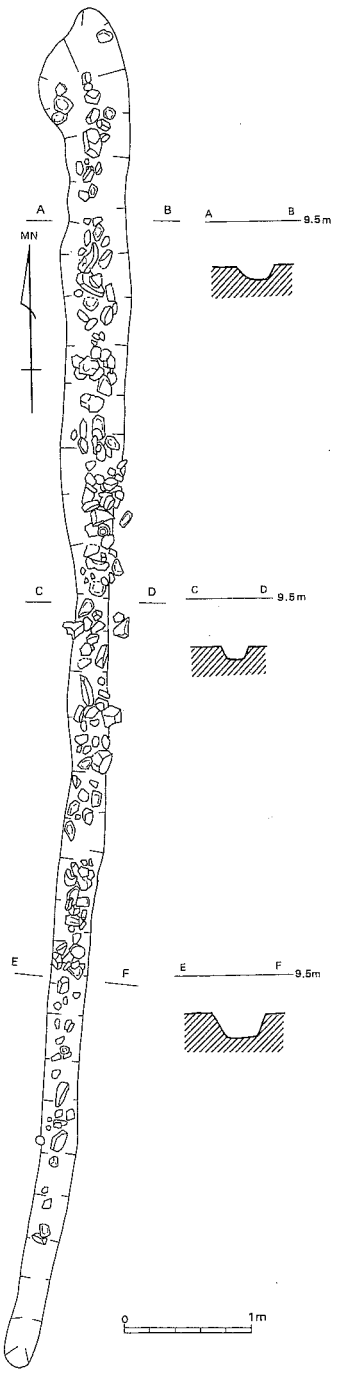
第12図　ＳＸ１・ＳＤ２・３（２・３号溝）出土遺物（Ｓ＝１／３）

ことはない。内面見込みと高台畳付けには砂状の目跡が残る。内面中位に浅い段をもつ。

石鍋（52）方形の耳をもつ石鍋片である。再利用のために耳の上部を水平に切断している。外面には煤が付着している。木戸編年のII類，森田編年のA類に属するものであろう。

(2) 第1号溝【SD1】（第6図）

東西方向に延びる溝で，東端のみを確認した。幅30cm～40cm，深さ6.0cmほどで，浅い。出土遺物はなかった。



第13図 SD4（4号溝）実測図（S＝1／60）

(3) 第2号溝【SD2】（第6図）

第3区の中央にあり，南から次第に西へと蛇行している。幅は30cm～100cmで，深さは8.0cm～15cmほどである。

出土遺物（第12図・図版⑨）

北宋後半代の白磁（51）**51**は白磁碗IV類の口縁部片である。

龍泉窯系青磁（53）龍泉窯系青磁碗I－4類の底部片である。高台畳付およびその内部は露胎である。内底見込みに「キノコ状の文様」を3個片彫りしている。

施釉陶器（54・56）**54**は復元高台形8.0cmをはかる。高台内部は深く切り込まれているが外部は直接，体部に続く。釉は灰色で全面に施釉される。内底部付近には水引の痕跡が顕著に残る。素地は淡赤褐色である。**56**は底部復元径20cmを測る。ベタ底で器壁は薄い。内面は無釉であるが，外面は灰釉の下地に茶褐色の釉がかかる。素地は淡赤褐色である。

土師器（55）口径14.4cm，器高3.3cm，底径10cmの坏である。底部は糸切り離しでロクロの回転方向は左である。13世紀前半ころのものと考えられる。

(4) 第3号溝【SD3】（第6図）

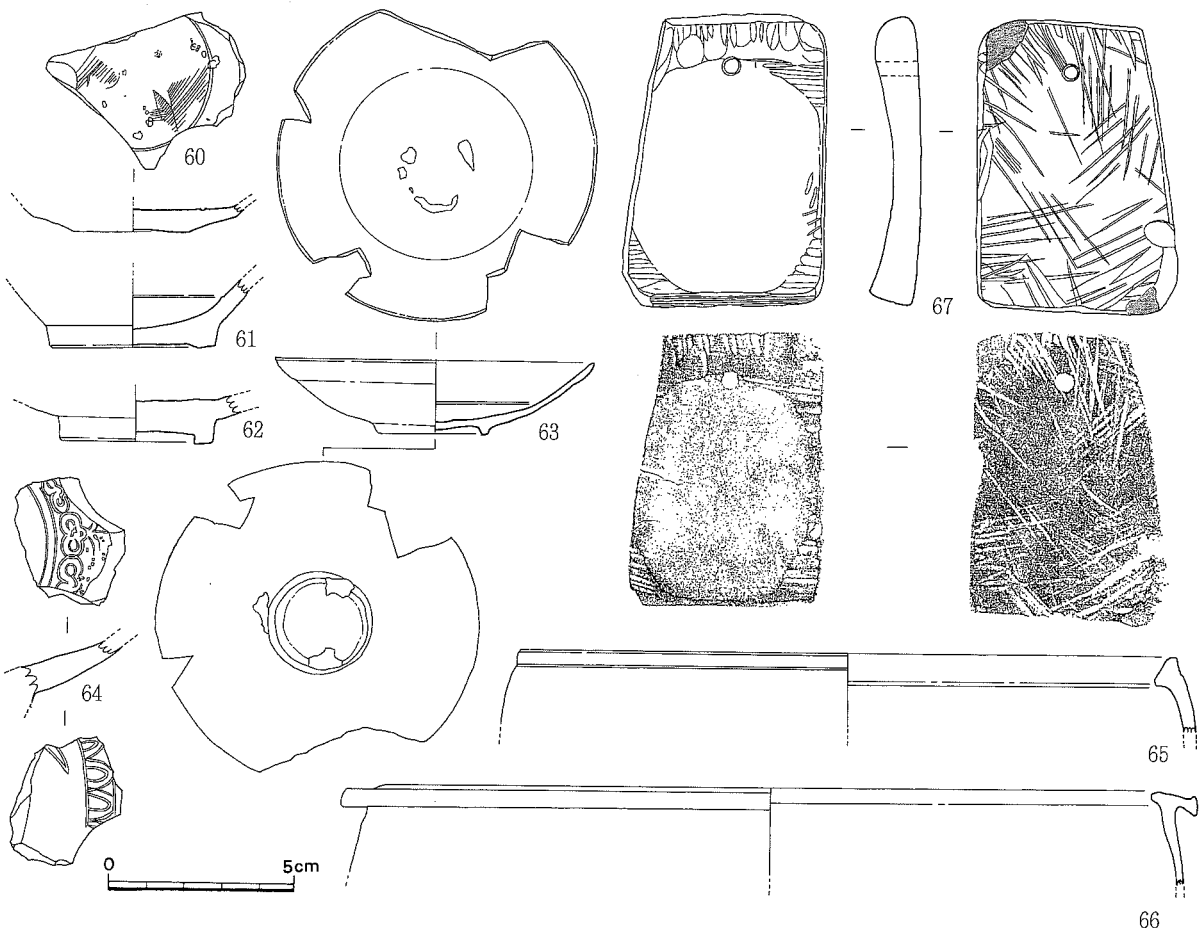
第2号溝との分岐点から西に延びる溝である。幅は40cm～110cm，深さ10cmほどである。

出土遺物（第12図）

中世須恵器（57）東播系鉢の口縁部片である。口縁部は拡張し，重ね焼きのため暗灰色を呈する。森田編年の第II期第2段階と思われる。

中国陶器（58）復元底径17cmの円形平底の底部である。内外に黒褐色の釉が施され，断面は小豆色をなす。

瓦質土器（59）器形は不明であるが，角底の深鉢形土器の底部かと思われる。断面半円形の突帯が一条巡る。



第14図　ＳＤ４（４号溝）出土遺物①（Ｓ＝１／３　67のみ１／２）

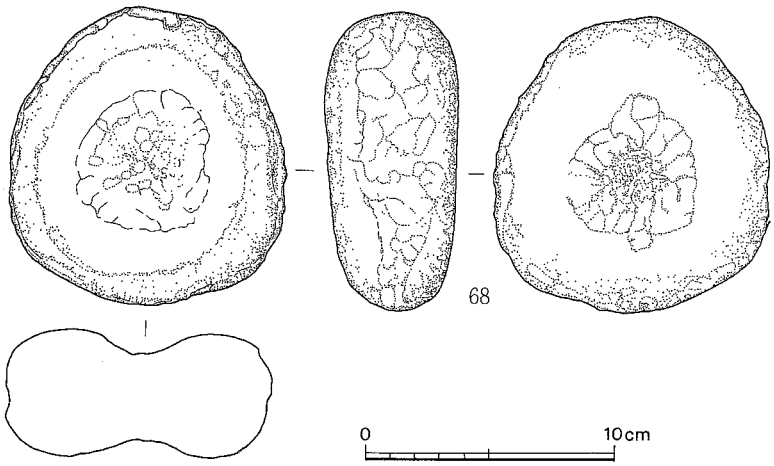
(5)　第４号溝【ＳＤ４】（第13図）

雨落ちの溝と思われる。第４区にあって，東西に延びる。長さ10.6m，幅30cm～70cm，深さ10cm～20cmである。溝のなかには5.0cm～20cmほどの角礫が投げ込まれている。溝の中からは柱穴が検出されるため，一部の柱穴を壊して掘られたものと考えられる。第５号溝を切る。

出土遺物（第14・15図，図版③⑥⑨）

北宋後半代の白磁（61）**61**は白磁碗Ⅳ類の底部である。高台の削り込みがきわめて浅い。

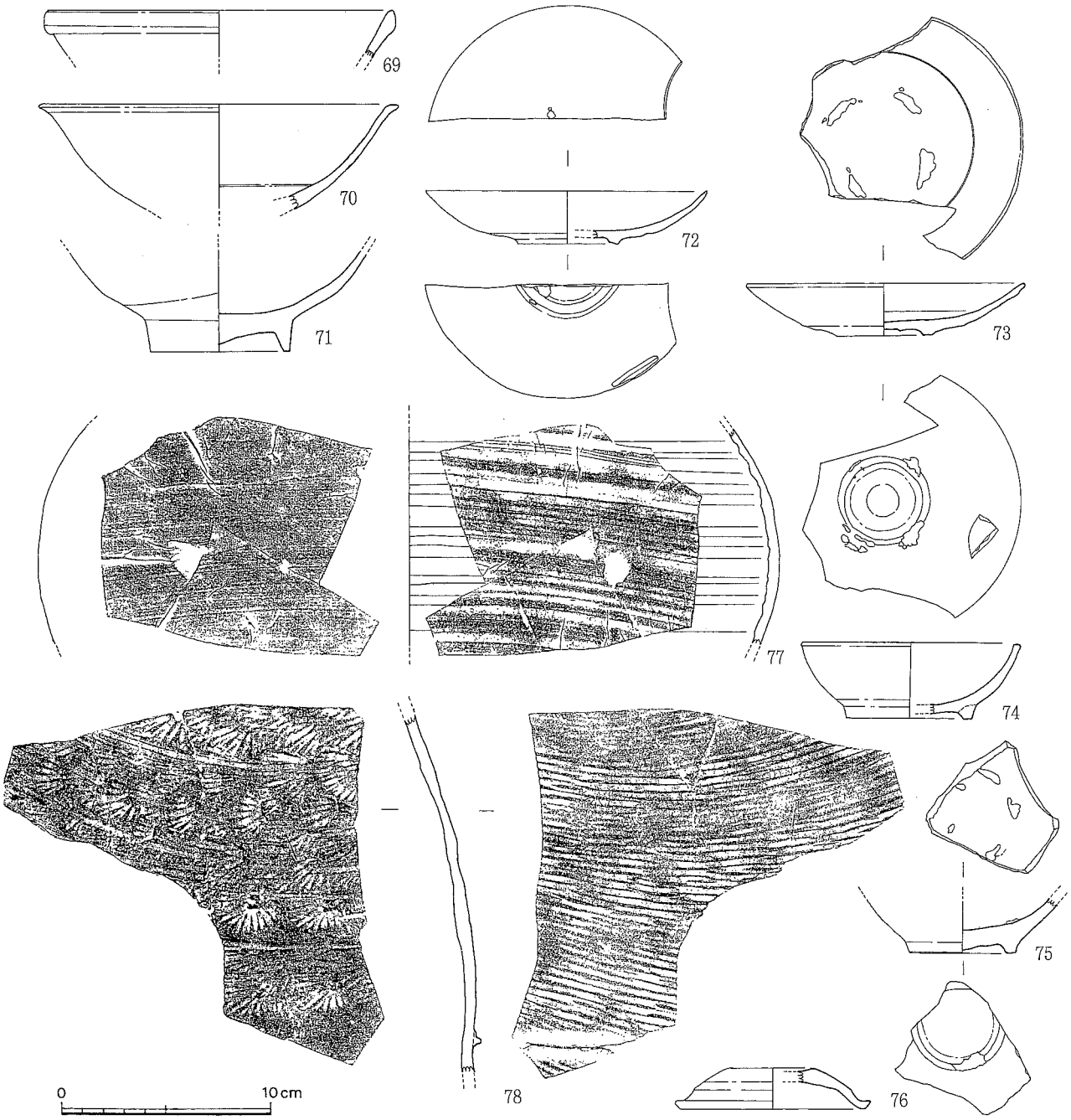
龍泉窯系青磁（60・62）**60**は皿Ⅰ－２類片である。内面見込みには櫛目の文様が入る。外底部は釉をカキとっている。**62**は龍泉窯系青



第15図　ＳＤ４（４号溝）出土遺物②（Ｓ＝１／３）

磁碗Ⅰ類の底部片である。

高麗青磁（63・64・65）**63**は高麗青磁の皿である。口径12.6cm，器高2.9～3.0cm，高台径4.3cmを測る。色調は**72**に似る。青磁釉の裏は茶褐色に発色している。そのため，青磁釉がはがれた部分にそれがのぞく。高台畳付けは無釉で茶褐色を呈し，鉄足化している。内底部付近に浅い沈線がめぐる。内面見込みに目跡があり，高台の内外にも３つの目跡が残る。**64**は高麗象嵌青磁である。底部付近の破片で，灰緑色の釉下には白土の象嵌を施す。文様は内面見込み２本の圏線を巡らし，外に如意頭文さ



第16図　ＳＤ５（５号溝）出土遺物（Ｓ＝１／３）

らにその外に草花文を施す。外面は数本の圏線の間に蓮弁文を配する。**65**は類例が確認できなかったが，鉢のような器形と判断した。復元口径は26.0cmである。釉は灰緑色で光沢がある。内傾する口縁部をもつ。同じものは第４試掘坑からも出土している。中国製の可能性もある。

陶器（66）甕の口縁部片である。内湾する胴部からつづく口縁部は，Ｔ字形をなし，広い平坦面をつくりだしている。この部分は釉をカキとっている。口唇部は内外に張り出し，特に外へ突出した部分は先端で拡張し，ここでも平坦面が作り出されている。釉は暗灰緑色で，素地はチョコレート色である。口縁頂部の釉をカキとる技法は厳原町桟原城の雑釉陶器にもみられる（福田1995）

温石（67）滑石製石鍋転用の温石である。縦最大長11.5cm，横最大長7.8cm，厚さ最大1.5cm，重さ247ｇである。上部中央に直径６㎜ほどの穿孔がある。

凹石・敲石（68）直径11cm，厚さ５cmを測る。上下両面に窪みがある。周縁に敲打痕が残る。

(6) 第５号溝【ＳＤ５】（第６図）

東西に延びる溝である。両端は確認していない。幅35cm～50cm，深さ8.0cm～10.0cmである。

出土遺物（第16図・図版⑥⑧）

北宋後半代の白磁（69・70・71）**69**は白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。**70**は白磁碗Ｖ－３類の口縁部片である。見込みには浅い沈線がめぐる。**71**は白磁碗Ｖ類の底部片である。細く高く直立した高台を有する。

高麗青磁（72・73・75）

72・73は高麗青磁の皿である。**72**は復元口径13.4cm，器高2.5cm，高台径4.8cmを測る。内外薄緑色で光沢はあまりない。口唇部は茶褐色の縁錆があらわれている。器壁は薄く2.0～3.5㎜である。内面見込みと高台内面に目跡が残る。口縁部外面には重ね焼によって他の皿の口縁部片が融着している。これにも縁錆がみられる。高台高は低く３㎜ほどで，内側に向かって面とりされている。高台畳付けは釉がふきとられ，茶褐色をなし鉄足化している。**73**は復元口径13.1cm，器高2.5cm，高台径4.4cmを測る。色調は**72**とほぼ同色であるがやや暗い。内面には焼成時の灰がかかる。内面見込みには４つの砂状の目跡が残る。高台の削り込みは浅く，４つの砂状の目跡が残る。高台畳付けは**72**と同様に釉がふきとられ，茶褐色をなす。高台内も輪状に釉がかかっていない部分があり，茶褐色を呈す。**72**に比して全体に雑なつくりである。**75**は粗製の青磁碗の底部片である。釉調は灰緑色で高台内部を削り残した兜巾高台である。内外に白色の目跡を残す。全面施釉ののち，高台畳付けの釉をふきとる。

施釉陶器（74・76）**74**は小碗の底部片である。復元口径10.4cm，器高3.6cm，高台径6.0cmをはかる。全面施釉で高台畳付けの釉をふきとる。釉は灰緑色である。**76**は第11図**23**と同型式のものである。

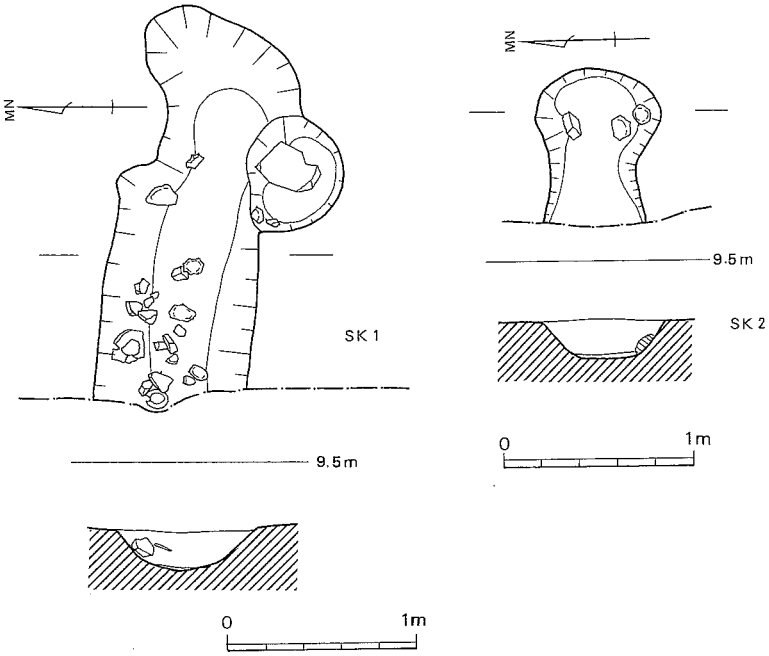
朝鮮製無釉陶器（77・78）**77**は復元胴部最大径35cmを測る。器壁は薄く４㎜ほどで，内面の凹凸が顕著である。**78**は断面三角形の突帯を有す。外面には平行にタタキの痕跡が残り，内面にも扇状のタタキ痕が残る。内面はタタキののち，横にナデているが，間隔をおいて意図的にタタキ痕を残している。器壁の厚さは５㎜である。

4．土坑

(1) 第1号土坑【ＳＫ１】

(第17図)

幅80cm，深さ20cmほどの溝状の土坑である。西端は確認していないため溝の可能性が高い。柱穴（１－40）に切られている。土坑中には陶磁器や礫が投げ込まれていた。



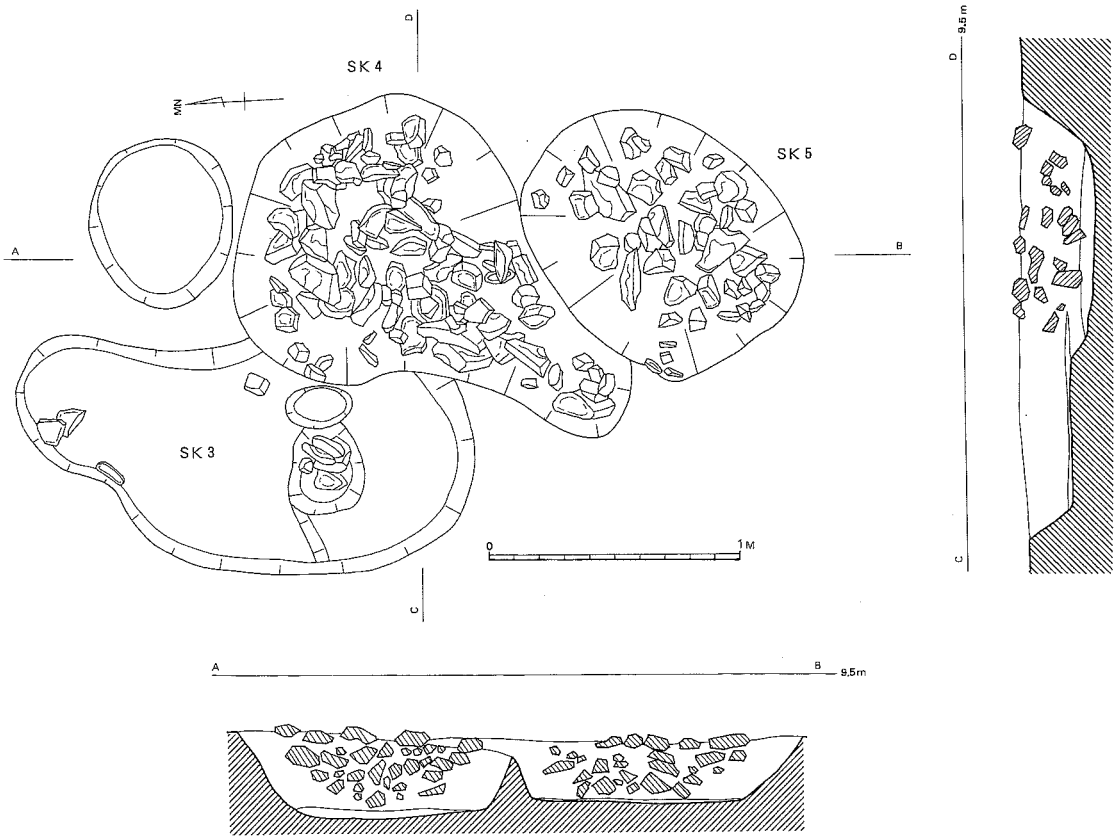
第17図　ＳＫ１・ＳＫ２
実測図（Ｓ＝１／40）

出土遺物（第18図・図版②④）

龍泉窯系青磁（80） 龍泉窯系青磁碗Ｉ－３類である。内面見込に櫛描文をもつ。釉調は白黄色である。

同安窯系青磁（79） 同安窯系青磁皿Ｉ－２類で，ほぼ完形で出土した。体部中位で屈曲し，見込みの境に段を有する。内面見込には櫛描文をもつ。全面施釉したあとに底部の釉をカキとっている。

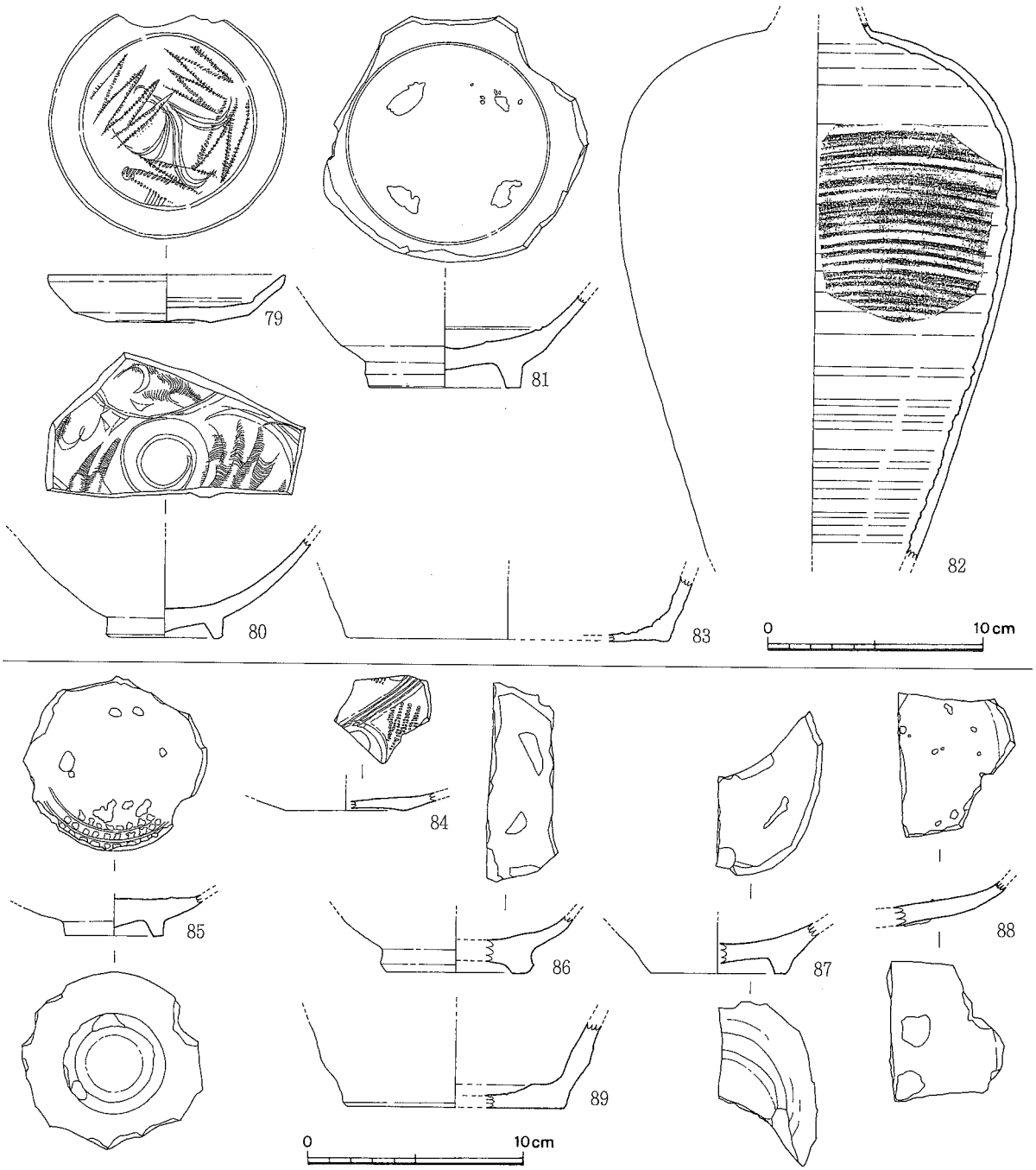
施釉陶器（81） 碗の底部である。高台径6.8cm～7.0cmの大きな高台をもつ。釉は薄い灰緑色のもので，



第18図　ＳＫ３～５実測図（Ｓ＝１／30）

全面施釉されるが，高台畳付けは一部剝落がみられる。内面見込みには沈線が巡るが４分の３ほどで切れており，４つの目跡が残る。

朝鮮製無釉陶器（82・83） **82**は梅瓶である。口縁部・底部を欠く。胴部最大径は18cm，残存部の器高は24.6cmである。器壁の厚さは３mm～４mmで，断面はチョコレート色を呈す。外面肩部には焼成時に灰がかかっている。頸部以上を失っているが，復元口頸部は3.5cmほどである。内面の凹凸は激しい。**83**は復元底径14.8cmを測る。断面はチョコレート色を呈し，外面底部は無調整である。



第19図　ＳＫ１・４（１号・４号土坑）出土遺物（Ｓ＝１／３）

(2) **第2号土坑【ＳＫ２】**（第17図）

幅60cm～70cm，深さ30cmほどの溝である。西端は確認していないが溝の可能性が高い。20cmほどの角礫が投げ込まれており，遺物の出土はなかった。

(3) **第3号土坑【ＳＫ３】**（第18図）

第４区の南側で切り合った３つの土坑のうち，もっとも古い土坑である。最大幅1.85m，深さ20cmを測る。遺物の出土はなかった。

(4) **第4号土坑【ＳＫ４】**（第18図）

第３号土坑を切って掘られた土坑である。最大幅1.75m，深さ35cmほどである。土坑中には角礫が投げ込まれ，その中には被熱した礫も存在した。

出土遺物（第19図・図版⑨）

同安窯系青磁（84） 同安窯系青磁皿Ｉ－２類である。

施釉陶器（86・87・88・89） **86**は底部片で，復元高台径6.6cmを測る。釉は黄白色で，全面に施釉される。高台は不定に面取りされ，一部に稜をなす。素地は橙色である。**87**は底部片である。復元高台径は6.2cmである。釉調は黄緑色で高台部外面は面取りされ，畳付けの幅が異なる。全面施釉後に畳付けの釉をカキとる。内外に目跡が残る。**88**は高台がつかない皿である。光沢がある黄緑色の釉が内外にかかる。底部は白く大きな目跡が２つつく。**89**は復元底径10cmをはかる。体部表面には焼成時の灰がかかる。内底部は焼成時に表面が膨れ凹凸をなす。

粉青沙器（85） 高台径4.6cmを測る。見込みには白土象嵌による文様がみられる。幾重かの圏線の間に菊花文か円文を配する。小さな目跡が４つ残る。高台は兜巾高台である。畳付けの目跡は１つが確認できる。

(5) **第5号土坑【ＳＫ５】**

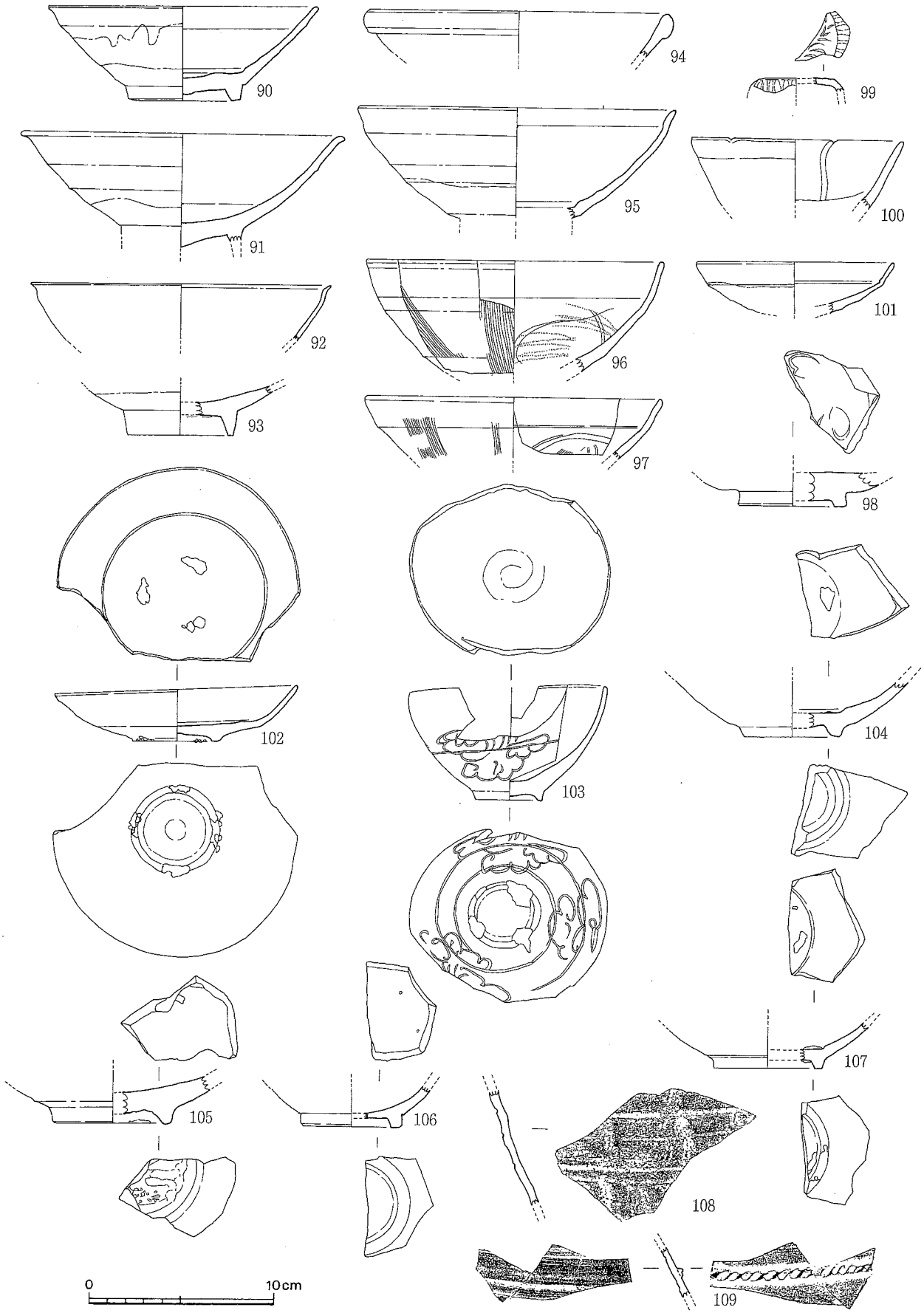
第４号土坑を切って掘られている。最大幅1.2m，深さ30cmほどである。土坑中には角礫が投げ込まれている。出土遺物はなかった。

Ⅵ．包含層出土遺物

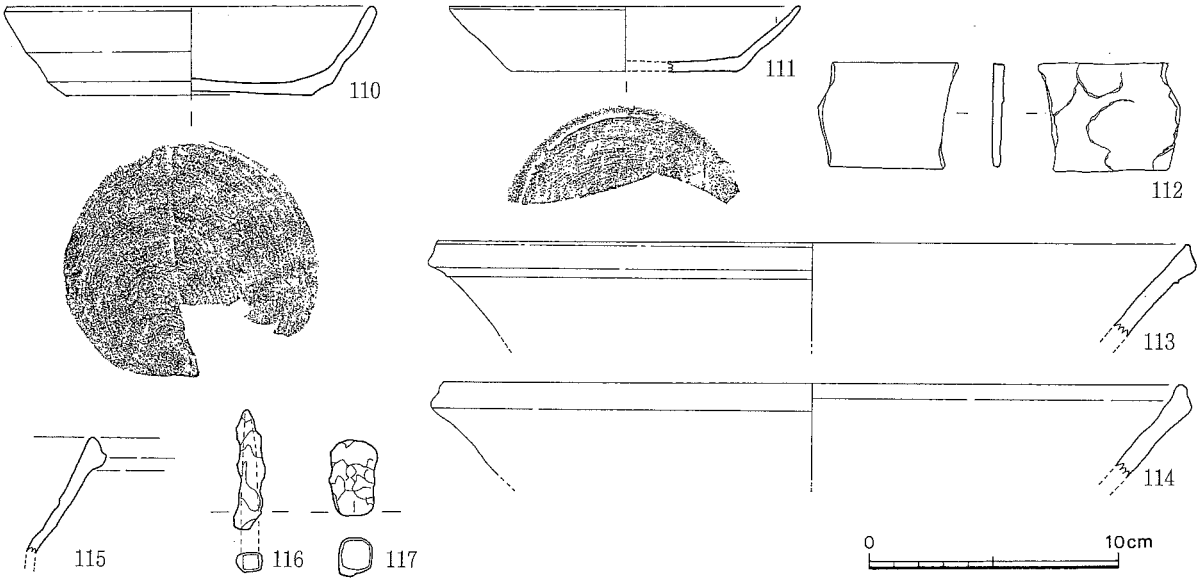
１．第3層出土遺物（第20図・図版③⑨）

第３層は旧耕作土（第２層）の下にあり，遺構の時期と同じく12世紀から13世紀を中心とする遺物が出土している。しかし，同層からは後述するように粉青沙器や明青花もわずかながら出土している。このことは耕作などによる後世の攪乱が若干あることを窺わせるが，全体的には良好な中世の包含層と判断できた。したがってここでは，図示できるすべての遺物を掲載し報告する。

越州窯系青磁（107） 越州窯青磁碗Ｉ－２類である。復元高台径5.8cmを測る。内底部には段をもつ。高台付近の体部はヘラ削りされている。部分的に青磁釉がはげたところは，茶褐色に発色している。内部見込みと高台畳付け，および高台内には白色耐火土の目跡を残す。全面施釉をおこない，畳付け



第20図　第Ⅲ層出土遺物①（S＝1／3）



第21図　第Ⅲ層出土遺物②（S＝1／3）

にも釉がかかる。

北宋後半代の白磁（90・91・93・94・95）

90は白磁碗Ⅷ－２類片である。口縁部は直線的に外方にひらき，内底見込の釉を輪状にかきとる。胴部の高台近くは露胎で，体部内面上位に沈線が一条めぐる。Ｐ３－２出土遺物と接合する。**91**は白磁碗Ｖ－３類である。見込みに沈線をめぐらす。**93**は白磁碗Ｖ類の底部片である。高台は細く高くつくられている。**94**は白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。**95**は白磁碗Ｖ－１類の口縁部片である。内面口縁部付近と内面見込みに沈線を有している。

龍泉窯系青磁（92・98・100） **92**は龍泉窯系青磁碗のⅣ類の口縁部片である。黄緑色の透明釉がかかる。**98**は龍泉窯系青磁碗の底部である。Ⅰ類と判断されるが，詳細はわからない。**100**は龍泉窯系青磁小碗Ⅰ類である。口縁部に輪花をもち，内面は片彫りの線で分割している。

同安窯系青磁（96・97・101） **96**は同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類である。飴色ガラス質の釉がかかる。ＳＤ５から出土のものと接合した。**97**は同安窯系青磁碗片でⅠ－１ｂ類である。外面には細い櫛歯状の文様をもつ。**101**は同安窯系青磁皿片とおもわれる。

青白磁（99） **99**は平形合子の蓋で，菊花状の側面をもち，型作りである。

明青花　図示していないが１点のみ明染め付けと思われる白磁が出土している。染付はこの１点のみである。

高麗青磁（102・103・104） **102**は高麗青磁皿である。口径12.9cm，器高2.4cm～3.1cm，高台径4.6cmである。色調や形・成形技法は**50**の高麗青磁皿にきわめて類似する。内底部に浅い沈線がめぐり，高台の切り込みは浅く，畳付けは内側に向かって面とりされている。内面見込みに３つの砂状の目跡，高台畳付けに４つの目跡が残る。**103**は陰刻文を施した高麗青磁碗である。器形は焼成時にひずみが生じている。口径最大10.8cm，器高5.7～6.2cm，高台径3.6cmを測る。暗緑色の釉調である。陰刻は高台付近から一筆で右回転に渦巻き状に施し，その後に３対の雲文が施される。高台畳付には３つの目跡が

残るが，内面に目跡はない。外面上位には重ね焼により，他の器の口縁部が融着している。

104は粗製の高麗青磁碗の底部片である。釉調は灰緑色で器表面は白斑で覆われる。復元高台径は5.2cmで，高台畳付けは面取りして内傾している。畳付けの幅も一定しない。全面施釉ののちに，高台畳付けの釉をふきとる。内外に白色の目跡がある。

朝鮮製白磁（105） 李朝白磁である。釉は不透明で光沢がない。一部に斑が生じている。全面施釉で高台見込みは釉がちぢれ，梅皮状になっている。

朝鮮製無釉陶器（109） 外面に刻目突帯を貼り付け，内外面ともにナデ調整を施している。器壁は薄く3～4㎜である。

国産陶器（106） **106**は美濃焼系統の灰釉を施した碗片である。釉調は黄色味がかっており，素地は白黄色である。

中世須恵器（113・114・115） 復元口径は**113**が30.6cm，**114**が30cmである。いずれも東播系須恵器の鉢であるが，**115**は片口鉢と思われる。口縁部を上下に拡張している。重ね焼きのため，拡張部は暗灰色となり焼成時の灰がかかる。三者とも森田編年の第II期第2段階（12世紀末～13世紀初）におさまるものであろう。

土師器（110・111） **110**は復元口径14.6cm，器高3.6cm，底径9.8cmの坏である。底部は糸切り離し底で，ロクロの回転方向は右方向である。器高が高いが型式的には**55**と同型式である。**111**は復元口径14cm，器高2.6cm，底径9.0cmである。底部には糸切り離し痕を残すが，回転方向は不明である。**110**は12世紀後半から13世紀前半，**111**は13世紀前半の時期が考えられる。

砥石（112） 厚さ0.3cm，幅4.2cm，長さ不明である。砂岩製で1面のみを研ぎ面として使用している。

鉄器（116・117） 内部は中空で，断面は四角形を呈する。用途や器種についてはわからない。

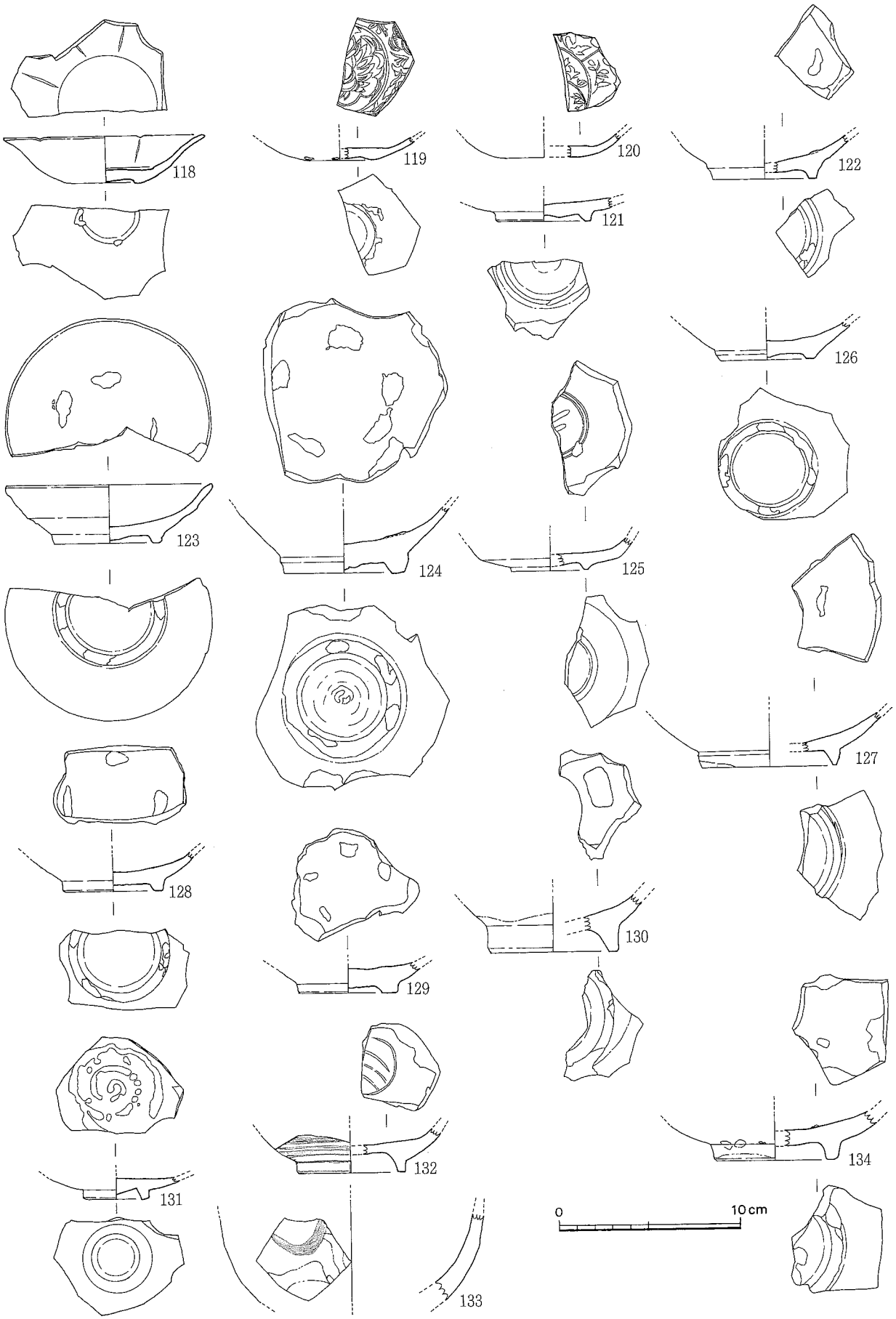
2．第1・2層出土遺物（第22・23図・図版⑥⑩）

1・2層から出土した陶磁器のうち，朝鮮産陶磁器と越州窯青磁のみを掲載報告する。1・2層出土陶磁器も中国産陶磁器よりみて，12・13世紀を中心とするが，近世遺物も若干出土しており，下限は17世紀になる。

越州窯系青磁（118） 第4試掘坑第2層より出土した。越州窯系青磁杯I類である。青磁口縁部に輪花をもち，内部を沈線により分割している。体部内面と内底部の境は段をなす。底部は碁笥底で，2つの白色の目跡が残る。内面に目跡はない。

高麗青磁（119・120・122・124・126・127） **119・120**は型押しによる浮彫文をもった皿である。**119**は内底部に段をもち，底部は碁笥底である。畳付けは釉がふき取られ，茶褐色を呈して，鉄足化している。**120**も内底部に浅い段を有するが，底部の状況は不明である。**122**は釉調が黄緑色で光沢がある。復元高台径5.6cmである。全面施釉で，高台畳付けにも釉がかかる。内外に白色土の目跡が残る。

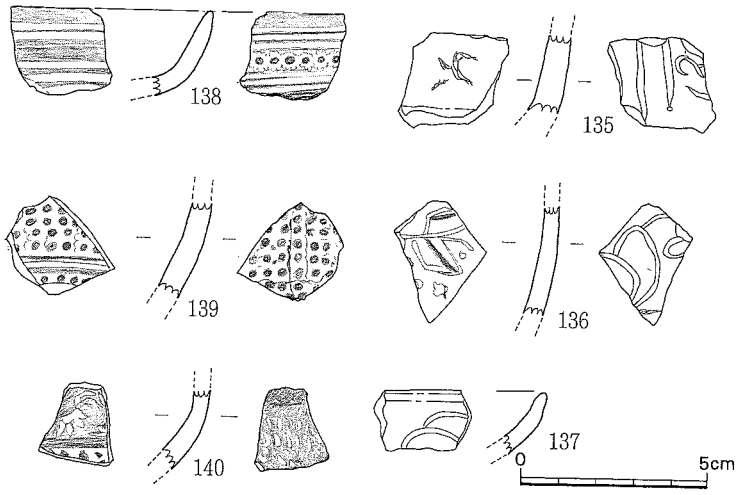
124・126・127はいずれも灰緑色の粗製の高麗青磁碗の底部片である。**124**は口径6.5cmである。高台は不定方向から面取りされ，高台外面は一部に稜をなす。高台付近の体部はヘラケズリの痕がある。畳付けの幅も一定しない。内面見込みには5つの目跡が残る。高台畳付けにも5つほどの目跡が残る。



第22図　Ⅰ・Ⅱ層出土の貿易陶磁①（S＝1／3）

高台内は施釉されず，畳付けの釉はふき取られている。

126は高台径が5.0cmで，高台の高さは低い。高台の外面は面取りされ，稜を生じる。畳付けの幅も一定しない。高台内は兜巾状にケズリ残され，４つほどの目跡が残る。器壁表面には縞状の白斑が幾筋もロクロの回転に沿って回っている。粉青沙器の刷毛とは異なる。附篇の小坂遺跡採集資料の**8**と同様の特徴である。



第23図　Ⅰ・Ⅱ層出土の貿易陶磁②（S＝1／2）

127は復元高台径7.4cmで，高台の高さが高い。高台外面は面取りされ，稜線が生じている。全面施釉で，高台畳付けの釉をふき取っている。青磁釉の裏は茶褐色に発色し，見込には白い目跡が残る。

高麗象嵌青磁（135・136） **136**は白黒象嵌である。文様の詳細は不明である。**135**は白土象嵌である。文様の詳細はわからない。

粉青沙器（125・131・132・134・137・138・139・140） **125**は皿の底部片である。釉は灰緑色で，白斑が器面に生じている。全面施釉ののち高台畳付けおよび高台内の釉をふき取っている。そのため高台内は茶褐色を呈する。象嵌は見込みに２本の圏線を施し，そのなかに２～３本の平行線が走るようだが，詳細は不明である。

131は高台径3.7cmである。釉は青白で高台および高台付近は露胎である。見込みには螺旋状に白土象嵌が施される。兜巾高台である。**132**は碗の底部片で復元高台径は5.9cmである。全面施釉で高台畳付けの部分は釉がふきとられている。体部外面は刷毛目が施される。**134**は復元高台径6.5cmを測る碗である。全面施釉ののちに高台畳付けと高台内部の釉をふきとっている。灰白緑色の釉の裏に茶褐色の釉（？）をかける。体部では高台付近の釉がちぢれている。見込みに白土象嵌が若干残るが，文様などははっきりしない。見込に小さな目跡がひとつ残る。**137**は碗の口縁部片である。釉調は灰緑色で，白土の象嵌がある。文様の詳細は不明である。**138**は試掘坑から出土した。外面は数本の圏線と一列の菊花文が施される。内面は圏線のみが数条めぐる。**139**は外面に菊花文を密に配し，内面には圏線の間に菊花文を施す。**140**は外面に雨滴文を配し，外面には大きめの菊花文とその下に縄簾文を施す。

青磁鉄絵（133） **133**は高麗の青磁鉄絵である。磁器胎土に茶褐色の化粧土をかけ，次に灰白緑色の釉をかけ，そのうえから，鉄釉で半円形の文様をえがき，さらに灰緑色の釉を内外にかけている。最後の釉は体部では釉垂れをおこしている。

雑釉陶器（123） 口径11.2cm，器高3.2cm，高台径5.7cmを測る碗である。胎土は磁器のようでもあり，焼成はしっかりしている。全面に褐釉がかかる。見込み内は３つの白色耐火土の目跡が残り，高台畳

付けにも同様な３つの目跡が残る。本来は内外に４つの目跡があったものと推定される。

朝鮮製白磁（129） 李朝白磁であろうか。粗製の白磁で，釉は白色の透明釉で光沢もあるが，褐色に濁るところがある。内面に４つの目跡が残り，本来は５つの目跡と思われる。全面施釉ののちに高台畳付けの釉をふき取る。高台見込みには螺旋状にケズリ痕が残る。

施釉陶器（128・130） 口８は底部片で，高台径5.3cmである。釉は灰釉で光沢はなく，ムラが生じている。全面施釉ののちに高台畳付けの釉をふき取っている。内面見込みに３つの目跡があるが，本来は４つであろう。高台畳付けの目跡も同様である。**130**は碗の底部である。復元高台径7.0cmである。高い高台をもつ。釉は灰色の不透明な釉で，高台付近と高台内は露胎である。見込みに砂状の目跡が残る。素地は赤褐色をなす。

Ⅶ. 総　　括

1．遺構について

(1) 掘立柱建物跡について（第24図）

大石原遺跡の調査では計10棟の掘立柱建物跡を復元することができた。発掘調査によって掘立柱建物跡を検出したのは，対馬では初めてのことである(註1)。

建物跡は1間×2間の小規模なもの（ＳＢ3～5・10）と総柱の建物跡（ＳＢ6～9）に大きくは分けることができる。前者は3回の建て替えを行いながら遺跡の北側（1・2調査区）に存在し，後者は南側（3・4調査区）に存在した。

これらの建物跡はＳＢ10以外は南北棟で，棟の方向は揃っているため，ほぼ同一時期の建物跡と考えてよいであろう。

構造や規模からみて前者は小屋的な建物跡で，後者は倉庫ないしは住居などの機能をもった建物跡と考えられる。また1間×3間の建物跡があるが（ＳＢ2・10），建物としては不自然な規模であるため，本来はさらに大きな建物であった可能性がある。

本遺跡から出土した柱穴はその数が多いことから，ほかにも建物が存在し，また，建て替えがあったことが考えられる。たとえば，1区の北側には直径が小さな柱穴が集中する部分があったり，さらにＳＫ2の付近には直線的に並ぶ柱穴列がみられたりするからである。

これらの掘立柱建物跡の年代は，柱穴から出土した土師器からみて，12世紀後半から13世紀前半と考えられる(山本1990)。ただし土師器の量が極めて少ないことや，完形品もないことなどから，土師器のみによって年代を決定することには，躊躇せざるをえない。一方，柱穴から出土した中国産陶磁器は，大宰府において，Ｃ期（11世紀後半～12世紀前半）・Ｄ期（12世紀中頃～後半）・Ｅ期（13世紀初頭～前半）とされるものである（山本1995)。したがって，掘立柱建物跡の下限は出土した土師器および中国産陶磁器から一応，13世紀前半の時期に想定できると考える。

また上限については，中国産陶磁器から11世紀後半とおくこともできるが，11世紀までさかのぼる土師器が出土していない点を重視して，12世紀代としておきたい。したがって掘立柱建物跡の年代は12世紀を中心として13世紀前半ごろまでの時期と考えられる。

(2) 溝について

4本の溝を検出した。第4号溝は雨落ち溝であろうが，これにともなう建物跡は明確にしえなかった。第4号溝より第5号溝が古いことは，遺構の切り合いからはっきりしているが，これ以外には，出土した溝の新旧関係は明らかにしえなかった。溝の年代は，出土資料から，上限は11世紀代の方形の耳がついた石鍋片（第12図**52**）および大宰府Ｃ期の中国陶磁で，11世紀代が考えられるが，石鍋は転用品であるため，廃棄された時期はさらに降ると考えられる。ここでは建物跡と同じく12世紀初めを上限としたい。下限は大宰府Ｄ期の中国陶磁や土師器片で，12世紀後半である。ただし，第4号溝から高麗の象嵌青磁が出土しており，4号溝は13世紀にはいるものであろう。

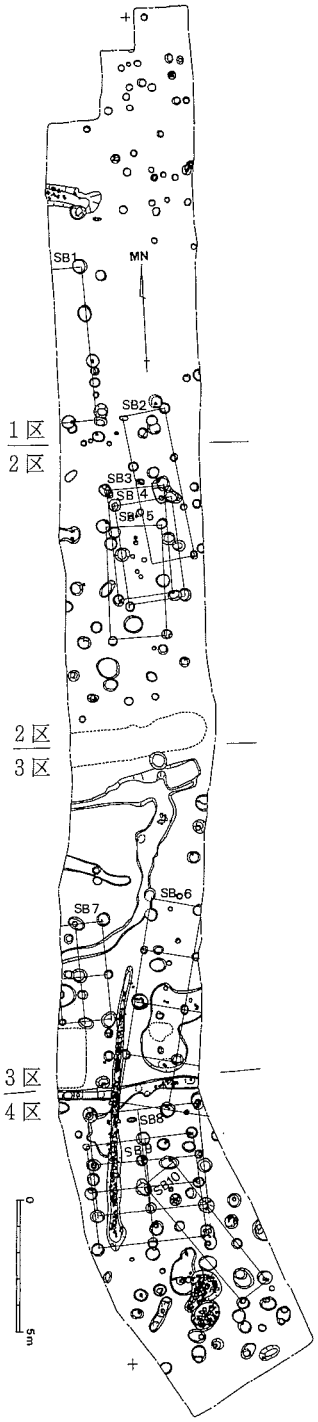
したがって溝についても12世紀から13世紀ころのものと考えられる。

(3) 土坑について

5基の土坑を検出したが，遺物が出土したのは2基のみである。また第1号土坑と第2号土坑は調査区の都合上，全体のプランを確認しなかったので確実に土坑だとはいえない。本来は，さらに西へ延びる溝であった可能性がある。

第1号土坑からは同時に廃棄されたと思われる土器が一括出土した。出土遺物から12世紀後半ごろのものと考えられる。

第4号土坑は粉青沙器や雑釉陶器が出土しており，他の多くの遺構とは，時代が異なり，15世紀以降の遺構と考えられる。この第4号土坑と切りあう第3号，および第5号の土坑は，土坑中に礫が投げ込まれるなど，他の土坑とは異なるところがあり，4号土坑と同じように時代は15世紀以降のものであろう。



第24図 掘立柱建物跡復元図
（S＝1／400）

2．遺物について

(1) 高麗青磁について

①はじめに

大石原遺跡の各遺構および包含層からは，多くの貿易陶磁が出土した。なかでも高麗青磁の出土量は，同時期の県内の遺跡に比べて格段に多い。また出土した高麗青磁のなかでは，初期高麗青磁(註2)の一群がとくに注目される。

ここでは本遺跡出土の高麗青磁について，若干のまとめをおこなう。

②研究史抄と研究の現状

日本から出土した高麗青磁の考古学的研究は，西谷正による九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器についての研究に始まるといえよう（西谷1983）(註3)。そして山本信夫の大宰府における研究よって，日本出土の初期高麗青磁は具体的な型式と年代が与えられ，研究は新たな段階に入った（山本1985）。

山本の論攷以後，高麗青磁の出土遺跡と出土量は確実に増加し，90年代にはいってからは一層の研究の進展がみられた。それは1992年（平成4）に東洋陶磁学会が大阪市立東洋陶磁美術館で主催開催した高麗青磁についてのシンポジウム，ならびに同美術館で実施した『高麗青磁への誘い』の展観に象徴される。とくに日韓の研究者がつどった同シンポジウムでは，高麗青磁の発生に関する問題に関心が集まった(註4)。

その後，今井敦は1993年に，日本における高麗青磁研究の総括と問題提起をおこなった（今井1993a・1993b）(註5)。

また，先の西谷正も継続的に高麗青磁の研究成果を公表している。1994年（平成6）には先述のシ

ンポジウムの講演をもとにした論攷を発表し（西谷1994），また1996年（平成８）には，再び高麗青磁について言及した（西谷1996）(註6)。

研究史を概観するかぎり，日本出土の高麗青磁研究については，今井の提起する課題を念頭に進めつつ，朝鮮半島の調査・研究の進展に待つところが大きいようである。

③長崎県における研究

長崎県での高麗青磁のまとまった研究は対馬をのぞけば，これまでのところきわめて少ない(註7)。1993年（平成３）の集成によると，対馬島以外で高麗青磁を出土した本県の遺跡のうち，正規の報告がなされたのは，６遺跡を数えるにすぎない（稲富1993）(註8)。そのなかで唯一まとまった論攷といえるものは，松浦市楼楷田（ろうかいだ）遺跡報文における鈴木重治によるものである（鈴木1985）(註9)。鈴木も，おもに壱岐出土資料をもとに述べているところからして，県本土部と壱岐・対馬における高麗青磁の出土量の違いが研究量にもあらわれているといえよう。

④対馬における研究

対馬における高麗青磁の考古学的研究は，まず水野清一が1953年（昭和28））年に『對島』のなかで資料解説をおこなったことに始まる(註10)（水野1953）。その後，対馬の高麗青磁の考古学的研究はしばらく途絶えていたが，1977年（昭和52）に坂田邦洋によって下県郡美津島町塚塔崎遺跡の調査がおこなわれ，再開された。塚塔崎遺跡からは，中世墳墓より青磁碗２・青磁壺１が出土し，「高麗青磁の伝統を強く受け継いでいる李朝前期の青磁」と報告されている（坂田1978）。

また西谷正は，上県郡上対馬町朝日山遺跡出土の青磁梅瓶や同郡峰町木坂海神神社伝世の青磁陰刻蓮華文梅瓶・青磁陰刻如意頭文梅瓶・個人蔵の青磁陰刻蓮華文瓜形水注を初期高麗青磁と位置づけた（西谷1983）。

発掘調査では1990年（平成２）に上県郡峰町木坂海神神社弥勒堂跡の発掘調査が行われ，「13世紀から14世紀」を中心とする朝鮮産陶磁器が大量に出土した（安楽・阿比留1993）。

さらに1992年（平成４）には，峰町大田原（おおたわら）ヤモト遺跡が調査され，「12・13世紀頃の高麗青磁」および「14・15世紀頃の李朝青磁」が出土している（安楽・阿比留・本田1993）。

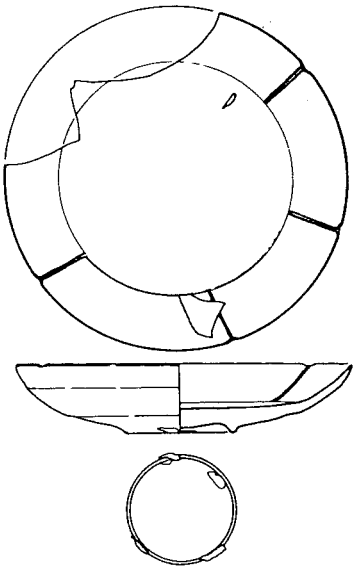
このような1990年代に入ってからの対馬での発掘調査の成果を踏まえ，安楽勉と阿比留伴次は中世の対馬における朝鮮産陶磁器の概観をおこなった（安楽・阿比留1994）。それによると，対馬での高麗青磁をふくめた朝鮮産陶磁器の出土地は23箇所にのぼるという。

さらに両氏は初期高麗青磁として，先述の西谷があげた資料のほかに，峰町木坂海神神社弥勒堂跡出土の青磁碗蓋を加えた。この安楽・阿比留の論攷によって対馬における高麗青磁を含めた朝鮮産陶磁器研究の基礎資料が提示されたといえる。

⑤初期高麗青磁について

今回出土した高麗青磁のなかで注目される資料は，性格不明遺構（ＳＸ１）から出土した第12図**50**や，第４号溝から出土した第14図**63**，第５号溝から出土した第16図**72**および**73**の初期高麗青磁皿の一群である。遺物包含層である第３層からも出土している（第20図**102**）。

これらの皿は輪状高台をもち，高台高は極めて低く，見込みと高台に目跡をもつという特徴がある。また釉調や，製作技法が少ししずつ異なっており，このことは型式差や時間差，あるいは生産地の違いを示しているのかもしれない。相対的に丁寧につくられている資料は**72**で，包含層から出土した**102**がもっとも粗製化している。また，これらの資料は高台畳付けの釉をふき取る**63・72・73**と，釉をふき取らない**50・102**に大別できるかもしれない。これらの皿の類例としては，博多築港１次39号井戸より出土した資料がある（山本1990，池崎・塩屋1988）(註11)。博多遺跡出土のものは12世紀前半とされる大宰府ＸⅡ・ＸⅢ期の土師器と共伴している。（第25図）



第25図　博多遺跡出土初期高麗青磁皿（Ｓ＝１／３）

⑥陰刻文高麗青磁について

遺物包含層である第３層から陰刻文をもつ高麗青磁碗が出土している（第20図**103**）。第３層出土遺物のほとんどは，本遺跡の遺構からの出土遺物と同じく，12世紀から13世紀のものであるが，粉青沙器や明青花も出土しており，年代には幅がある。ただし，この陰刻をもつ青磁碗は３片が接合して全体の五分の四ほどに復元できているが，このうち１片は柱穴（４－20）から出土し，他の２片は遺構面の直上から出土しているため，本来は遺構にともなうものと考えられる。建物遺構に伴うとすれば12世紀後半から13世紀前半の時期が考えられ，初期高麗青磁とみてよいであろう。

⑦その他の高麗青磁について

その他の高麗青磁については，第８図－**21**・第11図－**37**・第16図－**75**・第20図**104**・第22図**124・126・127**などの粗製の青磁の一群がある。これらの粗製青磁の検討は，今回十分にはおこなえなかった。大宰府で確認されている初期高麗青磁碗Ⅲ類（山本1985）などとの比較検討も今後の課題として残った(註12)。ここでは，上記の粗製青磁のおおまかな分類を示して，最低限の責としたい。**21・104・119**は胎土は緻密で不純物もすくないが，青磁釉表面全体に細かい白斑が生じている。**124・126**は青磁釉表面の細かい白斑に加えて，胎土中の砂粒が浮き上がり，器壁表面がザラついている。さらに加えて**126**は，表面の白斑が弧を描いている。これはロクロ成形の際に生じる器壁の凹凸の凸部に沿って白い弧となっているものである。附編の小坂遺跡採集資料の**8**も同様な特徴をもつ粗製青磁である。青磁**37・75**は先の青磁群に比べて胎土に不純物が多く混入する。したがって**124**や**126**よりさらに器面に砂粒が浮き上がって器面はザラつき，いかにも量産品という趣である。

以上の粗製青磁はいずれも内外に目跡をもち，高台畳付けは鉄足化しており，**37・75・126**の高台内は中央にいわゆる「ヘソ状突起」がある。

⑧朝鮮製無釉陶器について

今回多くの朝鮮製無釉陶器が出土したが，そのなかでも第１号土坑から出土した梅瓶は注目される（**第19図82**）。朝鮮製無釉陶器製の梅瓶の出土はきわめて珍しい(註13)。本来，朝鮮製無釉陶器は大型品が多く，水その他の液体の運搬用とみられているが（赤司1991，安楽・阿比留1994），今回の梅瓶の出土

は，新たな朝鮮製無釉陶器の流通の資料として貴重である。

⑨朝鮮産陶磁器について

今回は遺構の年代が12世紀から13世紀を中心としたものであったため，李朝以後の朝鮮産陶磁器の資料は，包含層や攪乱層である１・２層で若干の出土があったのみである(註14)。

⑩高麗青磁の需要について

このような本遺跡における初期高麗青磁の需要の背景であるが，かつて西谷正は対馬に伝世された初期高麗青磁について「海神神社の所蔵品については日，麗通交時に，対馬あるいは九州本土の航海者が，航海安全を祈願した結果として，神社に寄進もしくは奉納されたものではないかと思う」と述べ，さらに個人蔵のものは「対馬島の勾当官といった有力階層に入手されていたものかもしれない。」とした(西谷1983)。宮崎貴夫は本県の貿易陶磁出土遺跡の大半が11世紀後半から12世紀前半の段階に始まることを示し，中世文献史家の瀬野精一郎の見解を援用しつつ，密貿易による流入を示唆している(註15)(宮崎1996)。対馬における高麗青磁の需要の問題については，今後の研究に待つところが大きいが，あらためてこの大石原遺跡が立地する「屋敷畑」という字名が注目される。朝鮮海峡につながる佐護川の上流に住まいし，当時貴重であった貿易陶磁を多数所有した人々の存在が想像されるのである。

３．大石原遺跡における貿易陶磁の定量分析について

(1) 定量分析の研究史と研究の現状

近年の定量分析の研究史および研究の現状については，宇野隆夫の論攷に詳しい(宇野1992)。宇野は定量分析の研究史をまとめたのちに，食器計量に問題を絞り，計量しようとする食器資料には，体系的な分類が必須であることを説いた。さらに，５つの食器計量法をあげ，そのなかから「個体識別法と口縁部計測法とを基本的な食器計測法として推奨したい」と主張した。このような宇野の論攷は，食器の定量分析をおこなうにあたって，きわめて示唆に富むものである。

(2) 長崎県における定量分析

本県での食器の定量分析については，1985年（昭和60）に下川達彌が，下県郡厳原町金石城跡出土の近世陶磁器の分析をおこなったのが最初である(下川1985)。その後は宮崎貴夫が中心となって中世陶磁器の分析に使用している。さらにその資料を分析することにより一定の成果があがっている。現在本県で行われている分析方法は破片数計算法によって，種類・器種別食器組成と用途別食器組成のデーターを提示するもので，この分析方法は本県では一般化し，データの蓄積も進んでいる。宮崎を中心とした本県の食器の定量分析については，中島恒次郎の評価がある（中島1995)(註16)。

(3) 大石原遺跡出土陶磁器の定量分析

①調査区ごとの陶磁器出土量について

第２表は各地区の遺構・土層ごとの陶磁器の出土量である。これによると第３区における陶磁器の出土量が最も多く，ついで第４区→第１区→第２区となる。遺構からの出土量を比較しても同様の結果となる。出土量が多い第３区には，溝が多く検出されており，これらの溝に陶磁器が投棄されたた

め，出土量が多いのかも知れない。しかし一方で，第３区には総柱の建物，ないしは総柱の建物と予想されるＳＢ６・７の掘立柱建物遺構があり，これらの建物跡は住居ないしは倉庫のような機能が推定される。このことから，陶磁器の出土量の多さの背景には，本遺跡における人々の主な生活場所(居住空間）が，第３区付近にあったからではないかということも考えられるのである。

また，陶磁器の出土量の少ない第２区は，１間×２間の小規模な建物遺構であるＳＢ３・４・５が重複して復元できる。出土陶磁器が少ないことは，これらの建物遺構が小屋的な性格の建物であるとの推定を補完するものでもあろう。

②貿易陶磁と国産土器について

第26図では本遺跡から出土した陶磁器のうち，貿易陶磁器と国産土器との比較を試みた。これによると，貿易陶磁は全体の80％以上を占め，国産土器は20％に満たないという状況である。このことは本土部の遺跡と比べると極めて特異な現象である(註17)。また，中国産陶磁器と朝鮮産陶磁器の比率は，ほぼ拮抗しているものの，磁器だけでみると，中国産磁器は朝鮮産磁器の二倍の出土量を示し，注目される。

また，朝鮮産陶器の70％は，朝鮮製無釉陶器で，この種の陶器が，かなり対馬に流入していたことがうかがえる。

③器種ごとの分類

第３表・第26図は本遺跡から出土した陶磁器を用途ごとに分類したものである。これをみると碗や皿・坏を中心とした供膳具が出土陶磁器・土器の65％から70％を占め，主体となっている。つぎに壺・甕などの貯蔵具が30％前後を占め，調理・煮焚具は２％程度にすぎないことがわかる。

用途ごとの陶磁器については，貯蔵具のほとんどが朝鮮産陶器で占められており，須恵器は6.8％にすぎないことがわかる。また，貯蔵具自体の出土量も他遺跡に比して多く，このことは遺跡や遺構の性格を考えるうえで注目される。

また供膳具のうち約60％以上は中国製磁器で，15％が朝鮮製磁器である。本土部で供膳具の主体を占める土師器にいたっては11％ほどの出土量である。

逆に調理・煮焚具のほとんどが国産の須恵器か石鍋であることも注目される。

以上のような分類結果から，供膳具は中国製の陶磁器，貯蔵具は朝鮮製の陶器，調理・煮焚具は国産土器といったような使い分け，ないしは，ある種の嗜好があったとも考えられる。

④まとめ

以上の結果から大石原遺跡の陶磁器の出土傾向をまとめると以下のようになろう。

ア．貿易陶磁と国産土器の比率は前者が80％，後者が20％である。

イ．貿易陶磁のうち中国産磁器は朝鮮産磁器の二倍の量が出土し，そのほとんどは碗を中心とする供膳形態のものである。また朝鮮産磁器もほとんどが供膳形態である。

ウ．磁器と陶器を合算して朝鮮産のものと中国産のものを比較すると，両者の出土量はほぼ拮抗する。しかし中国産陶器の量はきわめて少なく，また朝鮮産陶器のほとんどは朝鮮産無釉陶器で，かつ貯蔵

第 2 表　出土土器・陶磁器種類別数量表

					1 区			2 区			3 区				4 区				全 体				合 計				
					遺構	1・2層	小計	遺構	1・2層	小計	遺構	3層	1・2層	小計	遺構	3層	1・2層	小計	遺構	3層	1・2層	小計					
貿易陶磁器	貿易磁器	中国磁器	青磁	越州窯系青磁							2		2	4					2		2	4	4				
				同安窯系青磁	6	4	10	1	4	5					3	2	5	10	10	2	13	25	25	126			
				龍泉窯系青磁	3	25	28	2	8	10	17	5	10	32	8	17	2	27	30	22	45	97	97				
			白磁	北宋後半代の白磁	3	48	51	5	19	24	44	18	32	94	20	25	2	47	72	43	101	216	216	216	350		
				それ以降の白磁																							
			青白磁		1		1	1	1	2					3	1		4	5	1	1	7		7			
			染付													1		1		1		1		1		523	
		朝鮮磁器	青磁	高麗青磁	2	31	33		15	15	41	13	13	67	6	24	2	32	49	37	61	147	147				
				李朝青磁																				147	173		
			白磁	高麗白磁																				26			
				李朝白磁		12	12		7	7			7	7							26	26	26				
			染付																								
	貿易陶器	中国陶器									1			1	1			1	2			2			2		
		朝鮮陶器	無釉陶器		11	24	35	1	18	19	17	13	17	47	41	7		48	70	20	59	149		149			
			粉青沙器			9	9		2	2	1	1	4	6	1			1	2	1	15	18		18	202	204	
			施釉陶器		1	7	8		2	2	6	1	4	11	9	4		13	16	5	13	34		34			
			焼締陶								1			1					1			1		1			
国産土器	磁器		染付			1	1		1	1			2	2							4	4				4	
	陶器		古瀬戸										1	1							1	1		1		2	
			備前										1	1							1	1		1			130
	瓦質土器								2	2	2	1		3	2		1	3	4	1	3	8				8	
	須恵器					8	8	2	5	7	5	3	7	15	2	7		9	9	10	20	39				39	
	土師器				5	3	8	1	13	14	20	3	4	27	4	21	3	28	30	24	23	77				77	
石鍋									2	2	3		3	6	1			1	4		5	9					9
合計					32	172	204	13	99	112	160	58	107	325	101	109	15	225	306	167	393	866					

第 3 表　出土土器・陶磁器器種別数量表

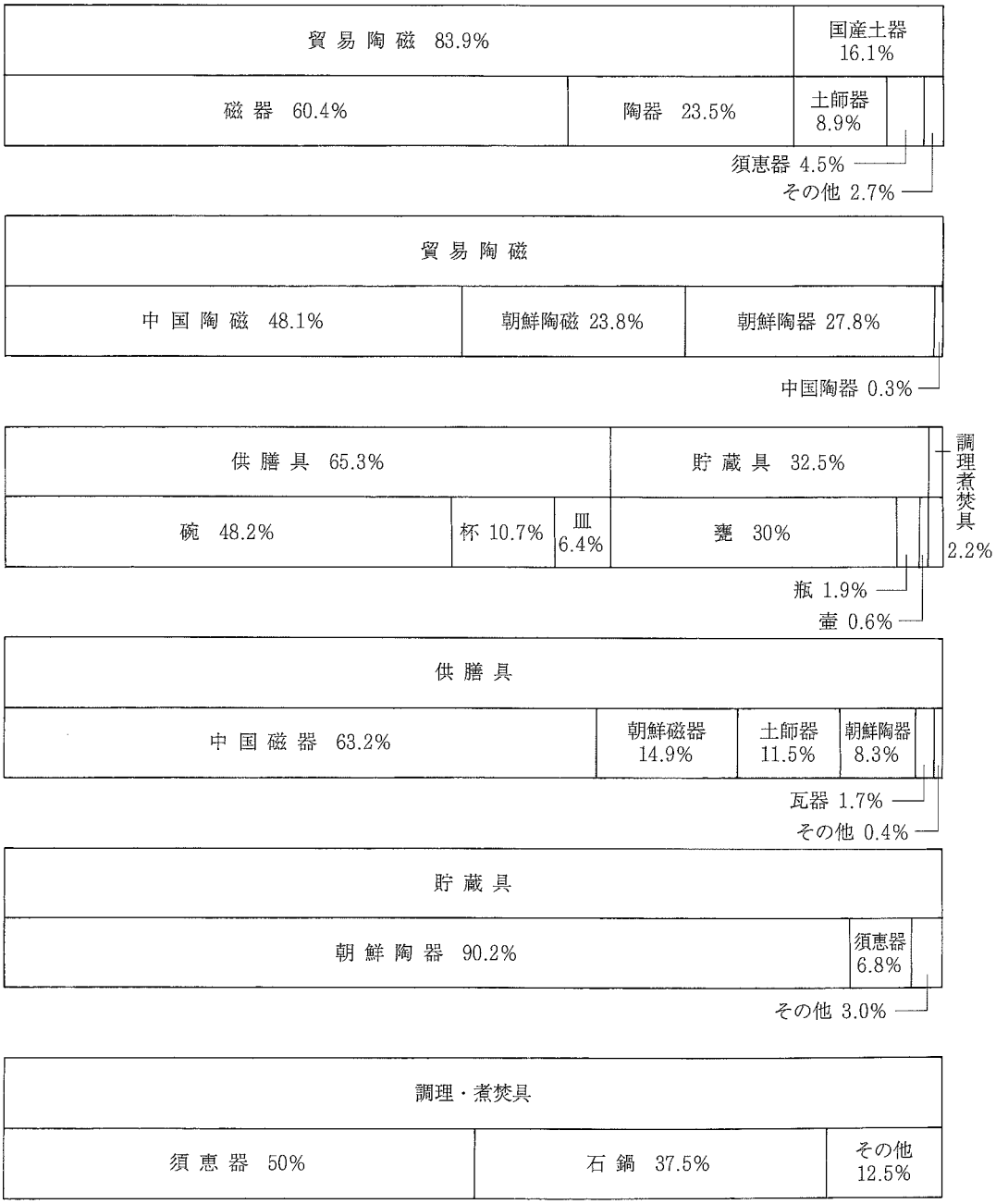
	遺構								3 層								1・2 層								全体							合計
	貯蔵具			供膳具			調理具	小計	貯蔵具			供膳具			調理具	小計	貯蔵具			供膳具			調理具	小計	貯蔵具			供膳具			調具	
	壺	甕	瓶	皿	碗	杯	鉢・擂鉢		壺	甕	瓶	皿	碗	杯	鉢・擂鉢		壺	甕	瓶	皿	碗	杯	擂鉢		壺	甕	瓶	皿	碗	杯	擂鉢	
中国磁器	2			3	69	3		77					75	1		76				11	130	5		146	2			14	274	9		299
中国陶器	1	1						2		1					1	2									1	2					1	4
朝鮮磁器				16	10	1		27				4	9	3		16				3	21	3		27				23	40	7		70
朝鮮陶器		73	13	5	7	2	1	101		40			2	3		45		85			17	3		105		198	13	5	26	8	1	251
土師器						22		22						17		17						15		15						54		54
須恵器							1	1		4					3	7		12					4	16		16					8	24
国産陶器																		1	1					2		1	1					2
瓦質土器					4			4													4			4					8			8
国産磁器																				1	1			2				1	1			2
小計	3	74	13	24	90	28	2	234		45		4	86	24	4	163		98	1	15	173	26	4	317	3	217	14	43	349	78	10	714
石鍋							3																3								6	
器種	90			142			5		45			114			4		99			214			7		234			470			16	
合計	237								163								320								720							

形態のものである。

エ．国産土器は供膳具である土師器杯や須恵器の調理・煮焚具が中心を占めるものの，その出土量は全体の中で，きわめて少ない。

オ．本遺跡の貿易陶磁と国産土器の出土比率に近似した遺跡を本土部で求めると，西彼杵郡多良見町伊木力遺跡，大村市坂口館遺跡例がある。

さて，このようなことから，12・13世紀の大石原遺跡の人々が貿易陶磁を日常的に使用していたと結論づけるには，やや問題があろう。調査面積は遺跡のごく一部であり，遺構の性格も不明であり，調査部分が集落のどのような場なのかも検討されねばならないからである。しかしながら，貿易陶磁



第26図　大石原遺跡出土陶磁器・土器組成グラフ

器と国産土器の比率が中世領主関連の遺跡に類似することや，本遺跡が所在する地が「屋敷畑」という字名をもつことなどを考慮すると，遺跡一帯が一般庶民の集落跡であるとすることはできないようである。

それにしても，わずか300m²の調査でこのような多量の貿易陶磁の出土をみたことは，中世対馬の歴史がただならぬものであることを改めて考えさせるものである。

4．壁土について

本遺跡では柱穴内から直径2cmから5cmほどの素焼きの粘土塊が多数出土した。調査現場では壁土かと考えていたが，繊維質のものが一切含まれていないことと，壁土にしては出土量が少ない点が土壁とすることに，ためらいを感じさせる(註18)。

5．獣骨について

柱穴内や包含層から獣骨が出土した。細片が多く，脆弱になっていた。これら柱穴内から出土した獣骨のほとんどは猪の骨であったが，豚の可能性もあるという(註19)。

[註]

註1　大石原遺跡の調査のあと，1994年（平成6）9月に下県郡美津島町金田城跡において古代の掘立柱建物跡が出土した（本田1995）。

註2　ここでいう初期高麗青磁とは，山本信夫の定義に従い，「象嵌技法成立以前の高麗青磁」のこととする（山本1985）。

註3　西谷は九州・沖縄を中心に朝鮮産陶磁器を出土した59の遺跡と10箇所の伝世地を集成し，朝鮮産陶磁器の編年・分布ならびに陶磁器使用者の階層についての考察をおこなった。

註4　同シンポジウムでの講演や公開討論は『東洋陶磁 VOL.22』に掲載された。
なお高麗青磁の起源に関する問題は，現在，韓国や日本の研究者のなかでも諸説がある。本遺跡では高麗青磁の起源問題解決の糸口となるような資料は出土しなかったので，この問題については言及していない。

註5　今井は「日本で出土する高麗青磁の年代から高麗青磁の初現，あるいは象嵌青磁の開始時期を論じることは無理」という判断を示したのちに，以下のような研究課題を提起した。まず，高麗青磁の生産量の増大と普及の時期の問題。次に象嵌青磁出現以前の陰刻や素文青磁の変遷の問題。さらに象形青磁の問題。最後に高麗青磁衰退の時期と内容の問題である。そして，これらの問題の解決が日本出土の高麗青磁研究の課題であると説いた（今井1993a）。

註6　西谷は日本出土の朝鮮陶磁を5つの時期に分けて考えた。そして高麗青磁の日本における出土の確実な時期は11世紀中頃であるとし，12世紀の頃に陰刻・陽刻の文様が現れ，12世紀中頃から13世紀にかけて象嵌青磁が出現するとするとした（西谷1994）。
また最近の論攷では，日本出土の高麗青磁の出現は11世紀中頃以降とし「この年代が初期青磁のどの段階のものか」は今後の検討課題であるとしている（西谷1996）。

註7　一方，基礎資料の収集といった観点から，1989年（平成元）年から1991年（平成3）に長崎県教育委員会によって全県的に大陸渡来物の緊急調査が実施され，県内各地に伝世する中国産・朝鮮産陶磁器の実態調査が実施された（八尋1992）。

註8　南高来郡南有馬町今福（いまふく）遺跡・北松浦郡小値賀町神方（かみがた）遺跡・同町シャラジ遺跡・松浦市宮ノ下り（みやのさがり）遺跡・同市楼楷田（ろうかいだ）遺跡・東彼杵郡東彼杵町野中（のなか）遺跡の6遺跡である。

註9　鈴木は壱岐島出土の朝鮮産陶磁器を中心に考察し「14世紀から16世紀にかけての資料が多いこと」「朝鮮半島産の陶磁器を出土する地点からは，例外なく中国産陶磁器が採集される」ことなどを指摘している。

註10　このなかで水野は，象嵌青磁を含む高麗青磁として，木坂海神（きさかわたつみ）神社（上県郡峰町木坂）に伝世した７点と，佐護神御魂（さごかみみたま）神社（上県郡上県町佐護），豆酘（つつ）観音堂（下県郡厳原町豆酘），加志太祝詞（かしふとのりと）神社（下県郡美津島町加志）蔵の各１点計10点を掲載し解説を加えている。

註11　博多遺跡出土の初期高麗青磁皿は口縁部が輪花となっており，輪花をもたない本遺跡の資料とは異なる。

註12　すなわち，量産品で，胎土内の白色粒子が白斑状を呈し，釉は光沢が少なく，全面施釉後に高台畳付けの釉をふきとり，高台は荒く面取りされ，高台内にはヘソ状の突起を残す資料である。

註13　九州大学文学部　西谷正先生よりご教示をえた。

註14　近世の対馬における陶磁器の展開について，考古学的に検討を加えた論攷としては下県郡厳原町金石城跡出土遺物に関する下川達彌の考察（下川1985）や，同町桟原城跡出土遺物についての福田一志の総括（福田1995）などがある。

註15　宮崎は長崎県の遺跡の傾向として貿易陶磁の普及度が高いこと，松浦・大村湾地域と有明海沿岸地域とでは松浦・大村湾地域の貿易陶磁の出土量が多く，あきらかに両地域間に格差がみられること，そしてこの格差の原因は前者が「対外貿易・流通経路にのっていることに起因していることが推測される」とした。（宮崎1994）

註16　中島は「宮崎の見解は，肥前西部における食器研究の方向性を示しており，重要な視点を提示している。」と評価した。また中島は長崎県・佐賀県で行われている定量分析の方法論的な問題点もあわせて指摘している。

註17　このような貿易陶磁と国産土器の出土比率を示す中世の遺跡を本県本土部に求めると，西彼杵郡多良見町の伊木力遺跡（高原など1996）と，大村市坂口館跡遺跡の例が最も近い（宮崎1991・1994）。伊木力遺跡では12～14世紀を中心とした遺物包含層が調査され，そのうちのＢ地点では貿易陶磁が68％，国産土器が32％の割合で出土している。報文では当地の在地領主伊木力氏との関連が想定されている。坂口館跡では中世の土器・陶磁器のうち全体の72.3％が貿易陶磁であり，27.7％が国産土器である。坂口館における貿易陶磁の比率の高さについて調査者の宮崎貴夫は「本遺跡が大村家の重臣の屋敷であり，後に大村純忠が隠居所として居住したことと密接な関係をもつことが十分に考えられよう。」としている（宮崎1991）。坂口館の出土遺物は16世紀を中心とすることや，貿易陶磁の98％が中国製であるといった点で，本遺跡とは相違があるものの，伊木力遺跡とあわせ，中世領主関連の遺跡が近似した土器組成を示すことは，大石原遺跡の性格を考えるうえで大変興味深い。

註18　広島県立博物館の鈴木康之氏に広島県福山市の草戸千軒遺跡出土の壁土についてご教示をえた。それによると草戸遺跡で出土している壁土の多くは，木舞（こまい）の痕跡が残っていたり，外面を白く化粧した断片が認められ，繊維痕もだいたい確認できるという。また草戸で出土する小さい焼土塊は，それほど繊維痕が明瞭でなく，木舞の痕跡もないために，造り付けのカマドなどの断片の可能性もあると考えているとのことであった。ご教示に感謝する。

註19　奈良国立文化財研究所の松井章氏に同定していただいた。

［引用・参考文献］

赤司善彦1991「研究ノート　朝鮮製無釉陶器の流入－高麗期を中心として－」『九州歴史資料館研究論集16』九州歴史資料館

安楽勉・阿比留伴次・本田秀樹1993『大田原ヤモト遺跡』峰町文化財調査報告書第10集　峰町教育委員会

安楽勉・阿比留伴次1993『木坂海神神社弥勒堂跡』峰町文化財調査報告書第11集　峰町教育委員会

安楽勉・阿比留伴次1994「中世の対馬－朝鮮産陶磁器を中心として－」『長崎県の考古学－中近世特集』長崎県考古学会

池崎譲二・塩屋勝利1988『博多』都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第183集　福岡市教育委員会

稲富裕和1993「42長崎県」『日本出土の貿易陶磁　西日本編３』国立歴史民俗博物館資料調査報告書４　国立歴史民俗博物館

今井敦1993ａ「海を渡った高麗青磁」『ＭＵＳＥＵＭ第503号』東京国立博物館

今井敦1993ｂ「概説」『日本出土の舶載陶磁器－朝鮮・ベトナム・タイ・イスラム－』東京国立博物館

今井敦1994「対馬海神神社伝来の高麗陶磁について」『東洋陶磁22』東洋陶磁学会

宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗資料館研究報告ⅩⅦ』国立歴史民俗資料館
坂田邦洋1978『塚塔崎遺跡－対馬美津島町小船越所在の中世墳墓群－』美津島町文化財調査報告 美津島町教育委員会
下川達彌1985「陶磁器」『金石城』厳原町文化財調査報告書第１集　厳原町教育委員会
鈴木重治1985「松浦党にかかわる舶載陶磁器の検討－楼楷田遺跡出土の中国産陶磁器を中心に－」『楼楷田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会
高原愛など1996『伊木力遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第126集　長崎県教育委員会
中島恒次郎1995「肥前国における古代・中世の食器研究の現状－九州土器研究会　第５回を迎えるにあたって－」『九州土器研究会会誌第４号』九州土器研究会
西谷正1983「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化史研究所紀要第28号』九州大学九州文化史研究施設
西谷正1994「日本出土の朝鮮陶磁－高麗青磁を中心として－」『東洋陶磁22』東洋陶磁学会
西谷正1996「韓国陶磁と日本の交流諸問題」『東洋陶磁25』東洋陶磁学会
福田一志1995『桟原城調査報告書』厳原町文化財調査報告第４集　厳原町教育委員会
堀内明博1992「日本出土の朝鮮王朝陶磁」『季刊考古学第39号』雄山閣
堀内明博1993「日本出土の朝鮮王朝陶磁」『ＭＵＳＥＵＭ第503号』東京国立博物館
本田秀樹1995「対馬金田城」『古代文化　第47巻第11号』古代学協会
水野清一1953『對島－玄海における絶島，對馬の考古學的調査』東方考古學叢刊　乙種第六冊　東亜考古学会
宮崎貴夫1991「坂口館」『九州横断自動車道に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫1994「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」『長崎県の考古学－中・近世特集－』長崎県考古学会
宮崎貴夫1996「長崎県の中世墨書資料」『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会
森田勉1985「北部九州出土の高麗陶磁器－編年試案－」『貿易陶磁研究第5巻』日本貿易陶磁研究会
森田稔1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
森本朝子1984『博多出土貿易陶磁分類表』福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅳ,福岡市教育委員会,,
八尋和泉1992「陶磁調査概説」『大陸渡来文物緊急調査報告書』長崎県文化財調査報告書第107集 長崎県教育委員会
山本信夫1985「日本における初期高麗青磁について－大宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究第5巻』日本貿易陶磁研究会
山本信夫1990「統計上の土師器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『乙益重隆先生古稀記念論文集』
山本信夫1990「11・12世紀の貿易陶磁器－1980年代の編年研究を中心として－」『貿易陶磁研究 NO10』日本貿易陶磁研究会
山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
吉岡完祐1985「博多遺跡群出土の朝鮮陶磁器－17・20・22次調査より－」『博多Ⅲ－第17・20・21・22次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集 福岡市教育委員会 横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

附　　編

1．はじめに

以下紹介する遺物は，対馬最大の河川上県町佐護川河口部に位置する小坂（こさか）遺跡からの表採遺物である。小坂遺跡は大石原遺跡から南へ4kmほど離れた地点にある。もともと古墳時代の包蔵地として周知されていたが，その中に含まれる神御魂（かみみたま）神社の境内が遺跡の中心地と思われる。

佐護川流域は対馬においては最も広域な扇状地を形成している。本土部とは比較にならないほどの狭小な面積ではあるが，この地域には大正時代に故後藤守一による発掘調査によって発見された4本の銅矛や銅鏃が出土した佐護クビル遺跡や，明治時代鳥居龍蔵によって注目された各種青銅器が出土した佐護白岳遺跡などが知られており，弥生時代から古墳時代にかけて栄えた地域でもある。

表採遺物は，大石原遺跡出土ではないため別に稿を改めるべきであろうが，対馬を語る上で重要な遺物と考え，この機会に本書に併せて掲載することとした。

2．鏡（第27図・図版⑦）

1は菊水双雀鏡または，擬漢式鏡でいうII類に相当する(註1)。直径10.4cmで，外縁は直角式中縁である。内区意匠は流水と菊花双雀を配し，亀紐を据える。6窠文形圏界を有するが，界圏の形態は窠文の痕跡を留めている。また，界圏外側の文様体には断続連珠文を巡らしている。鋳あがりは良好である。このような特徴をもつ鏡は14世紀後半から15世紀の所産とされている。

2は菊双雀鏡である。やはり擬漢式鏡II式に相当する。直径7.7cmで外縁は直角式中縁で，内区には菊と双雀を配し，断面台形の亀紐を据える。**1**と同じく6窠文を界圏とするが，更に退化した形となっている。内区双雀と亀の双雀の嘴が接する形式である。鋳あがりは悪く文様が不鮮明である。時期的には1より更に後出し，15世紀から16世紀まで下がるものであろう。

3は素文鏡である。推定直径6.8cmである。外縁は蒲鉾型を呈している。鋳あがりは悪く，いびつである。

（高野）

3．陶磁器

(1) 陶質土器（4）

4は陶質土器の瓶子で，口唇部をわずかに欠損する以外は完形である。器高7.7cm，口径3.2cm，胴部最大径5.3cmである。口頸部ならびに肩部には自然釉がかかる。胴部中位には連続して指紋が残る。底部外面の調整はロクロより切り放したのち，ナデたものとみられるが，焼成時に火膨れをおこし，凹凸が生じている。5世紀代のものか。

(2) 高麗象嵌青磁（5）

5は白土と黒土の重環の中に草花文を飾っており，釉は黄緑色を呈する。器形は不明である。

(3) 青磁（6～8）

素文と思われる青磁片を一括した。**6**は高台径5.7cmの椀片である。高台は低く，高台裾は開かず，内傾する。高台畳付けから高台内にかけて4つの砂状の目跡がある。釉薬に閉じこめられた付着土もあり，粗製品といえる。**7**は高台径3.3cmの小椀片である。底部は碁笥底状をなし，底部内面は露胎で

ある。小さな目跡が２個残存する。

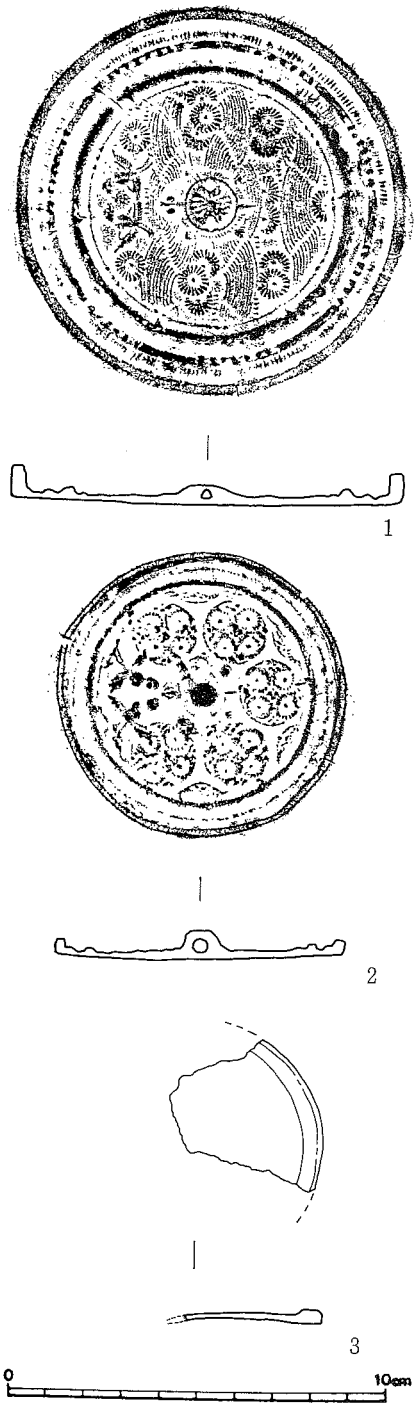
8 は瓶の口縁部から肩部の破片である。粗製の高麗青磁と考えられる。表面には白斑が縞状となって幾筋も巡っている。粉青沙器の刷毛とは異なる。大石原遺跡の第22図**126**に類似する。

(4) 粉青沙器（9～14）

9 は白土と黒土を象嵌した瓶の胴部片と思われる。文様は草花文や波状文などで構成されるようだが，全体に粗略の感が否めない。内面は露胎で，ロクロの水引痕がよく残る。高麗青磁の系譜をひく窯で焼成されたものと考えられる。**10**は高台径5.5cmの椀片である。内面見込にかすかに圏線が巡る。圏線内には白土による象嵌があるようだが判然としない。高台は低く，高台畳付けの幅も一定しない。高台内には砂粒が付着する。

11は瓶の胴部と思われる。上部に雨滴文，下部に一条の圏線が回る。釉は暗緑色で，内面は露胎である。**12**も瓶で，底部片である。高台径5.0cmで，高台は低く，畳付けの幅は広い。高台内にも釉がかかり，砂粒が付着している。高台内は若干隆起し，砂粒が付着する。上部には数本の圏線が巡る。内面は露胎である。**13**も瓶の一部である。縦に白土による２本の圏線と黒土による１本の圏線そして横に数本の白土による圏線が回る。内部は縄簾文で飾られる。内面は露胎である。

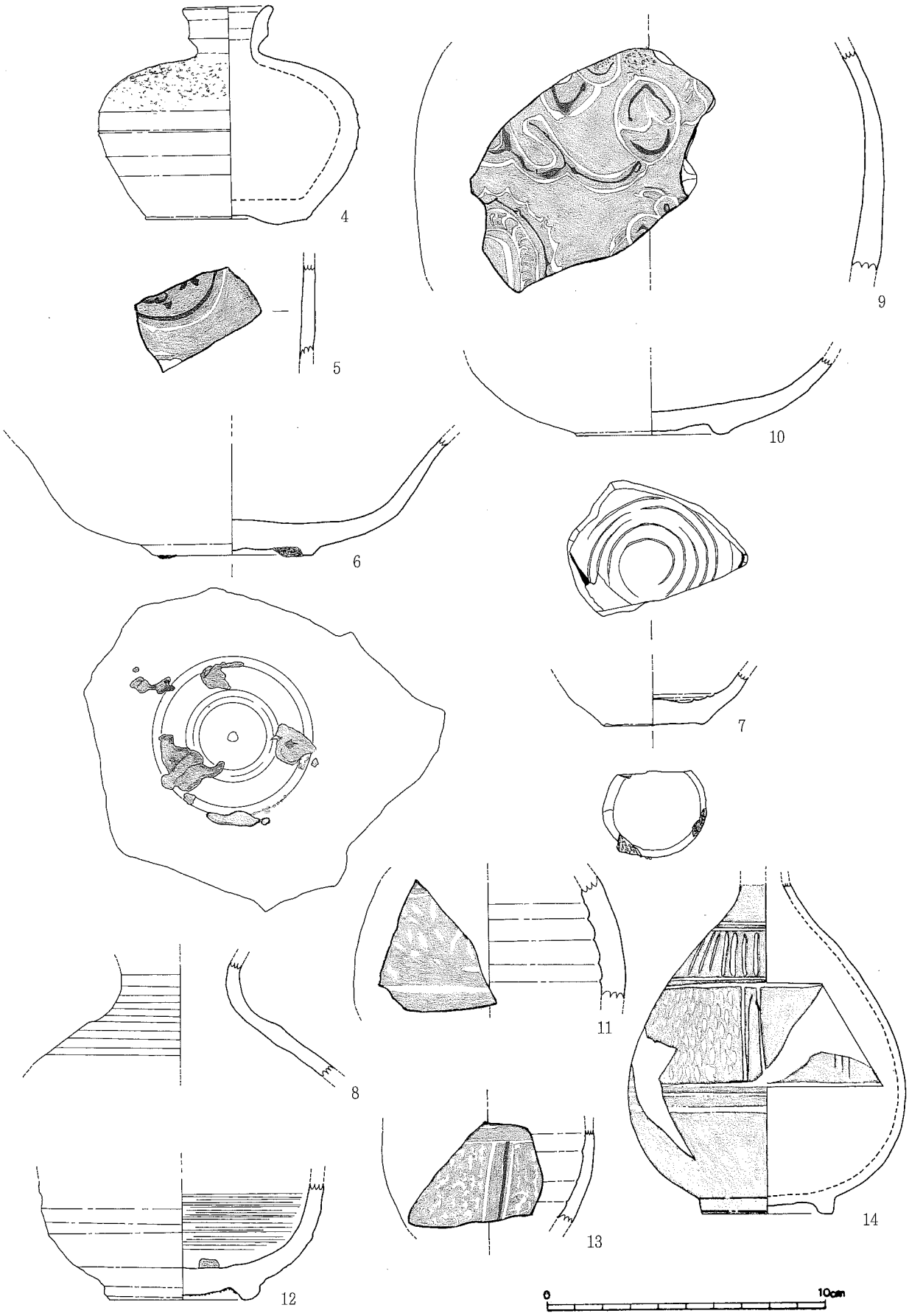
14も瓶で口頸部を除いて，半分が残存する。数本の白土の圏線によって胴部文様帯は２つに区分される。上段の文様帯には白土による放射線が描かれ，下段の文様帯は縦の圏線により４分割されるようで，そのうちの２面には雨滴文が飾られ，他の１面には黒土の放射線が疎に施される。欠失した残りの１面は不明である。高台径は4.6cmで，高台は低く，畳付けには砂が付着する。



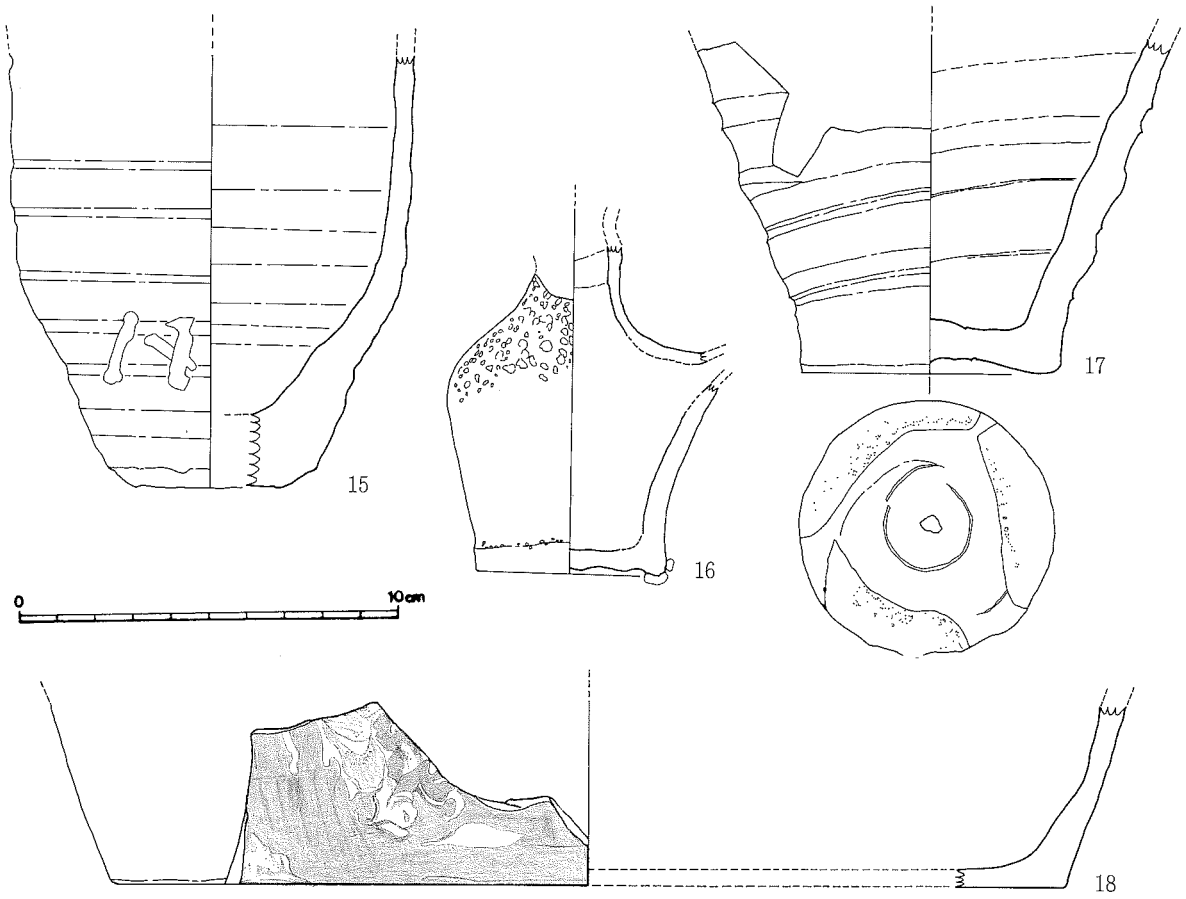
第27図 佐護小坂遺跡表採古鏡
（S＝1／2）

(5) 施釉陶器（15～18）

15は瓶の胴部および底部付近である。内外に暗褐色の釉がかかる。素地は赤褐色である。外面に施釉後の擦過痕がある。ヘラ記号の類ではないようである。底部の詳細は損壊して判然としない。**16**は注口と口頸部を破損した水指である。外面に黒釉がかかる。肩部は焼成時の灰がかかる。底部外面は



第28図　陶質土器・青磁・粉青沙器（S＝1／2）



第29図　施釉陶器（S＝1／2）

露胎で，素地は灰黒色である。**17**は瓶の胴部・底部片である。褐釉がかかり，底部外面にも施釉されている。3つの釉剝ぎされた目跡があり，素地は淡赤褐色である。**18**は底部付近の破片である。釉は褐釉で，底部外面にもかかる。内面は施釉されず，素地は灰色である。

以上の陶磁器は，5が麗末李初の14世紀後半の時期であるほかは，15世紀以降の朝鮮王朝陶磁器と思われる。

（古門）

［註］

註1　青木　豊「所謂擬漢式鏡に関する考察」國學院大学考古学資料館紀要　第13輯　1997

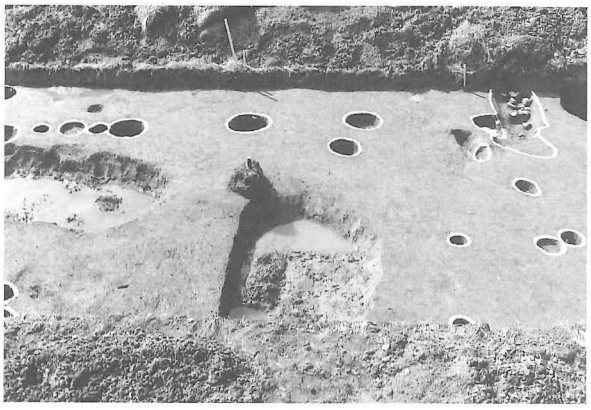
図　　版

図版①　調査区遠景・近景

調査区遠景

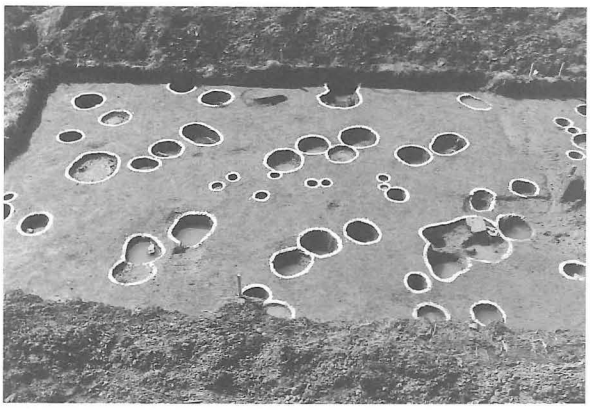
調 査 風 景

第 1 区近景(東から)

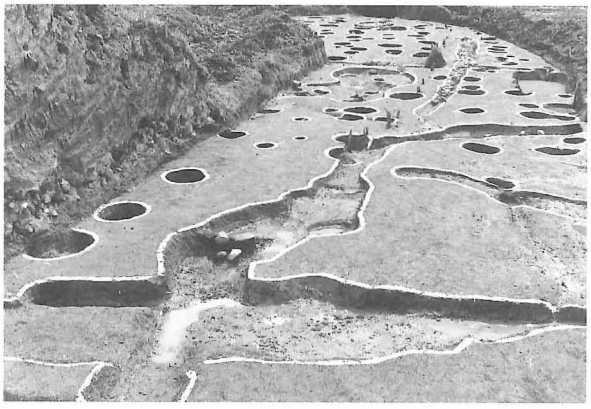


第 1 区近景(東から)

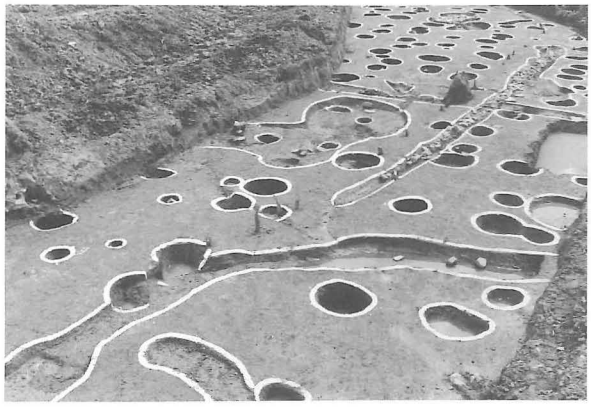
第 2 区近景(南から)



第 2 区近景(東から)

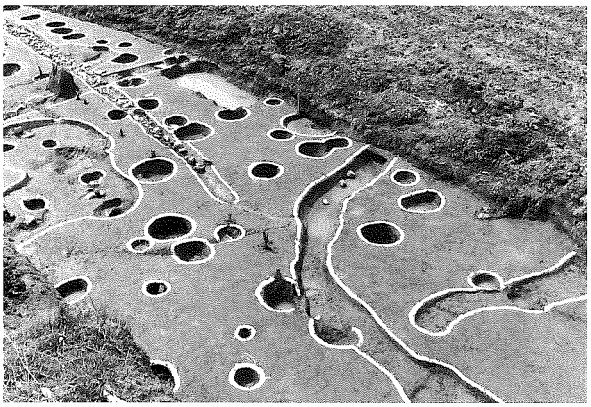


第 3 区近景(北から)



第 3 区近景(北西から)

図版②　調査区近景

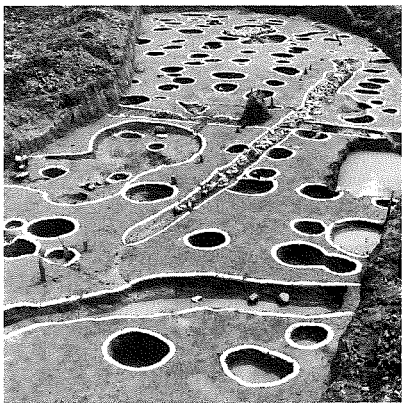


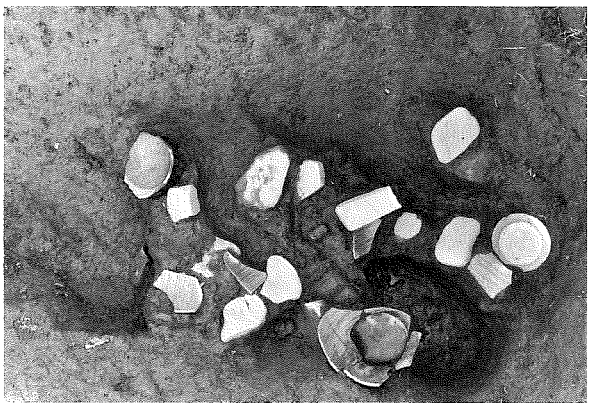
←第３区近景
（北東から）

第３区近景→
（南から）

↙第３・４区
（北東から）

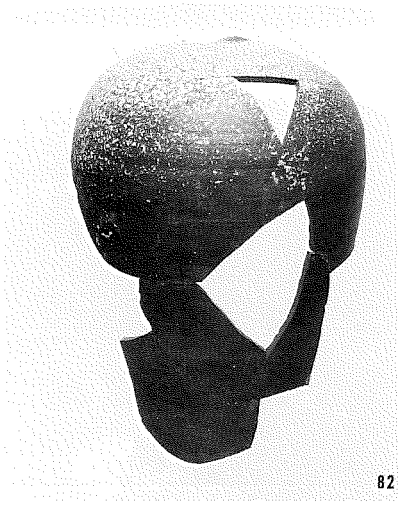
第４区近景
（南東から）↘



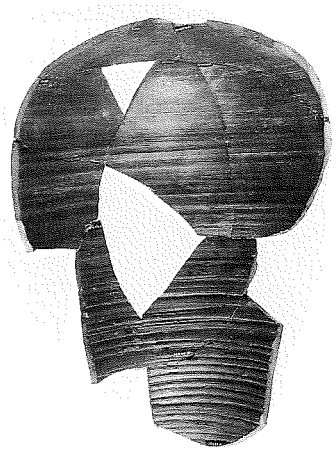


ＳＫ１遺物出土状況

ＳＫ３，４，５（南から）



82



82

図版③　大石原遺跡出土遺物①

63

63

102

102

103

103

23

23

図版④　大石原遺跡・佐護小坂遺跡出土遺物①

81

81

124

124

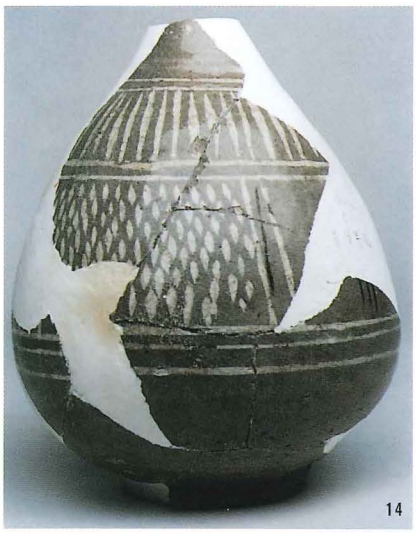
123

123

佐護　4

佐護　4

図版⑤　佐護小坂遺跡採集遺物


14

14

16

16

12

12

17

17

長崎県教育庁埋蔵文化財センター遺跡調査事務所

図版⑥　大石原遺跡・佐護小坂遺跡出土遺物②

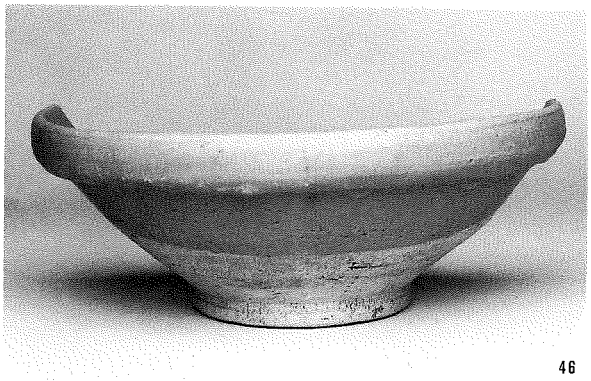
外　面

大石原遺跡

佐護小坂遺跡

内　面

図版⑦　大石原遺跡・佐護小坂遺跡出土遺物③



46

90

110

110

79

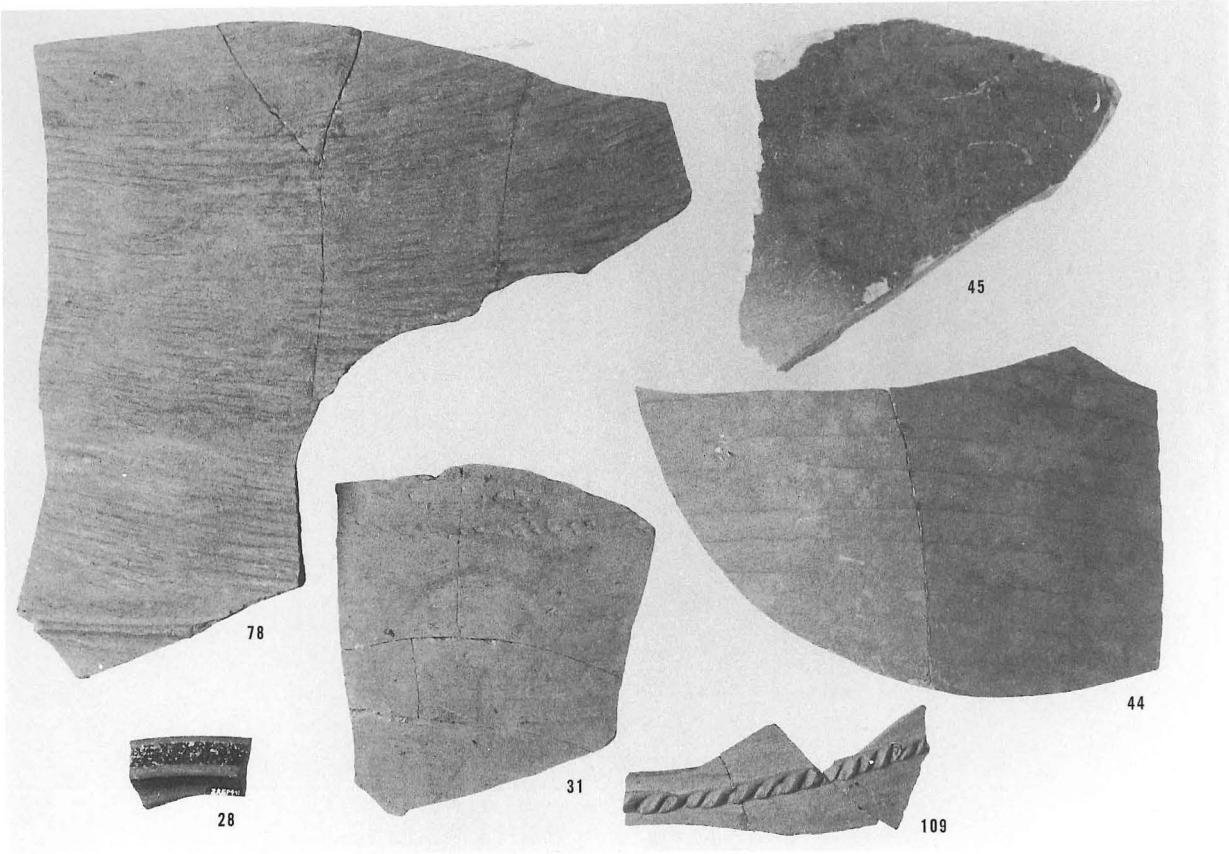
佐護　1

佐護　2

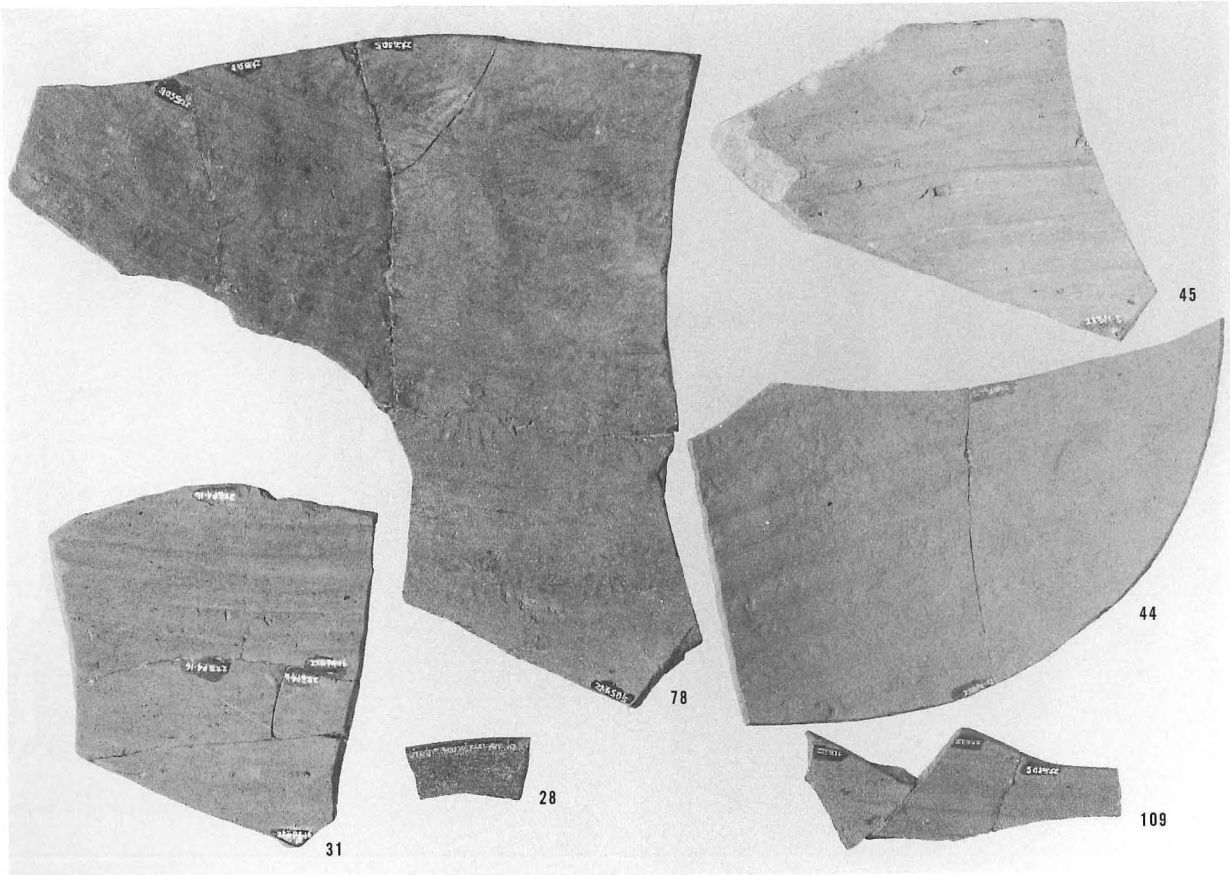
佐護　3

図版⑧　大石原遺跡出土の朝鮮製無釉陶器

外　面

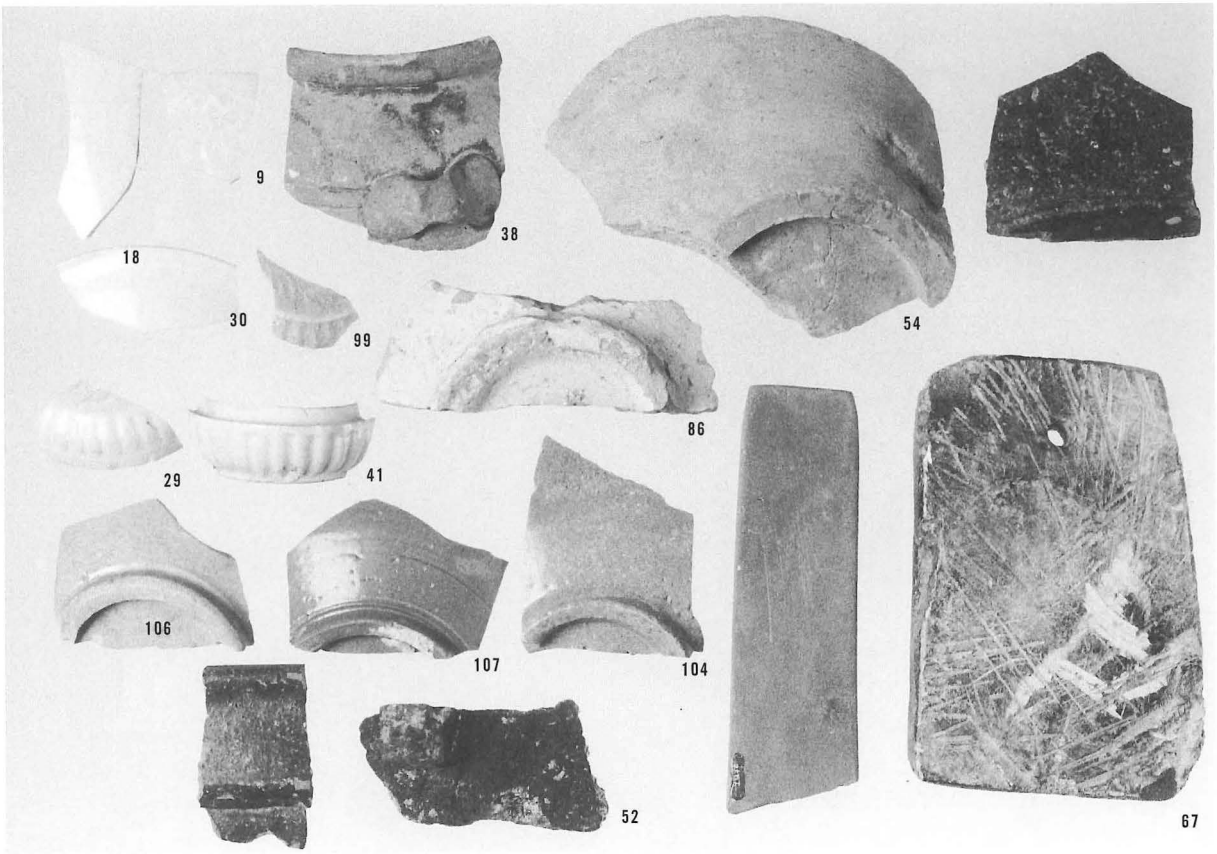


内　面

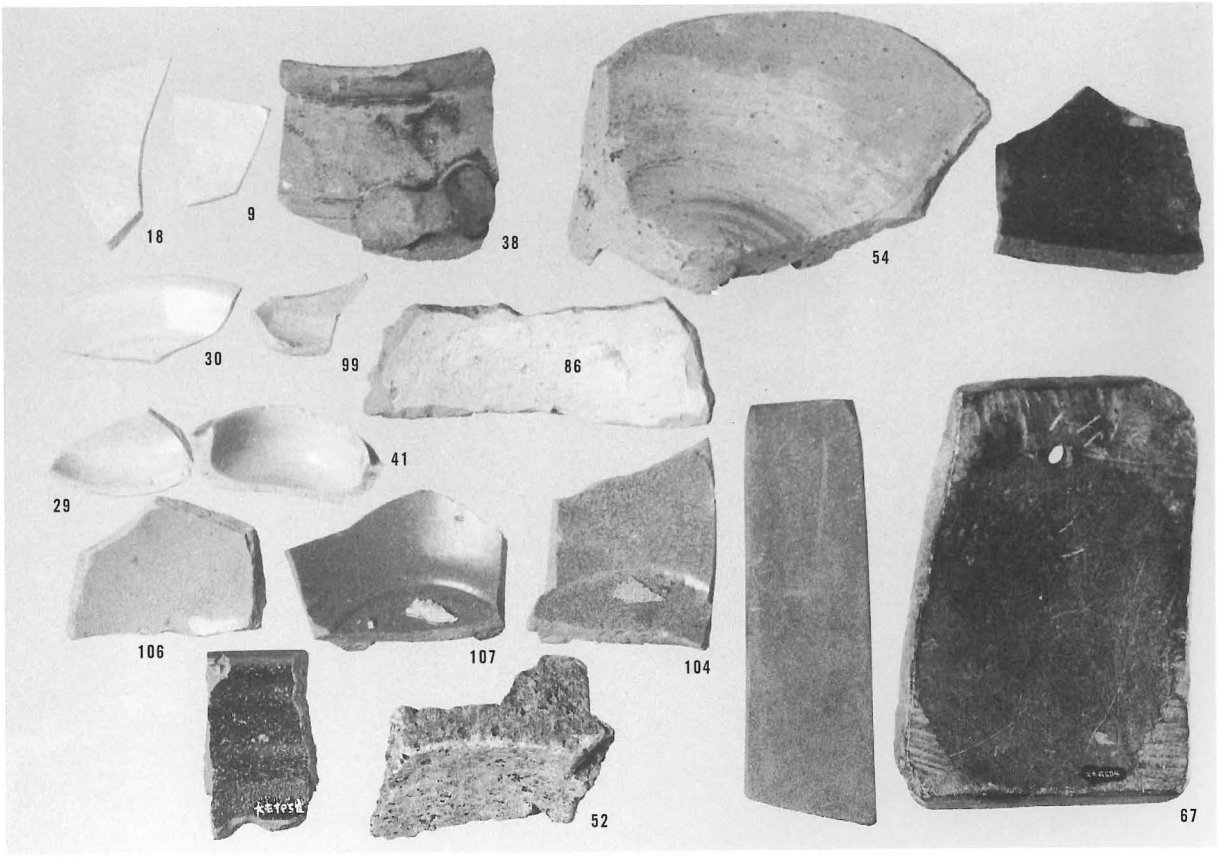


図版⑨　大石原遺跡出土遺物②

外　面

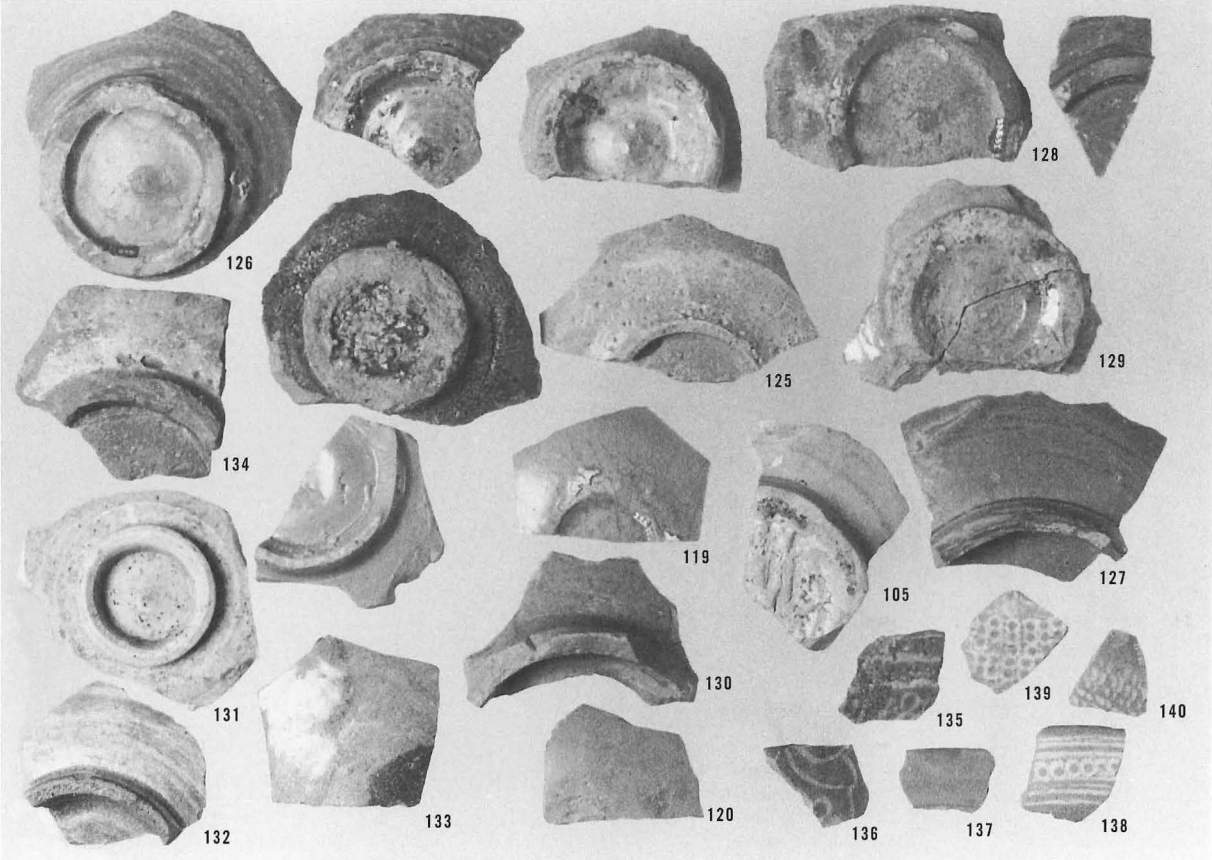


内　面

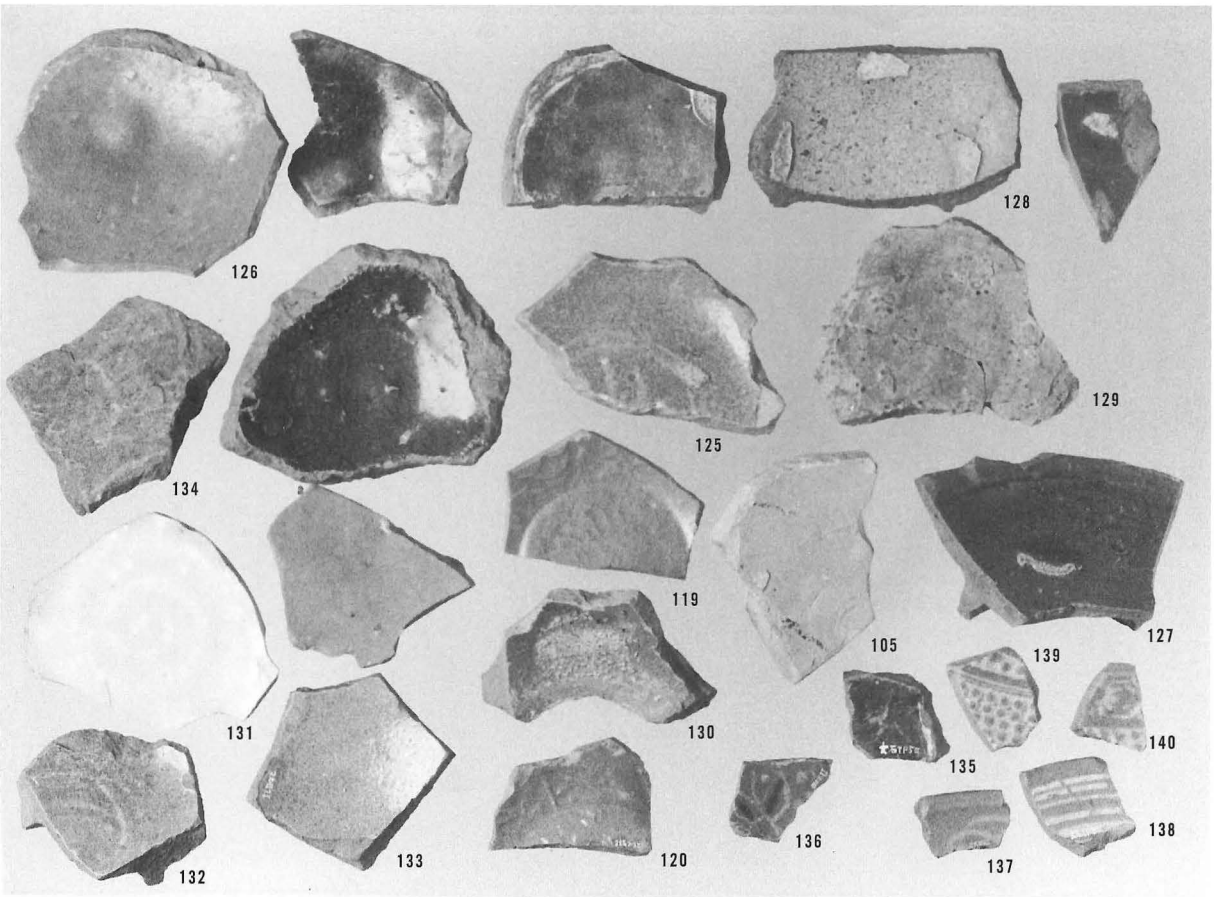


図版⑩　大石原遺跡第１・２層出土朝鮮製陶磁器

外　面



内　面



報告書抄録

ふりがな	おおいしばるいせき
書名	大石原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	上県町文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	高野晋司・古門雅高
編集機関	長崎県上県郡上県町教育委員会
所在地	〒817-16 長崎県上県郡上県町大字佐須奈甲567-3　TEL09208(4)2311
発行年月日	西暦1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
大石原遺跡（おおいしばる）	長崎県（ながさきけん） 上県郡（かみあがたぐん） 屋敷畑（あざやしきはた）	42445	39	34° 1′ 50″	129 21′ 59″	19950227 ｜ 19950317	297m²	農道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大石原遺跡	遺物包含地 中世集落跡	中世	柱穴 土坑 溝	中国製陶磁器 初期高麗青磁 朝鮮王朝陶磁器 獣骨	対馬島初の掘立柱建物跡 多量の貿易陶磁

上県町文化財調査報告書第１集

大石原遺跡

平成８年３月29日

発　行　上県町教育委員会
長崎県上県郡上県町大字佐須奈甲567-3
TEL 09208－４－2311

印　刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957－22－6000